始

361
278

ニ48M9
361-278

緒言

本誌の編纂を企てたる所以は居常生産地の狀況を審かにし取引上の便益を增進せしむる意思に外ならず昨夏之れが計劃を江湖に發表し實地調査に着手するや事豫想に反し行路嶮にして一地域に旬日を費す場合尠からず爲めに一歲の星霜を閱し漸く結了を告げたり然れども發行日時の關係上南海、九州、北海道の各地を網羅する能はざりしは千慮の一失たるを免かれず故に本誌に漏れたる主要產地は稿を改め順を逐ふて隨時薪炭新報紙上に揭載し其の足らざるを補塡せんとす乞ふ諒せられよ焉。

惟ふに歐洲戰禍發生以來各種の工業滔天の勢ひを以て勃興し薪炭の需用日一日に增加の趨勢を示せるより當局にあつても夙に見る處あり副業奬勵事業中最も薪炭に重きを爲し施設其他に最善を盡しつゝあるも今日の狀勢より考察すれば或は需給相伴はざる場合なきを保し難し此の秋に際し本誌を座右にせば臨機の明案自然に浮び出づべく市場に於ける問屋は素より地方荷主の稗益多大なるを信ずる者也。

編者識

大正
7. 8. 17
内交

全國薪炭主要生産地荷主案内誌

目次

栃木縣……一
兩毛線沿線——日光線沿線——眞岡線沿道——東北本線沿線
福島縣……三
東北本線沿線——白棚線——海岸線沿線——磐越東線沿線——磐越西線沿線——越後津川
山形縣……七
奥羽線沿線——陸羽西線
秋田縣……八
奥羽線沿線
千葉縣……九
木更津線沿線——房總線沿線
茨城縣……一〇四
稻敷郡——新治郡——行方郡——鹿島郡——西茨城郡——常總線沿線

大五 7 8 17 内交

目次

水戸近在——太田近在——多賀郡

宮城縣……一二九

東北本線沿線——鹽釜港——石卷町——陸羽東線沿線——新田近在

岩手縣……一三九

東北本線——一の關——水澤——黑澤尻——花卷——石鳥谷——盛岡——沼宮內——

小鳥谷——一戸——福岡——金田一

青森縣……一四三

三戸——尻內——野邊地

八戸……港……一四七

岩手縣東海岸……一五四

九戸郡——下閉伊郡——陸前氣仙郡

和歌山縣……一七八

日高郡——西牟婁郡——東牟婁郡

三重縣……一九九

飯南郡松坂町

福井縣……二〇六

越前敦賀港——若狹小濱港——若狹本郷港——若狹遠敷郡——小濱線——北陸線

大阪市場取引案內……二一七

名古屋市場取引案內……二一八

豐橋市場取引案內……二三二

靜岡縣……二三四

榛原郡——靜岡市安倍郡——志太郡——庵原郡——富士郡——田方郡——賀茂郡——駿東郡

山梨縣……二五八

上野原——四方津——鳥澤——猿橋——初狩——笹子

長野縣……二六五

諏訪。松本。麻績方面——長野——上下水內郡——上下高井郡——往鄕信用生產組合——

南北佐久郡

新潟縣……二七九

新井町——信越線沿線各產地——新潟市場——村上線沿線——魚沼方面——寺泊港——

佐渡郡——西頸城郡

目次

石川縣……三〇二
能登七尾地方——加賀鶴來町
埼玉縣……三〇九
秩父組合地區內——寄居町——川越町——所澤町——飯能町——八王子市場
神奈川縣……三一九
津久井郡——足柄上郡——中郡——小田原市場

京濱及近郊市場案內 目次

東京市場取引案內……一……七八
横濱市場取引案內……七九……九六
横須賀市場取引案內……九七
相州平塚町市場案內……九七
千葉縣各地市場案內……九八……一〇〇
埼玉縣各地市場案內……一〇一……一〇六
茨城縣古河町結城町案內……一〇六……一〇八

全國薪炭主要生產地並荷主案內誌

薪炭新報社主幹　大竹群次郎　編纂

栃木縣

兩毛線沿線

◎總說　兩毛線沿線に於ける野州木炭は其歷史甚だ古く、俵の化粧面を葉の付着せるソダに飾りありて人目を惹き品質の稍々優良なるより之が市場への入荷は中央市價の高低を左右し來れる昔日の面影は、今は唯業者の語り草に殘りあるのみにて當今にては土地の需要をさへも反つて奧羽地方より仰ぐの有樣なり、されど右は一般より下すの評にして中には中央都市及其他の市場へ移出をなすものなきにあらず、左に各地別としてそれ〴〵述ぶる

所あらんとす。

◎**栃木驛**　下都賀郡南部の林地深澤、眞名子、久野、南麻、栗野、粕尾、鍋山、方面の產蝟集し、年產出額約八十萬貫(內譯楢堅二十萬貫、雜堅三十萬貫、楢雜交り三十萬貫)を算出し得べく、俵裝は大俵亂貫にして九貫乃至十三四貫、平均十一貫內外と見ば大差なからん、其種類は全部白消製法にて堅炭なり、而して逐年土地及附近に於る需要の激增せると薪炭林の不足せるとにて供給著るしく減退し、爲に東京市場へ移出さるゝもの全く跡を絕ち、僅かに大正五年度に於て、武州粕壁へ二百四十噸、杉戸へ七百五十三噸、久喜へ百三十噸を出したるのみにて、一方に於ては靑森縣湊より二十七噸、福島縣野澤より四十五噸、山形縣米澤より百〇四噸、眞室川より八十二噸、秋田縣橫手より五十三噸の補給を受くる需供の關係にあり、猶此の外同町北川木材乾餾所に於て木醋酸を製したる副產物として、木炭年額一萬九千二百貫の生產あるも大方は官衙並に附近に於て需要され、之れ又中央市場への移出あるを聞かず。

◎**高島河岸**　野州船積物の出荷地にして下都賀郡三鴨村を始め、小野寺一體の地方より移出さるゝ木炭も漸次中央市場への移出數量減退の傾向あり、今岩船驛を狹みて以上南北兩村の概況を述ぶれば、三鴨村は全く中央移出を主眼として、椚土釜七千五百貫、楢土釜一萬七千六百貫、並に少量の薪を產出す、而して品質にありては優良なりと雖も生產はかく小額なるに加へ、炭林の如き伐採し盡したるものゝ如く前途樂觀を許さゞるものあり、然るに本地產の需要としては料理店又は高等旅館下宿屋等の客間の火鉢用として所望さるゝ向を增しつゝあり、東京向島水神の八百松淺草山谷の八百善等を始め東京市內著名の料理店に於て旺んに需要するに至れり、小野寺村は岩船驛を距る北方約一里全く黑消の產を見ずして白消一方なり年額としては八萬二千五百貫を出し、佐野、館林等の需要地に吸引され東京へ移出さるゝ額は殆んど微々たるものなり。

同地方炭林蓄積に至りては、小野寺全村を包圍する山脈南北三里東西一里半に亘り裕に四千五百町步を占むるも、該地方は川除工事に使用するソダの產地とて矮林のみ多く木炭も亦丸物にて割物を出す餘地なく產額亦逐年減退の一方にあり。

◎**佐野驛**　を語るには先づ越名川岸を記さゞるべからず、兩毛線開通以前に於て東京市況を支配したる佐野產は悉く越名河岸に船積し、渡良瀨の川面に浮べて關宿に出で、帝都を指して下りたる大傳馬も、今は漸く衰へて、佐野町亦た他の生產地より木炭の需要を仰ぐ

に至れり、即ち大正五年中、大石田、及位、釜淵、新町、野邊地、沼宮内、野澤、方面より同町への入荷は大部の土釜木炭と小量の堅炭とを合して三百三十六噸の移入を示せり、從て土地產仕向地としては上州館林を第一位に、越名河岸より東京淺草方面、千葉縣杉戸野田方面に年二萬千六百貫内外の輸出を見るのみにて、唯製茶の時期に於て幾分の量を增すのみ、而して生產地としては、野上、秋上、等安蘇郡北部の山地なるが、何れも佐野町を距る七里以上を隔て運輸交通の便全からず、年產額は以上土釜物に加ふるに檜堅、雜堅を出し兩者合して四十萬貫の產出を見るなり、されば此種堅物に於ては東京市場へは輸出せず、多くは佐野町より館林方面の需要に供給さるゝのみ、此の外東武線の終端驛葛生地方より備長に酷似せる木炭の製產を見るも極めて少量なり。

薪は相當の輸出なきにあらねど、越名河岸は每年一月より四五月の頃迄河水涸れ舟楫の便宜しからざるも、一方東武鐵道が薪に對し破格の低價運賃を以て輸送に應する爲、舟便に據るの要を認めざるに似たり、本品の仕向地は當今としては東京淺草、本所、府下澁谷等にして檜雜大束を出し年產額二十萬貫内外なりとす。

◎**足利驛**　業界に名を列ぬるもの必す其餘澤に憧憬の念專らなるべき、計炭家の元祖鹽原多助は津輕屋敷の豪壯と共に、東京本所の名物として今も猶俗謠に殘る出世談は永久に業界史の誇たるべく、而かも其多助を援けて當時千兩の大荷物を僅かに山口屋の一手代に過ぎざりし多助との前約を履み、無爲替を以て送荷したる吉田八右衞門が出生の地彥間は此足利町を距る五里餘の地點にあり、多助が力行、八右衞門が剛腹、俱に共に千古不滅の美談をなすもの亦一面に於ては此附近一帶地の利の宜しきを得たるにもよらん、從つて足利町が業界に對する沿革は極めて古く、近年に至るまで東京市場を中心として商戰を試み來りたるも、交通機關の發達並に製炭地の狀況及地方需供の變移より、今日は寧ろ他地域より移入を仰ぎて附近の需要を充しつゝあるの狀にて、即ち大正五年度に於て四十三萬一千一百六十貫の入着あり、之等供給地は奧羽本線、米澤、大石田、眞室川、釜淵、及位にして入着全體の三分の二を占め、上州澤入並信越方面よりの分三分の一に當れり、而して足利驛よりの產出は彥間の堅炭產額十九萬六千三百餘貫を第一とし、他には特に記すべき程の產地なき爲、近時同町の荷主は遠く奧羽並に磐越方面に炭林を需めて製產に腐心しつゝあり既に小掘組製炭所の如き磐越線上戸驛より二里を隔てたる官有林二千町歩を領得し十五ヶ年の輪伐法により黑消白消を合して每月七萬五千貫の製炭高を示すべく既に事業に着

手せり。

◎**澤入驛**　上州桐生町より足尾線に移りて、足尾銅山通洞驛近く進めば海拔二千三百尺の地點に澤入停車場を見る、峨々たる翠巒近く四顧に迫りて渡良瀬の急流に倒影を映する處大理石滿岩と共に薪炭の生產地として夙に業界に其名を知られ、兩毛、東武、兩鐵道の沿線並に足尾一帶は悉く澤入木炭の供給を仰ぎつゝあり、即ち大正五年度に於て各地へ移出したる數量は

足尾本山へ二二二〇俵、桐生へ二〇七二俵、太田へ九二五俵、足尾間藤へ六二一六俵、足尾銅山へ九一〇二俵、通洞へ八一二九俵、原向へ四一四四俵、神土へ四八一俵、花輪へ一七七六俵、水沼へ三三三俵、上神梅へ二九六俵、大間々へ三四五二俵、桐生へ一八五俵、足利へ九〇一〇俵、佐野へ四三六六俵、小山へ七七八俵、蕨へ六六五俵、大宮へ二五九俵、東京秋葉へ一六六五俵、大塚へ一六二八俵、品川へ五九二俵、巢鴨へ五一八俵、淺草へ五二〇俵、府下蒲田へ二九六俵、上州館林へ五五五俵、境へ二五九俵、田沼へ二六二俵、埼玉川口へ二五九俵、茨城粕壁へ一一二俵、合計九萬三千百十五俵の產出額に達せり。

前揭の如く山岳重疊たる澤入驛は製炭の材料亦極めて豐富にして、東全村を包圍する山林の面積實に一萬四千町歩に達し、僅かに澤入の一角のみを以てしても六千町歩を超え、之に花輪、田中　座間、草雉、等を合したる六千五百町歩は殆んど其九分が民有地にして官有地は僅々一分を占むるに過ぎざるも、同地は渡良瀨の水源涵養の爲悉く保安林なるを以て、業界の市況によりて生產額を增減するを得ず、一定の輪伐法により毎年伐採すべき區域定まり居りて製炭高亦逐年大同小異あるのみ品種は堅七分土釜三分の割合にて楢雜各々其半數を占む、最近更に椚の殖林を行ひつゝあるも未だ伐採製炭するまでに至らず。

◎**足尾驛**　通洞、足尾、間藤、の三驛を有する足尾銅山の消費薪炭は前記澤入驛よりの供給以外に、足尾銅山林業部に於て產出する木炭年額五十萬貫薪二萬四千束は僅かに銅山の社員以下使用人勞役夫の家庭用にのみ需要せらるゝと云へば、鑛業用としては是非其他より購入せざるべからず。

之れを要するに、兩毛線は漸次東京市場とは沒交涉たるの傾向ありて、多く地方の需要に應するものにして近年石炭の市價暴騰並に其他の燃料の高價なると、一般經濟界の好況なるに伴ひ各種產業に關する燃料として木炭の需要激增せる結果、各產地共地方の需要を

充すことすら供給不足を來して、到る處中央市場よりも一層氣丈なるが如し、

◎荷主　兩毛線沿線に於ける荷主左の如し

栃木縣栃木町緑町
介印萬盆用煉炭製造元
木炭輸出商　増山仙之助

栃木縣栃木町河合町
木炭問屋　高山平三郎
電略（タカヤ）

栃木縣足利町東町
薪炭問屋　山浦藤五郎
（萬石屋號）電略（ヤマト）

栃木縣足利町
薪炭機具商　關口熊太郎
電話七二三番　電略（セキ）

栃木縣栃木町旭町
木炭輸出商　片柳菊治
電略（カタ）又（カ）

栃木縣佐野町
木炭輸出商　田尻清七
電話　二四七番

栃木縣足利町四丁目
薪炭問屋　和田直三郎
電略（ワタ）

栃木縣足利町東町
木炭問屋　星野富次郎
電略（ヤマホ）

栃木縣足利町横町
木炭問屋　五島商店
電話八四八番

木炭商　山本光三郎　栃木縣足利町家寄町

木炭商　小林軍次郎　栃木縣足利町七丁目

木炭問屋　村井彌市　足尾線澤入驛

木炭問屋　野田屋　足尾線間藤驛

木炭卸商　山口金次郎　栃木縣足尾町松原二七〇八

◎小掘組製炭所の製炭事業（主任關口熊太郎氏の抱負）

足利町に於ける業界一方の重鎮として聞えたる同町二丁目關口熊太郎氏は、夙に磐越沿線の山野が製炭に最も有望なるを知り數年前より自ら實地踏査を試み、窃かに畫策して今後の飛躍を目論見つゝありしが、漸く去大正五年の夏季より上戸驛を距る僅かに二里、通俗濱路山と稱する面積二千町歩の山林の所有權を得て、小堀組製材製炭所の名稱の下に昨秋より事業を開始せしに、木材木炭の價格は數十年稀有の活況なるに加へ、而かも東京市場は需要の激増に依つて需給の不調節は益々其度合を高めて益々奔騰を續けつゝあるより、一般需要者の苦痛深刻なるべきを察し、市價調節と需給の調和を圖らん爲、從來八十竈使用人六百人なりしを擴張して竈數二百個使用人二千人の大計畫のもとに目下從業しつゝあり、其產額は十五ヶ年の輪伐法を用ひ檜雜五貫十貫俵取交ぜ一ヶ月約一萬五千俵を製しつゝありと。

日光線沿線

◎今市驛　日光線に於て最も主要なる產地は今市町なりとす、明治三十一年同驛開通以來は愈々產出額を激增するに至り、全く東京市場を中心とし之に加ふるに茨城縣古河方面並に埼玉縣川越地方に仕向くるに至れり、今最近に於ける移出額を點檢するに大正四年度に於て三十七萬五千四百俵、大正五年度に於て二十八萬三千六百四十二俵を示せり、而して五年度は何故に減退したるやと云ふに、即ち四年度の末期に於て市價の高氣配に促され、荷主は競ふて中央市場へ送荷したる爲にして五年度に於ても市場益々好調なりしも製炭人夫又は原料林等の準備意の如くならざりしを以て前年度に比して不足を現はすに至りたるなりと云ふ、而して五年度移出先は

埼玉大宮へ三九一四六俵、東京隅田川へ三一五二四俵、王子へ一九一〇三俵、秋葉へ一五九一〇俵、惠比壽へ一一八七七俵、池袋へ六六二三俵、淺草へ九三二四俵、品川へ三七七五四俵、目白へ四五一四俵、埼玉川越へ四六九九俵、茨城古河へ三五四四六俵、合計二十一萬五千九百二十俵にして薪は四十萬三千二百束の移出を算せり。

品種は大部分は土釜にして川越方面に輸送さるゝものは專ら製茶用に供せらるるなり產出地としては鹽谷郡の藤原、船生、河內郡の大澤、篠井、豐岡、の外福島縣南會津郡並に群馬縣國境の一部なり尙產地中藤原方面は堅炭の產出多く昨年度（六年）に於ては鐵道院の使用赤目八萬四千貫を、八月より本年三月に亘る八ヶ月間に納入すべき契約ありき然れども近年赤目の產出高は漸く全部に對する三分の一即ち約八萬五千九百俵に過ぎず、而かも多く日光、宇都宮、等の需要に供せられ居るを以て、果して鐵道院との契約を遂行し得たりしか些か疑問なき能はず殊に附近の炭林は稍々伐採し盡されんとするの傾向ありて自然に奧深く進まざれば能はざるの現況なり、

◎鹿沼驛　木炭の產地にあらずして日光線沿線に於ける薪の主要生產地と云ふを得べく其一斑は大正五年度に於ける移出數量に見ても明かなりとす、即ち薪に於て千五百五十五噸木炭に於ては千三百十噸を數ふるのみ、而して薪の仕向地は東京隅田川へ千二百三十九噸新宿へ二百九十五噸、巢鴨へ十四噸、澁谷へ七噸にして、木炭は府下大崎驛を始め、山手線各驛へ分配せられたり、されど鹿沼市場を始め附近一帶の需要に對しては今市より全體

に對する約二割の供給を仰ぐの外、東北本線花輪並磐越線各驛よりも入荷を見つゝあり、薪の林源地は大部分郡の西北部草野より鹿沼に通する山林一帶なるを以て、最近宇都宮近郊にて建築石材の產地たる大谷の花崗石を滿載し荒針より鹿沼、宇都宮の中間驛鶴田に輸送さるゝもの漸次多きを加ふるの傾向ありて運輸上の繁雜を來さざらんやを憂ふるものなり而して同地產の薪は檜雜共に品質量目甚だ不統一にて優良と云ふを得ざるより聲價昂らず、爲に前途に對し多少の懸念なき能はずとなし、之が改善を圖るため、組合組織の議同業者間に起り寄々協議中なり、尙同地には木炭代用臼井式國益練炭の製造工場ありて現在の產額は大小取交せ一ヶ年廿萬個を產しつゝあり、左に日光線沿線に於ける荷主の主なるものを紹介せば左の如し

栃木縣上都賀郡今市町大谷向
木炭輸出商 齋藤重一郎
電略（カクト）

栃木縣上都賀郡今市町
木炭輸出商 中村角平
電略（カク）又（ナ）

栃木縣上都賀郡今市町
木炭輪出商 高山由藏
電略 ヌルヤマ）

栃木縣上都賀郡今市町
木炭輸出商 村山義郎
電略（ムラカミ）

栃木縣上都賀郡今市町
木炭輸出商 今市肥料株式會社
電話三二番 電略（カネアイ）

栃木縣上都賀郡今市町
木炭輸出商 飯野德四郎
電略（イノ）又（ノ）

栃木縣上都賀郡今市町
木炭輸出商 尾崎商店
電話六二番 電略（ヲサキ）

鹿沼在
薪荷主
寺內繁松　平田三男造　佐藤政五郎
小川萬彌　久保田春吉　臼井助三郎

眞岡線沿道

◎益子町　益子町は由來製陶の事業盛にして薪材の需用地たりしも木炭の產出漸く增加し來りて、四五年此の方に於ける進步は實に急速にして殊に大正六年度の如きにありては市價の昂騰に逢遇したる爲俄かに產額を增加し同年度の產額は十萬俵の多きにも達するに至りたり、故に之を前年度に較ふるときは約倍額の數量となり、土釜雜三萬五千俵、同檜五萬俵、同椚一萬五千俵の割合に相當せるものゝ如し、而して同地前途の見込としては暴騰

の爲に薪炭林濫伐の弊に陷り四圍の山容は多く禿化し居りて當業者が如何に苦慮して產額の多きを望むとも到底大正六年度の如き數量を示すこと難く或は半減ぐらゐの傾向を保ち行けば幸ひならんか、今產出しつゝあるは西明寺山派の官有林が主なるものにして他は少量づゝに過ぎず、仕向地は主として東京及赤羽近在なり。

◎**逆川村**　同地は益子驛を距る二里の地點に位し木炭の產地として夙に其名を知られ產額も稍々益子町に亞ぎ檜雜土釜七分柵三分の割合に相當せり、仕向地は東京、大崎方面が大部分を占め益子、七井の兩驛より搬出さる又一部分は笠間を經るあり。

◎**七井驛**　七井驛は眞岡線の終點に當り周圍五里の地域より產出する木炭は車力又は馬車にて此驛へ集散するを以て通運、丸七、丸トの各運送店は輸送に多忙を極めつゝありて同地方を巡遇するときは忽ち沿線中第一位の移出驛たるの感を覺ゆべし、木炭需用期に至らば東京、名古屋、土浦、大宮、赤羽等の市場より薪炭問屋の來集するありて取引は常に隆昌を呈しつゝあり、而して產額にありては近時木炭の高値に伴れ著るしく增加を來し大正六年度の如きは二十九萬六千三百餘俵の巨額に上りたるも今後に於ては其四割減は免れざるべく豫測さる、品種として柵約三割に相當すべく檜丸割三割、雜丸割が四割の率を保てり、仕向地は目下東京七分にて地方が三分の割合なり。

◎**小貝村**　市羽村に接近し烏山街道に當れるが曩きに同村市塙（いちはな）は眞岡線の豫定線路に編入せられ居りたるを以て前途の發展を期待し活氣却々に旺溢なりしも今期議會に於て豫定は變更となり茂木町迂回と決したるより同地居住民の失望は一方ならず、鋭意頽勢の挽回に努めつゝあるも到底不可能なるべく觀察するものなり、從つて木炭の產額等に於ても從來の製產率以上を望むも又能はざるべく知る、此地に平野吉太郎氏在りて同地產の半額は氏に於て扱はれ他の半額は移入仲買荷主の手に據りて輸出す、一年合計產額七萬と見ば大差なからんか。

◎**市羽村**　同地は烏山街道に當り木炭の產出額は一ヶ年七八萬俵を算し、現下の處にては七井驛を經由して東京市場へ搬出されつゝあるも、眞岡線延長の曉は、茂木町を至便とするを以て多少取引關係の上に異動を生ずべし、而して同地生產の前途如何と云ふに、炭林稍々缺乏の狀にあるが故に、一面殖林に志すあらざれば產額の減少は免れざるべく思惟せらるゝなり。

◎**茂木町**　茂木町は古來煙草の耕作熾んにして商業隆盛を極め芳賀郡中第一位に相當せる

最古の市街なりしも、郡役所、裁判所、中學高女等の官衙學校を眞岡に奪はれ漸次頽勢に向ひつゝある折柄民業たる煙草は官營に移され專賣支局の設置されたる爲め從來煙草の買入に各地より來集せる商人は遽に跡を絶ち市街は次第に寂れ絃聲湧き返り紅燈輝き渡れる廓の繁盛も一場の夢と化し去りたり、然る處幸ひなるかな今期議會は眞岡線を烏山迄延長さるゝに決し市塙經由を變更して茂木町迂回に決せるより町民は僅かに愁眉を開くを得、同時に我薪炭の前途にも光明を見るに至るべし。

茂木町は由來木炭の集散地たると同時に又生産地なるが故に毎年相當の移出を示せる中にも大正六年度の如きは四十二萬六千餘俵の多額に達し郡中の首位を以て任ぜり、更に汽車開通の曉にも至らば茨城縣一部の木炭をも此の地に吸集するものなれば白消堅物の類を增し尠くとも堅物のみ年額五萬俵内外の移出を見るも又難からざるべし、現下としては檜雜堅年移出額二萬内外に過ぎずして殘る四十萬俵は黑消土釜檜丸割二十五萬俵、雜及松炭にて七萬俵内外の率なるべく、量匁は一般五貫造と稱し居るも風貫共に四貫内外の如くなり、されど當業者には土地産聲價の發揚されんを期しつゝ品質の吟味、量匁の充實に努めつゝあり。

◎**清原村**　同地は栃木縣の首都たる宇都宮市を距ること遠からず鬼怒川の流域に位し水陸共に運輸の便あるを以て滯貨の困難を感ずること尠なし、而して木炭産額として一年幾何の數量に上り居るやと云ふに尠くも二十萬俵を下らざるものゝ如く品質稍々優良にして、東京、宇都宮、大宮方面に迎えられつゝあり、俵裝量匁等又隣接地と大差なし、荷主の主なるは横堀仁平、岡田縫治、坂本憲一の三氏なり。

◎**中村柳川岸**　鬼怒川の下流に位置を占め木炭の生産地たり、佐々木林平、山崎久次郎の兩氏を筆頭に二三の荷主あり年産額は大正六年度は十四萬餘俵に達し椚丸等殊に優良にして中央市場より迎えられつゝあり。

◎**荷主**　眞岡線沿線各産地に於ける荷主は左の諸店なり。

栃木縣益子町
木炭問屋 ㊥ 大山長之助
電略（オチヲ）又ハ（オ）

栃木縣益子町
木炭輸出 カ 飯塚秀司
電略（カネカ）又ハ（イ）

栃木縣芳賀郡逆川村深澤
木炭輸出商 櫻井勝彌
電略（カツ）又ハ（サ）

栃木縣芳賀郡七井村大字大澤
薪炭商　野澤磯吉
電略（ノサ）

栃木縣芳賀郡茂木町（中根屋號）
薪炭問屋　石島藤平
電略（イシ）又ハ（トラ）

栃木縣芳賀郡茂木町（桜屋號）
薪炭輸出　石河鐵三郎

栃木縣芳賀郡清原村刈沼
薪炭生産輸出　横堀仁平商店
電略（ヨコニ）

栃木縣芳賀郡七井驛前
明治運送株式會社取引店
東　三村運送店
店主　三村勝吉

栃木縣芳賀郡茂木町（岡野屋號）
上　薪炭問屋　岡野道三郎
電略（ヲカ）又ハ（ミチ）

栃木縣芳賀郡市羽村市場
三　薪炭問屋　三村爲五郎
電略（ミ）又ハ（ミム）

栃木縣芳賀郡清原村大字遠場宿
薪炭問屋　坂本憲一

栃木縣芳賀郡七井村
木炭輸出業　川田啓五郎
電略（カワケイ）

栃木縣芳賀郡茂木町（刀屋號）
刀　薪炭問屋　堀畑園貞
電略（ホリ）

栃木縣芳賀郡市羽村市場
木炭輸出商　平山清七郎
電略（ヒラ）又ハ（セイ）

栃木縣芳賀郡中村柳川岸
木炭商　佐々木林平
電略（サ）又ハ（リン）

栃木縣芳賀郡清原村
木炭輸出商　岡田縫治
電略（ヲカ）又ハ（ヲ）

栃木縣芳賀郡小貝村市塙
木炭商　平野吉太郎
電略（ヒラ）又ハ（ヒ）

栃木縣芳賀郡中村柳川岸
薪炭輸出商　山崎久次郎
電略（キワ）又ハ（ヤ

東北本線沿線

◎宇都宮驛　栃木縣の首都宇都宮市は百貨集散の大市場たると同時に薪炭に就ても販賣市場にして生産地にあらざるなり、されど稀れには東京市場の相場が著るしく暴騰するが如き場合に於ては、一旦同市場に入着したる薪炭が更に再移出することもあり、依て本誌上へも掲載することゝしたり、即ち同市へ大正五年度に於て到着したる木炭は十七萬九千三百七十六噸にして此の中一萬三千五百五噸の發送を示せり、仕向けられつゝある産地は秋田縣横手驛、磐越線猪苗代、川桁、幷に奥羽本線の各驛とす、尚市の東西附近城山村福岡幷に芳賀郡清原道場宿刈沼近傍及び清川舟積ものゝ入荷あり、而して同市は官廳兵營等の

納入品多ければ此市街にて需要さるゝものは堅炭過半數なり、今同市場主なる薪炭問屋としては旭町一丁目に大橋商店、僧行社東側に高橋德商店、今小路に石川清次郎商店、戸祭町に中山榮藏商店、大町に塚原久次郎商店、西花田町に永井宇之吉商店等あり。

◎**福岡村草野**　年產額は漸く一萬俵內外に過ぎざるも、宇都宮近傍檜雜土釜の產地として七井方面の椚と共に有名なり、而かも製產の大部分は東京市場に移出さるゝものにて、從來は多く日光線鹿沼驛より積出したるも、現在は大谷輕便線の荒針より日光沿線鶴田驛に通ずる引込線を利用し、同驛より發送するを以て輸送上の至便を加ふるに至れり、森源地は河內郡の西北部一般の林地なるが、近年漸く大半を伐採し盡したる爲、年產額は大なる增減を見ず。

◎**寶積寺驛**　昔時は鬱蒼たる老樹深林をなして晝猶ほ暗らく、狐狸の聲交りて、旅人を驚かしたる寶積寺驛も明治三十二年鐵道開通以來漸次開拓され、當時尙山中にありたる停車場も今は廣漠たる平原の一隅に位し、林野の多くは田圃と化し薪炭は農作物に其位地を奪はるゝに至れり、故に寶積寺の薪炭を記するには勢ひ烏山の現狀を語らざるべからず、同驛より烏山町迄行程五里、貨物輸送の機關には荷馬車及び駄馬あるも、交通機關としては馬車あり自働車あり、賃銀は馬車の片途五十五錢に對し自働車は七十錢にて一時間を費さずして到るを得べし。

烏山町は那須郡南部の名邑にして巨商多く、茨城との國境に聳ゆる鷲子、鷹子、國見、白山の諸山近く烏山の東方に亘りて自然の薪炭林無盡藏と云ふを得べく、從て木炭の製出又決して尠からず、即ち寶積寺驛を經由して東京市場へ輸送せらるゝ木炭の年額は大正四年度五萬八千八百六十七俵、五年度に於て十三萬六千七百五十二俵を計上し、逐年增加の一方にして、其種別としては椚は全體の四分を占め檜雜共に三分宛の割合を保てり、而して此れが仕向地としては秋葉原を首位とし、隅田、錦糸町、新宿、澁谷、埼玉大宮之に亞ぐ、猶期節によりては總武線成田、粕壁方面への輸送を見ることあり、近年更に寶積寺附近に於ては山林を拓殖して田畑となしたる結果、秋霜に散りて地に落つる木葉の缺乏を告げ、多く高値なる肥料を購入するの必要を生ずるより、最近一般に殖林の感念起り、就中南北高根村の如き栃木縣下に於ける多額納稅者の多くを有する地なるが其一人たる宇津救命丸店主宇津權右衞門氏を始め二三有志は切りに椚檜の殖林に着手しつゝあり、近く其繁茂を俟つて製炭を行ふべきを以て、將來寶積寺は縣下に於ける薪炭の主要製產地たるに至

るべきか。

◎氏家驛　寶積寺と共に明治三十二年鐵道開通以來、東京市場に木炭を移出し來りたるが、同驛も亦寶積寺の如く唇齒輔車の關係を保つものに喜連川、馬頭の兩町ありて、氏家を記すは同時に以上二町の薪炭界を報導するものと云ふべく、而して那須、鹽谷兩郡の各產地より氏家に集注する木炭の年產額約二十萬俵の內、十三萬千四百六十一俵は實に喜連川、馬頭兩地の產出にして、更に附近に大內、谷川其他の森林地を有する馬頭は其六分强を占め、喜連川亦下江川等の產地と共に殘りの四分弱を移出す、種類は土釜楢六分、雜二分、柳二分の割合なるが、樹木は悉く第二期伐採期に入りたることゝて、前揭各產地と一般多く丸物を產出す、現在喜連川に通ずる軌道車あり、將來馬頭町に達する運輸交通機關具備さるゝに於ては、此の驛亦大に發展を期するに至るべし。

◎西那須野驛　同驛は附近各主產地よりの貨物集注驛にして、之れに土地幷に附近の製產を合し年產出額、木炭七十萬七百八十俵の內需要地指しての移出高は大正五年度に於て三十七萬三俵を算し、之を左の主產地に細別すれば

鹽谷郡箒根村白羽　木炭二二、二〇〇俵（汐原軌道により行程西那須野より一里半）
鹽　原　木炭九、二五〇俵　薪六〇、〇〇〇貫（那須より軌道五里廿一丁別に自動車あり）
高　林　木炭八、八〇〇俵　薪六三、二〇〇貫（同村は東那須へ行程二里廿町黑磯へ三里を隔つるのみなるを以て多くは黑磯へ搬出し西那須への搬出は一部分に過ぎず）
西那須野　薪一四四、四〇〇貫
大田原　同一六三、二〇〇貫（西那須野驛より人車鐵道あり行程一里十六町）
兩　鄕　木炭五五、五〇〇俵（太田原兩鄕間道程四里）
黑　羽　同一九二、〇〇〇俵
須賀川　同一三三、二〇〇俵
大山田　同　六六、六〇〇俵

木炭輸出商　栃木縣那須郡下江川村大字下川井　久　和久喜一郎　（氏家驛より三里十八町）

等にして薪は產出高四十一萬千四百貫の內移出高十二萬四千七百八十貫に過ぎず、木炭の仕向地は秋葉原、隅田川、錦糸町、山手線等にして宇都宮へも時々多少の移送あり、薪は山手線沿線を主なる仕向地とし、楢雜其の七分を算し、松薪亦三分を占む、此の外鹽原醋酸工場に於て十一萬千六百俵の木薪を製出するも用途は鐵道院其他官衙に限られ一般市場の需要には充てられざるが如し。

要するに西那須野驛は單に近傍各主產地より中央及中間市場に輸送する薪炭の中繼地に過ぎざる爲、將來それ等主產地との交通の便開くると共に、大勢の上に變更なきを得ず、殊に東野鐵道開通の曉には現在の如く黑羽に集注する兩鄕、須賀川、大山田、湯淺等の物資並に太田原、金田村地方の物產は皆此の鐵道により夫々黑羽、太田原等より直輸送さるるを以て、西那須野現在集散貨物の數量は著るしく減退するに至ることを保し難しと推測するものなり。

◉正氣商會主阿久津正氏の閱歷

（西那須野驛前木炭輸出商）

野州木炭を代表するものは西那須野以北黑羽、黑磯、黑田原にして、而も其の一たる西那須野驛を代表するものは阿久津商舗正氣商會となす、曩に我薪炭界に於て嘖々たる名聲を博したる丸西合資會社も那須の大平原を超えて、栃木、福島の國境に聳ゆる佐飛山に全資力を傾倒してより一敗地に塗れ、終に破產の悲境に陷りし際、同社精算の任に膺りたる阿久津正氏は、太田原藩主席家老の嫡子として生れたるも、明治維新の際夙に時勢の推移を察知し腰間の大刀を棄てゝ身を實業界に投じ、金物、呉服、肥料等を商ひて巨萬の富を致し、明治十八年西那須野驛開通と同時に新に同所に店舗を設け、早く既に同地方實業界の重鎭として聲名あり、爾來事業着々成功して財を積むこと數十萬、令息又早稻田大學商科の課程を卒へて父君の業を扶け、薪炭部は支配人木下氏多年の經驗と潑剌たる才氣とを以て孜々經營の重任を荷ひ、逐年異數の擴張を圖りて現に毎月八十車內外を中央市場に輸出し、丸正印木炭の權威東京市に普くに至れり、更に今回丸西會社の後を襲ひて小佐飛山總面積二百町歩の山林の所有を獲て、四ケ年計畫を立て用材薪炭の二課を起し、用材は外國輸出向とし横濱港を經由して汎く外國市場に出し薪炭亦檜雜を合して年產額五十萬俵を計上し、今や東京市場へ移出せんとしつゝあり、現今同商會が木炭倉庫として使用しつゝあるは一號、二號、四號は間口五間奥行十五間、第三號は四間の十七間、五號は四間の十間てふ豪壯なる建物なり一昨夏市價低落當時の如き裕に三萬五千俵堆積を見しことあり、店主正氏は既に齡ひ六十を超えたるも意氣猶壯者を凌ぎ縣社乃木神社の建設を始め凡ゆる公共事業に盡瘁し、德望四近に高く、亦業界稀に見るの人傑と云ふを妨けず。

◎黑羽町　八溝山脈は下野、茨城、磐城の三國に蟠起して遠く白河、棚倉方面に蜿蜒し、二百萬町歩の官有林は十五年乃至二十年の輪伐法に依つて年々公賣に附せらるゝ爲材源は全く無盡藏と云ふべく、林地は大部分は杉なるも檜雜等木炭に適する樹木繁茂す、而して同地年產額は前にも略記せし如くなるが、黑消十九萬俵と稱せられ、內割物八分を占め、丸物は僅かに二分を算するのみなり、仕向地は東京を主に中間各市街へ移出す、同地は西那須野驛より行程約四里を隔つるも車馬の往來頻繁にして、木炭の如きも西那須野驛迄駄運賃僅かに一俵三錢に過ぎず、而も私設東野鐵道の開通を見るに至らば運輸交通愈々至便

を加へ、殊に西那須野引込線によつて中央市場への移出物資は悉く黒羽驛より直積となるべきを以て、野州本場木炭の供給は一層の迅速と便宜とを來すを得べし、抑々黒羽町は當初は赤目の主要産地にして那珂川の水運に依り茨城縣水戸、湊方面に輸送し、更に東京地方へも移出したりしが、其後那珂川の水源地たる那須の林野は濫伐の結果河川涸渇し水運の便杜絶して、黒羽赤目炭の輸送中絶の有樣となりたるより明治十八年奥羽線鐵道の開通以來東京への輸送は汽車積として送荷するに至れり、然るに中央の需要は多く土釜なるを以て黒羽木炭の發展甚だ遲々として振はざるを惜み、明治三十年栃木縣技師田中長三氏は自ら試驗所を黒羽に設けて此れが研究に努め、克く當業者を指導する所あり、當業者亦大に奮起して製炭に從事したる結果終に今日の如く黒磯、黒田原と共に野州本場木炭の聲價を揚げ、年産出額も增加するに至り來れるものなり、因みに黒羽町とは那珂を挾みし川西、黒羽町を總稱す。

◎黒磯驛　本場野州木炭の中心産地となす、年々の産額五十萬俵を超へ品質亦前記黒羽及西那須野近傍の産よりも優良なるより、常に市場の相場も他の同縣下各地に於けるものに比し二三丁方の高値を唱ふるなり、而して中央市場幷に各需要地への輸送額は、大正四年度に於て五十七萬九千四百二十俵、大正五年度に於て五十六萬三千五百八十四俵を算せり、主産地は那須野村七分、高林村二分、須賀川一分の割合を占む、仕向地は中央市場に於て飯田町驛への四萬二千九百二十俵を首位に、新宿、秋葉、澁谷、隅田川此れに次ぎ、横濱の五萬五千俵の外埼玉縣川口町に鑄物工場用の松炭五萬千三百八十九俵の移出を其主なるものとす。

而して黒磯の薪炭林蓄積の概況は、面積十八萬町歩の廣漠たる那須の大樹林へ僅かに五里、更らに一方に於ては須賀川、高林兩村の密樹林遠く七八里に亘るを以て薪炭林は稍々無盡藏と云ふを得べく、此間を往來するに車馬絡繹として生産地より製品を搬出するに便利なるより、年々歳々産額激增の一方にして、品種は楢雜の土釜木炭大部分を占め、椚は僅かに全體の五厘强を算するに過ぎざるも、目下那須平原の一部に於て椚の殖林に努めつつあるを以て將來は品質優良なる椚木炭の多數産出を見るに至るべし、若しそれ那須平原の殖林に至つては民有地八分、官林二分にして何れも十年輪伐法によりて伐採するを以て、黒磯木炭將來の發展は全國主要産地中異數なるものあらん。

青木開墾地　青木子爵所有の開墾地にして黒磯を距る西方二里、高林村字青木にあり、

總面積一千六百八十二町歩にして、開墾の外製板製炭に從ひ、大正六年上半期迄は竈數八個、木炭產出高一ヶ月五貫匁俵一千九百二十俵に過ぎざりしが一昨夏より更に二十竈を起し合計二十八竈を以て旺んに製炭に從事し、毎月の產出高六千七百二十俵を唱へ居れり。

◎**黒田原驛**　同驛亦野州本場木炭生產地の一にして大正五年度に於て各需要地へ移出せる木炭は合計三十一萬八千四俵の多きに達せり、其内譯を示せば

秋葉原	八三、七六八俵	新宿	六八、二六五俵	澁谷	二、四〇五俵
隅田川	二五、二七一俵	品川	九、一三九俵	赤羽	五、五一三俵
錦糸町	一四、八三七俵	飯田町	四、七三六俵	豐原縣内	四、〇七〇俵

此生產地は伊王野村二分、兩郷村一分、須賀川村三分、芦野村五厘、下那須野村三分五厘の割合に產し、種別は檜雜土釜を主とし椚少量なり。

◎**荷主**　野州本線沿線に於ける主なる荷主幷問屋は左の如し。

栃木縣河内郡城山村大字福岡字草野
薪炭木材生產業　菊地甚四郎
電略（ヤマキ）

宇都宮市材木町
薪炭問屋　田中庄一郎
電話二七番

栃木縣西那須野驛前
木炭輸出商　正氣屋商會
店主　阿久津正　電話八番

下野國氏家町櫻野
薪炭商　福田喜美三郎
電話五番　電略（フクキ）

栃木縣那須郡黒羽町
國光生命保險相互會社黒羽代理店
木炭木材問屋　野田鳥之助
電話架設中　電略（ノト）又（マルト）

下野國黒羽町前田
木炭輸出商　富岡清作
電略（トミセ）

下野國黒羽町大字黒羽田町
木炭木材商　野田嘉平
電話二九番　電略（ノ）

下野國那須郡烏山町（代表社員堀江久次郎）
木炭輸出商　福田商會
電話五五番　電略（フク）

栃木縣川西町大字黒羽向町
木炭輸出商　飯島德之助
電話黒羽二六番　電略（トク）

栃木縣黒羽町田町
木炭輸出商　山口利喜太
電略（ヤマリ）

下野國那須郡黒羽町
木炭材木商　齊藤作右衛門
電話五番　電略（マルキ）

栃木縣那須郡黒磯驛前
木炭問屋　木材商　福田永吉
電話一〇番　電略（フクエ）

㋝ 木炭輸出商 奈良宇三郎
栃木縣那須郡黑磯驛前
電略（ナラウ）

㋭ 木炭輸出商鈴木順彌
栃木縣那須郡黑田原驛前
電略（〇キ）

㋕ 木炭輸出商瀨尾兼五郎
栃木縣黑磯驛前
電略（マルカ）

㋾ 木炭輸出商植竹千代七
下野國那須郡黑田原驛前
電略（ヤマ三）

㋿ 木炭輸出商鈴木榮
栃木縣那須郡黑田原驛前
電略（マルス）

㋓ 木炭木材商藤田和三郎
栃木縣那須郡黑田原驛前
電略（フジタ）

前掲の外、黑磯驛に植竹三四郎、藤田誠二郎、高木商店、江面覺一郎、江面伊三郎、石山兼吉、中守龜太郎、大森力藏、中島常吉の諸氏あり、黑田原驛に進藤龜次郎、藤田辰五郎、笹沼敬司、大塚亥之助、室井謙治、深澤茂吉、白井春吉、國井象吉等の諸店あり。

福島縣

東北本線沿線

◎**白河驛**　本線白河木炭は野州本場木炭に亞ぎ古くより定評のある所なり、往昔は殆んど堅炭のみを製產したりしが、野州黑磯に於て主唱したる黑消製法が同地及黑田原方面に行はるゝと共に傳はり來りて白消によるよりも黑消に學ぶの有利なるを識るや普く此製法を用ゆるに至り、當今に於ては全產額の九分迄が土釜木炭なり。

而して品質に於ては稍々黑磯產に劣り、市價に於ても常に一二丁の差を生じ居れるが如し、惟ふに开は那須山脈より製出する木炭が優良なるに引換へ、東白川の諸山林より產するものが稍々劣れる處より見るに、前者は樹質硬く後者は軟かなるに因る點より綜合し、白河と黑磯とは幾多夫等生產地樹林の硬軟に支配せらるゝものゝ如し、されど薪炭林も逐年深山に向ひ生產地の如きも黑磯、黑田原の山脈と地域を同ふすることゝもなるべければ自然兩々匹敵し得る製品を出すに至るべし、乍併白河の產は因襲に因はれて量目の輕減な

るありて黑磯産よりも多少正味の充實せざるものありと稱する人あり、當業者も此の點に留意し計量の統一を期しつゝあれば將來は野州本場木炭と差等なき品種の生産を見るに至るべく思惟せらる。

同驛より中央及中間へ移出する薪炭の年産額は大正四年度に於て木炭五十四萬二千〇九十四俵薪五萬九千八百九十五貫を出し大正五年度に於て木炭四十二萬六千二百五十九俵薪四萬千四百十五貫を製出せり、而して前途の見込としては現狀を維持し行くに於ては格別の苦痛なきも附近の炭林は伐採し盡せる傾向にて自然山深くなるに伴れ製産費の增額は免るべからざるに似たり。

◎荷主　左に掲くる諸店を以て主なりとなす、尙澁木啓次郎、松本卯之吉、白岩石藏、杉村勝之助、山中善五郎、根本龜吉、須釜政吉、吉田宗助の諸店あり、同地荷主は仲買を業とするもの七分を占め居りて、夏季は養蠶又は糸繭仲買に從事し、副業として營むもの多し。

磐城白河年貢町
力 薪炭商 松尾藤藏
電略 マツオ）又ハ（ツ

磐城白河町年貢町
共 木炭輸出商 堀田謙次郎
電略（ケン）又ハ（ホ）

磐城白河町大工町
山 木炭商 吉田岩右衛門
電略（ヨシタ 又ハ（イワ）

磐城白河町一番町
久 木炭材商 會澤彌三郎
電略（アイヤ）

福島縣白河町天神町三八
福 薪炭材木商 眞船喜作
電略（マルフク）

磐城白河町横町六六
カ 木炭商 鈴木金吾
電略（カ）又ハ（カク）

福島縣白河町年貢町
木炭輸出商 五十嵐定藏
白河産木炭を取扱ふの外鹽原醋酸採取の木炭毎月三十車を販賣す

福島縣白河町道場町
木炭生産輸出 澤野豐之助
電話五九番 電略（サスサ）

福島縣耶麻郡上戸驛前
澤野分店 村尾伊太郎

磐城白河三十三間町二六五
木炭商 吉田勝三郎
電略（ヤマタ

白棚線

◎棚倉驛　大正六年四月二十九日を以て開通せる白棚線の敷設せられさる以前にありては同地産木炭は殆んど其全部を白河驛へ出し、生産地の關係より稀れに黑田原等を中繼驛となし來りし、而して此地産出木炭年額は二萬四千五百俵内外にして土釜七分、堅三分の割合に生産するが如し、品種品質等は白河産と匹敵し居れるも稍々輕貫の嫌あるが爲、東京

市場に於ては日光線今市の物に標準を執りて評價しつゝあるに似たり、右に就き同地の製炭者曰く、八溝山脈の諸山林より製出する木炭の如きは品質に於て黒磯産木炭と何等の差異なし、然るに嘗て白棚線開通前それを白河へかけるときは仕切價格低廉にして黒磯驛へ出すときは黒磯木炭と同値なるに近し、然らば中央市場の問屋は品質の鑑別に留意せず單に地名に則りて標準値段を定むるが如き弊あるは生産業者の以て甚だ憾とする所なり、尤も近時減量の弊あるが如ければ此地同業者に於ても去明治三十八年創立せる東白河郡木炭同業組合を復興して、品質の改善は勿論量目を充實統一せしむるは刻下の急務なりと熱心に唱導するものあり、早晩改良せらるゝの機に逢着すべく思惟せらる、而して生産地の主なるは高城村、眞名畑、鬼ヶ面等にして炭林稍々無盡藏に近きものあり。

福島縣棚倉町
上 薪炭木材商 上田豊次郎
電略（ウエ）又ハ（ト）

福島縣棚倉町
木 木炭木材商 渡邊松太郎
電略（ワタマツ）

福島縣棚倉町
三 木炭商 宗田幸次郎
電略（ヤマサン）

右の外同驛には鎌田德兵衛、國井武七、宗田源太郎の三氏あり尙近隣笹原村に西森新之助、近藤輪之助、小峯健次の諸氏ありて中間驛へ出し又は中央市場へも移出しつゝあり。

◎矢吹驛　矢吹産楢丸と云へば疇昔は飛ぶ鳥をも墜すほどに名聲赫々たりしが、當今に至りては炭林の奥深く進むに從ひて、樹質軟かに品質稍々粗惡に傾くが如くなるも、之れに反して薪は皮薄く品質極めて良好なる爲聲價を維持しつゝあり、仕向地は東京新宿、巣鴨、隅田川等を主とし他驛へも少量の移出ありて、年産額木炭にありて約一萬八千俵、薪にありて五萬八千二百四十五貫を産出す、而して將來の見込としては年々幾分づゝ減退の傾向にありて、同地の荷主大木代吉氏の如きは小野新町方面へ着手しつゝあり、信夫村渡邊市右衛門氏は主として薪の移出をなし同驛を中心となすに似たり。

◎須賀川驛　往時は主要なる薪炭の取扱驛に數へられ、此驛を經由して中央へ移出する額亦多かりしが年經るに從ひて減退し、今日にては石川町の荷主一吉印の商標深谷新之助氏が海岸線湯本驛を中繼驛とする傍ら此驛を經由するあり、又竹貫村の矢内常吉氏が同樣此の驛へ出すを主とするの外は殆んど僅少なり、從つて同地の荷主井上定吉氏又は五十嵐忠

次郎氏の如き他の有望なる産地へ轉移せん準備にあるが如く、又同地に本店を有する山崎由之助氏の如きは既に曩に平郡線に雄躍し優勢を示しつゝあり。

◎石川町　荷主としては深谷新之助氏あるのみ、從つて石川町を語るものは深谷氏を記さざるべからず、氏は四近山脈を以て包まるゝ宮本村に生れ、明治三十五年同地林産奬勵の目的より率先して斯業に身を委し居を石川町に移し爾來商運の向上するありて目下五千五百石の炭林を領得し百三十名の從業者を傭役し、須賀川、湯本、矢吹等の各驛を經由して年産出約十二萬六千俵の木炭を中央市場幷中間製茶場へ販賣しつゝあり、尙又一町を距る行程約四里の南方竹貫村に矢内常吉氏ありて年移出五千三十餘俵の見積を立て製炭に從ひつゝあり。

福島縣矢吹町
大木炭酒造業　大木代吉

福島縣石川町
吉木炭輸出商　深谷新之助
電話一番

福島縣東白川郡竹貫村
久木炭商　矢内常吉

◎薪生産業者として矢吹町に菊地熊之助商店あり優良品を出す。

人物紹介（其一）

大木代吉君
福島縣矢吹町

大木代吉君は慶應大學理財科の出、同窓堀切善兵衛氏と共に秀才の聞え高かりき、出でゝ父君の業を承け今日に及べり。好運兒たる君は先代代吉氏が炭業によつて築かれたる偉大なる信用と巨萬の富貴とを其儘繼承して酒造業と木炭輸出とを兼營す、今や擧げられて營業稅調査委員に在り又郡町政其他の公務は一として君の參與せざるなく誠意專瘁して止まず、君齡不惑を超ゆること九、前途の光明當に瞭火を見るに均しかるべし、君希ふ幸に自重せられよ。

人物紹介（其二）

深谷新之助君
福島縣石川町

深谷君は創業の當初に際し當時の郡長より囑托され製炭業視察員として全國著名産地を歴遊せられたるは今を距る十七年前なり、此間に於ける君の幾多の努力幾多の奮勵は君をして今日あらしめしなるべし、古人謂ふ艱難は汝を玉にすと、今や一吉印の商標と共に資産目に備はり信用月に鐘まる、君は一面郡政町政の上にも忠誠を注がれ擧げられて所得稅調査委員町會議員等の公職にあり、年末だ三十有八、春秋の遒かなる君幸に自重加餐して我業界の爲め將邦家公共の爲、努められんを望む。

◎福島市　人口三萬三千餘、木炭消費數量年額七十八萬五千餘貫、諸物資集散し商業旺盛の都市なり、從て此地は木炭の生産地にあらずして他産地より供給を仰ぐ大需要地たるなり、然れども明治二十年十二月鐵道の開通さるゝ以前に方ては幾分かは他産地の供給を待ちしが多くは四近の炭林より製出するものゝみにて市内の需要を充しつゝありしも年毎に原料林に欠乏を告げ、當今に於ては伊達郡湯野、川俣地方より少量の産出を見るのみにて大部分を山形、秋田、宮城、岩手、青森の各産地より供給されつゝあるの狀なり、去りながら中間又は中央市場への移出皆無なりと謂ふべからずして、市場品潤澤にして中央市場品不足市價騰貴等の機に於ては一旦移入を仰ぎしものを更に移出することも屢々之あり、此種の産は主に正五貫目堅炭なりとす。

前掲の如く湯野、川俣より少量の製出ありとは云へども、搬出路の險惡なる爲め運賃に多額を要すると共に薪炭林としての壽命も今後僅かに四五年間位の豫想なれば、好んで製炭をなすもの尠くして他より供給を仰ぐの傾向は日に追ふて旺んなるに似たり、而して主なる薪炭問屋は左の六氏にして各地産出薪炭の卸小賣を營み其他一般燃料をも取扱ひ信用ある店舗なり。

薪炭問屋
糸繭商
福島市方木田町
山田屋　野地和吉
電略（ノキ）又ハ（ノ）

福島市萬世町一七
薪炭石炭
コークス
乾物
青物商
樋口彌忠次
電話四五七番

福島市仲町三
薪炭石炭
コークス
山口芳藏
電話四五三番

福島市置賜町
薪炭石炭
コークス商
高橋德次郎
電話六二九番

福島市桑町（小倉屋商店）
薪炭石炭
コークス
渡邊久助
電話四五二番
電略（ク）又ハ（〇ツチ）

福島市旱稻町（電話四〇八番）
薪炭問屋
石炭各種
コークス
工藤元吉
電略（クトウ）　振替三一三二六番

福島市宮町
薪炭卸小賣商
佐藤商店
電話一〇二番

海岸線沿線

◎勿來驛　史蹟勿來の舊關址を以て既に人口に膾炙たる此地は、同驛創設以來木炭製産地

として逐年發展を來し、大正五年度に於て九萬四千三百五十俵を產出し之を種類別にせば土釜楢七千五百四十八俵、同雜六萬七千八百五十八俵、堅炭一萬八千九百十四俵となる、而して仕向地は殆んど東京市場を目的として就中全額の八割强は隅田川驛に送荷し殘餘は秋葉原幷に東京市郊外各驛とす、而して製炭作業地は漸く深山に進み目下は平均三四里を隔つるものゝ如く、されど素より炭材豐多の地とて今後二十年位は伐り盡すが如き憂なかるべし。

◎**植田驛**　同地は日立鑛山の所有者たる久原鑛業株式會社所屬林業部に於て用材の裏木を以て木炭を製するもの日々平均一車を算するも猶自家の需要に不足を告ぐるを以て他の製出木炭中主として雜割類の買收を行ふ結果、同地荷主は東京市場以外に一の顧客を有する等の關係あり、爲めに此の地は附近の產地中最も殷盛を極め居れり、年產額に至りては大正五年度に於て二十萬九千四百二十俵を東京市場に送荷せられたるが、就中隅田川、錦糸町の兩驛殆んど之を全呑す。

同驛より移出さるゝ品種は海岸線物として定評あり、正味充實品種亦良しく、就中雜割多量にして雜丸、楢割類之れに亞ぐと雖も堅炭も全體の一分を占め居れり、而して當植田驛は開通以來二十年を經過し從つて製炭林も漸く深く平均五六里を隔て搬出の便を缺くと雖も材積は今後二十年若くは二十五年を以てしては伐り盡すべくも非らざるべし。

◎**綴驛**　湯本驛と共に附近に於ける炭坑其他の需要に供する爲め、昨今は平町方面より木炭の供給を仰ぐの狀態なれば、中央市場への送出數量も兩驛を合して年二萬九千六百俵內外に過ぎず、荷主としては綴の代表者大平辰藏氏の外其名を聞かず、又湯本驛出荷者としては石川町深谷新之助氏が此驛を中繼に供するを見るのみ。

◎**平驛**　福島縣石城郡中の首邑にして斯業に關する歷史も亦最も古く、明治二十八年平驛開通の以前に於ては所謂赤目專問の土地たりしが、驛創設以後二年餘を經て漸く黑消炭の製法普及せらるゝに至りて自然堅炭を製出するものを漸く減ずることゝなり堅は僅かに其一部分に過ぎざるの現狀なり。

現今平町は形勝の地を利用し附近の製炭地より木炭の同驛に集注するもの多きを加へ、平郡線開通以前にありては小川鄕、川內方面の木炭は駄馬の背に負はれて福島街道を馬子唄に送られ、鈴の音勇ましく同驛に搬出されたるを以て、帝都への輸出高も此驛を以て主要に數へ措きたりしが、去大正四年七月小川鄕驛の創業と同時に薪炭の貸切扱を開始した

る等の關係より、近來は平驛發達の木炭數量甚しく減退せり、即ち同驛より中央市場への移出數量は小川郷驛創設の前後、大正三年度の一萬二千六百噸に對し五年度に於て七千八百六十噸に減退せるに見るも推斷し得らるゝ如く、平郡線の開通は平町の業界に著るしく影響を與ふるに至りたり。

炭林蓄積如何と云ふに民有林は大概伐り盡して今後漸く十年内外を支ふるに過ぎずと云へば、製炭者は先づ官林の拂下に俟つの外なきも、山は次第に深くなり搬出稍々困難を覺ゆべきなり、而して此地産品種別は楢雜土釜にして俵に換算する時は楢は二十一萬一千二百俵、雜は十萬三千二百俵となり、多くは隅田川、錦糸町驛指して移出し、内二割强は製茶時に於て埼玉縣川越方面幷に千葉方面に輸出さる。

◎四ツ倉驛　草野と共に薪炭の輸出驛にはあらずして他地より供給を受けつゝあり、昨今此の驛の荷主宮内光次郎氏は十和田山林に製炭所を起し大野村八莖銅山に納入の特約の下に竈二十を築きて事業中にて尙佐藤仲次郎氏と提携し、事業擴張と共に旺んに中央市場へ搬出の豫想なるが品種は楢、雜、土釜幷少量の堅炭なり。

◎久の濱驛　双葉郡各驛と共に停車場創設後約二十年の歷史を經、現今の年産額は十四萬八千八百俵を算し殆んど全部が東京へ移送せらるゝなり、仕向地は隅田川驛を首位に錦糸町之れに亞ぐ、品種は土釜九分、堅一分の割合なり。

◎廣野驛　前掲の久の濱と共に山林への距離三里内外に過ぎざるも搬出比較的不便なり、同驛大正五年度移出額は二十萬千六百俵にして、楢雜相半ばし少量の椚丸を産出す、俵裝の形狀は目下流行する角俵造り九分を占め舊來の俵丸造を固守するもの僅かに一分なり、仕向地は隅田川を第一とし唯製茶時には埼玉縣川越方面に少量の送荷あり、猶同所は廣野鑛山ありて雜割木炭の需要多くして此種は常に不足勝なり。

◎木戸驛　同地も亦楢、雜、土釜の産地にして、少量の椚丸をも産し品質良好なり、大正五年度産出は東京方面へ六萬五千二百六十八俵を、千葉縣松戸、柏、川越線入曾等へ二萬七千九百七十二俵を出せり、山は一里乃至四里を距て居れり、而して同地に於ては農家の副業を奬勵する爲め、林區より特賣さるゝ箇所あるを以て比較的多量の産出ある譯なり。

◎龍田驛　明治三十九年鐵道開通以來中央市場へ同地産の移出する多く、爾來二十餘年、今日に於ては年産額六萬七千二百俵の産出を見るに至れり、種類は土釜雜を主位とし、楢及堅は合して雜の數に髣髴す、之が仕向地としては東京隅田川本所竪川、千葉松戸方面な

りとす。

◎富岡驛　双葉郡中の首邑富岡町は地形の上より然らしむるか、主として近隣生産者の産出せるものを川内木炭事務所、内國通運、平山、稲垣其他の運送店等に於て中央市場へ移出するものなり、されど此地を代表する荷主として川内木炭事務所々主吉田文三氏あり、氏は生産を兼營して優勢を示しつゝあり、而して同驛一ヶ月の出荷木炭は約五十車内外にして一ヶ年の製炭額は二十一萬八千八百俵、全部中央市場へ移出す。

◉川内木炭事務所主吉田文三氏と川内村

磐越東線に於ける一桃源上下川内は業界に於ける最も好望なる産地の一として衆人の矚目する處なるが、同地をして今日あらしめたるは全く現川内木炭事務所々主吉田文三氏の餘澤に外ならず、四顧の翠峯天を摩して境を劃り木戸川の急湍崖岩を嚙みて咆哮する處自然の別天地を成す、川内村は德川幕府時代に於ける囚人遁隠の場所にあらずんば姦夫姦婦か歡樂の迷夢に醉ふ墮落鄕たりしに、偶々伊豫松山藩の志士三輪田元道氏幕府の暴威を避けて相馬に隱れ金剛院の山伏某と激論を戰はしたるも三輪田氏は葉末に喞つ虫の音にさへ心を措く涙人者のことゝて、終に山伏の爲に追はれ殆んど死活の窮地に陷り辛ふして川内村に遁込みたるものなるが、後幾何もなく京都に出でゝ北朝の梟士足利尊氏氏の木像を切り獄に投ぜられたる逸話は川内村の爲に氣を吐くものと云ふべく、今亦朝鮮通として朝野の間に主きを爲す大正聖代の國士吉田文三氏を有するは又川内村の誇りと云ふを得べし。上下川内村は現在戸數四百戸を數へ四境山を隔てゝ他鄕との交渉薄く、唯一の物産椎茸は僅かに其季節に當り婦女子の手によりても尙百圓内外の實收入あるより安逸なる生活に伴ふ飲酒漁色の風早く生じて風紀頽廢を極むるより吉田氏は深く村政を憂ひ學校を興し有給村長大浦氏を迎えて此れが改善に努めつゝあり、然るに村民一般に勤儉貯蓄の感念なく、徒らに弄費を事とする爲め、一度び農産物の凶作を告ぐるに於ては乃ち餓死に瀕するの慘狀より救はんが爲め、吉田氏には川内村を包圍する周圍十五里に亘る林野を同村の共有財産とし、村民に製炭法を勸めて子孫百年の計を樹てしむ、而も吉田氏が該山野を川内村の共有財産たらしむるに當つては幾多筆紙に盡し難き困難と巨額の出資とを要したり。

當初同村に於ける民有地は散野と稱し納稅の有無に拘らず散野たるものは民有地たりしも、川内村を包擁する山林は果して散野なるや否やの證據なく、爲に暫く是非を決せざりしが、吉田氏は苦心の結果隣地に住める某氏が最も有力なる證據を所持し居れるを探知し、當時在朝の名士進歩黨の沼田辯護士と共に協力し漸く某を說破し、該證據物件により行政裁判を仰ぎて勝訴となり、終に今日の如く川内村の共有財産となりたるは又實に吉田文三氏ありたるが爲にして、氏の德望遠く双葉郡内に響きて誰か其恩惠に感泣の涙を濺がざるものなきは又故あるが爲なり。而して該山林より產出する木炭は年額遙かに三十萬俵を超え、自然更新の程度も亦極めて急速に十年乃至十五年にして再び此れを伐採し得らるゝを以て、材料は殆んど無盡藏と稱するも過當に非ず、只作業の當初は道路なく海岸

線富岡驛より中華村を經て下川内に達する山路四里は駄馬が米二俵を負ひ一日を費して辛ふじて到着し得る程の急峻なりし爲、吉田氏は此れに道路を開鑿するの急務なるを說き設計の結果、馬車の通ずる道路にて工費四萬圓を要し内一萬圓を郡費とし吉田氏は七千餘圓を捐金して殘餘の資金を一般献金に需め漸くにして道路を完成せるより、今日は貨物の運送頗る容易にして村民は絶大の利便に浴しつゝあり、右の外吉田氏は村民の製炭事業に對し無利子にて資金を貸與し或は直接間接に生計を援助しつゝあるより、川内の住民にして一人たりとも吉田氏の恩情を蒙らざるものなきに克く其の恩顧に酬ゆるものは横田、渡邊の兩氏なりとす二氏共現在に於いては荷主たるの階級に入り、吉田氏よりの負債を償却し了つて尚且二萬圓内外の蓄財ありと、他も克く兩氏に倣ふ所あらば幸榮期せずして至らん。

吉田氏は幼より國士の風格を具へ二十一歳にして當時在野黨の巨頭河野廣中氏等が加波山事件に連座して獄に投ぜられたる後を享けて福島新聞に筆を執り、後藤猛伯の知遇を受け明治二十七年東學黨の變亂突發後朝鮮に渡り、日韓貿易の機關とし日韓通商協會を起し東京横濱等と往來し居たるに當時朝鮮は露の勢力跋扈しつゝあるを憤り大に時の政府に說きて、我帝國の極東政策に貢献する所あり、其後京釜鐵道の發起人となり、朝鮮に立脚の地を固めて全然社交と絶ち力行の結果今日の地位を贏ち獲たるの人なり、更に十年前よりは全く國家公益の爲に計りて又自己を顧みず、彼の日韓併合其他の政治的企圖に對し亦吉田氏の建策文與りて力あり、氏の如きは我が業界に於て到底他に之を求め得べき底の人に非ず、業界も亦氏を有するは寧ろ光榮と云ふべき而已。

◎**大野驛**　海岸線沿線中新設の驛にして創業後未だ十年餘を迎ふるのみ、大野は浪江林區官營の所在地にして之が爲民業は直接間接に壓迫せらるゝことを免れざるものゝ如し、現在鈴木芳之助、植田銀之助、神谷貞隆の三氏あり、大正五年度に於て十八萬六千四百八十俵を產出せり、而して官營は七萬四千五百九十二俵を算し、民業の土釜木炭に反し、官營は堅のみにして海陸軍並に鐵道院其他官衙の納入品なるを以て、商品としては何等一般の需要向へは直接關係せざる如くなるも、山林の拂下に際し林區は自家生產の便宜上附近を領得し、拂下の分に對しては附近の炭林を避けて比較的遠距離の地を公入札に附する爲、土地の荷主としては多少不利の狀態にあるものゝ如し、民業は土釜楢雜を半數づゝとし、椚約二割を占む、仕向地は隅田川、秋葉を主とし、殘餘は製茶時に於て埼玉川越、所澤等に輸出す。

◎**長塚驛**　同驛亦大野驛と共に設置され、既に十年餘の星霜を送りて現在移出額十八萬八千三百二十俵に上り稍々大野に凌駕するあり、而して同地產俵裝は角俵造にして八戸港式に倣ひ居れり、山は大概上川内方面の比較的近距離の處なるを以て近驛に比し幾分か製炭上に便宜あり、現在荷主は藤田小一郎、岩東澤治の二氏、並に須賀川町猪狩商店出張所、

丸俵專門の淺田氏等とす。

◎**浪江驛**　業界の歴史既に二十年を經たる同驛の木炭年産額は官工民工共に三十二萬俵内外を産し、民工十七萬内外の中、東京市場に移出するものゝ種類は檜割五萬九千四百四十俵、雜割二萬九千九百七十一俵、雜丸二萬九千七百四十俵の割合にて隅田川、秋葉、錦糸町の順位を示し、殘餘は埼玉縣所澤方面より千葉方面へ移出さる、而して將來の見込に就ては林地漸次入江に進み作業幷に搬出に困難なるも、尚現在の處にては平均五六里を隔つが如し、林積豊多なる爲今後三十年は裕に持續し得るなり、此地を代表する荷主に三上惣左衛門氏あり、産出木炭は丸俵正四貫六百匁を標準となすが如し。

◎**原の町驛**　相馬郡中の名邑にして志賀、水越、田中、鹽谷諸氏の商陣地なり、而して現在の荷主にして富岡其他浪江に手山を有し生産に從ひつゝあり、それ故此地に商舗は構ふるも生産は最寄驛より發送するを以て當驛よりの發送高は十三萬〇八百六十九俵に過ぎざるものにて、仕向地は隅田川、錦糸町、新宿、北千住の順位とす、品種は椚二萬六千百七十三俵、雜六萬五千四百三十五俵、檜三萬九千二百六十一俵に區別せらるべし、山林は五六里を隔て林積漸く八百町歩を有するに過ぎざるを以て、今後十年餘を出ですして伐採し盡すことなきを保し難し。

要之、常磐海岸線方面に於ては斯業の歴史漸く古きものあるも、民有林の保護、殖林方策等完璧なる能はすして既に大部分を伐り盡し、殊に最近一兩年は中央市場の相場の好況なる爲、生産高を増加せしむると共に濫伐の弊風を誘致し、全體を通じて民有林の材積數ふるに足らず、故に一に官有林の拂下に俟ちて製炭に從事する有樣なるが、官有林も亦多く用材の資料として欅、樅、栗若くは松杉等針葉樹の培養に努め、雜木の殖林稀にして林業の政策、業界の趨勢と一致せざるの憾みあり、而も秩序ある輪材法行はれざるに於いて益々寒心すべきことなりとす、官民共に此處に心を注がれ薪炭林の保護政策上に充分の意を注がれんこと必緊なりとす。

福島縣双葉郡浪江驛前
三上惣左衛門
製炭所　福島縣双葉郡浪江
同　福島縣双葉郡船引田村郡

福島縣石城郡植田驛前
木炭木材商　西岡政男
東京出張所　東京本所區中之郷竹町三七
電話本所一一九三番

福島縣石城郡植田驛前
木炭木材商 香取吉造
電略（カトリ）又（キチ）

福島縣石城郡植田驛前
㋕ 木炭蒟蒻商 下山田浩一
電略（シモ）又（シ）

福島縣石城郡上小川村
木炭輸出商 國井三七吉
電略（クニ）又（ミ）

福島縣石城郡平町
㋕ 木炭輸出商 狩谷圓平
電略（カ）

福島縣双葉郡富岡驛前
木炭商 鈴木芳之助
電略（ヨシ）又（ス）

福島縣石城郡植田驛前
㊥ 改良角俵生產輸出 西山佐重郎
電略（ニシ）又（サ）

福島縣石城郡植田驛前
上 木炭輸出商 櫛田松造
電略（クシ）又（マ）

福島縣双葉郡富岡驛前
木炭製產輸出川內木炭事務所
所主 吉田文三

福島縣石城郡平町
㊀ 木炭商 安藤金次
電略（アン）又ハ（ア）

福島縣龍田驛前
木炭輸出商 鎌田菊松
私設電話二番 電略（カマタ）

福島縣双葉郡木戸驛前
上 木炭商 渡邊操
電略（ワタ）又（ミ）

福島縣龍田驛前
木炭雜貨商 山形辰藏
電略（ヤマ）又（タツ）

磐城國四倉新町
木炭輸出商 宮內光次郎
電略（ミヤ）又（ミ）

福島縣綴驛前
木炭輸出商 大平辰藏
電略（タツ）又（ヲ）

福島縣勿來驛前
木炭輸出商 根本福太郎
電略（ネモト）

福島縣相馬郡原之町
木炭商 志賀嘉吉
電話一〇八 振替二二二一八

福島縣植田驛前
木炭商 綠川龜藏
電略（ミトリ）

福島縣相馬郡原之町
木炭商 水越幸三郎
電略（ミツコウ）

福島縣小川鄉驛前
木炭商 草野米哉
電略（クサノ）

福島縣相馬郡原之町
薪炭問屋 鹽谷與次郎
電略（シホ）振替二二七七五

福島縣久の濱驛前
木炭輸出商 白土清助
電略（シラト）

福島縣相馬郡原之町
木炭商 田中善之助
電略（タナカ）

常磐線平木炭信用組合（イロハ順）

榮 磐城平町古鍛冶町
石井榮次郎（電略 エイ）

㊥ 磐城平町古鍛冶町
猪狩隆昌（電略 イカリ）

大 磐城平町電話一二三番
大里松之助（電略 マツ）

大 磐城國平町
大里兼次郎（電略 カネ）又（一）

田 磐城平町材木町
高田衞（電略 タカヱ）

佐 磐城平驛前
佐川辰次郎（電略 タツ）

磐城國平町古鍛冶町
森捨三（電略 モリ）

合 磐城平驛
馬目運送店（電話一一七番 四一番）

㊥ 東京錦糸町驛
遠藤運送店（電話本所六七四番）

公 東京隅田川驛前
常磐運送店（電話下谷四八五六番）

人物紹介（其三）

山形辰三君

福島縣龍田驛前

常磐線中福島縣下に於ける木炭の主要産地は多く双葉相馬の二郡に存す、龍田は即ち双葉郡の中部に位し業界に於ける歴史も亦從つて古く、浪江小林區管内に屬して薪炭用林としては同林區内他産地と共に極めて豊多なる材積を有す、然れども制度の缺陷は同業統一思想の存せざる一事にして、爲に業界は時勢の推移に遲れ、取引關係は混沌として一定の方寸なく、製品は種類品質量及共に不統一を極め同業の進展を妨くること多大なるは識者の痛嘆措かざる所なり、即ち山形辰三君は多年業界に在りて此の弊を知悉し、此が矯正を圖らん爲海岸線主要産地を一丸の下に網羅する同業者の組合を組成せんとして百方盡瘁する所ありしに、偶々平町の有志によりて石城郡木炭商組合の創立を畫策さるあり、山形氏は之と相呼應し全く自家の業務を顧みず其組織に奔命したるが如きは、業界稀れに見る有德の人と云ふべし、而かも龍田町民が其家庭に冠婚葬祭のある毎に悉く君を招じて指圖案内を仰ぎ且つ町政其他の公用一として君の與らざるなきは、如何に君が公共の上に誠意誠心應酬しつゝあるかを語るものにして、年齒既に類齡に及ぶと雖も天を衝くの意氣尙壯者を凌ぐものあり、其人格風貌亦後進の好師範たるを失はず。

茲に海岸線の稿を結ぶに際し些か參考の資として浪江林區の林積を記さん

地域	林面積
川内西部	二、〇〇〇町
川前東部	二、〇〇〇
永戸、三坂方面	四、〇〇〇
川内東部	六、〇〇〇
計	一四、〇〇〇

（浪江小林區署）

合計一萬四千町歩は五十年輪伐法を定めて順次に公賣若くは特賣に附するを以て、木炭の材料は無盡藏と云ふべく、而して原料林の價格は木炭の騰貴と共に競爭入札行はれ大正五年度に於て一石十四五錢のものが六年度に於ては其倍額に昂り更に本年度に至りて三倍の珍値を見るに至れり。因みに山林は次に述ぶる平郡線小川郷驛幷に双葉郡中の久の濱、廣野、木戸、龍田、富岡、大野、長塚、浪江等の各驛との距離が二里乃至五里に過ぎず。

磐越東線沿線

◎**小川郷驛**　平と共に石城郡に屬し平小林區の管轄區域内なるも、平驛より分岐する平郡線の沿道に位するを以て地形の上より見ば勿論海岸線沿線を共に記すべきものなるが如きも、沿線別に編成し茲に移せり。

大正四年七月同驛開通以來未だ三年に過ぎざるに木炭輸出地として早くも平驛と匹敵するに至りたる優勢を示し、年産額大正五年度に於て二十三萬三千一百俵にして之を品種別にすれば、土釜檜十一萬四千十九俵、雜十一萬四千四百十俵、堅炭四千六百七十一俵となり、仕向地別とすれば東京隅田川驛へ十五萬三千百八十俵、本所錦糸町驛へ一萬三千六百十六俵を主とし殘餘は製茶時に於て武州川越線沿線及新川岸入曾方面なりとす、現在の荷主には前掲の如く西山佐重郎、國井三七吉、草野米哉の三氏にて同村に最も近き山林の材積のみを以ても裕に二千町歩を超え前途頗る有望なり。

◎**夏井驛**　同驛の開通間際より齊藤國太郎氏驛前に店舗を移すあり、更に昨年九月より藁谷勇平氏平町より此地へ轉じ製炭專業に沒頭して止まざれば、薪炭の主要驛として數ふるに足るを得る期に達するも近からんか。

◎**小野新町驛**　神俣驛と共に有望の薪炭主要生産地なりとす、平郡線の貫通さるゝ迄は西線の部に屬し新開拓地として無盡藏の炭林を以て圍繞せらる、同線開通前は最も深山の部に屬し僅かに海岸線本線須賀川方面の生産者に依りて手を伸ばしつゝあるに過ぎざりき、然るに同線の開通と共に製炭者及荷主の夥多移住するあり、終世盡きざるの稱ある川内山の伐採に取りかゝれる者多く、中には輕便軌道等を敷設し輸送準備に着手したる向もあり、又附近なる上蓬田及大瀧根、草倉、鬼城等の諸山脈は炭林頗る豐多にして無盡藏の狀を呈す樹種の主なるものは檜、椚、栗、櫻にして繁茂せり、品種は海岸線土釜木炭と同樣同質にして多く中央市場へ移出す、又堅炭も多少の産出ありと雖も亂貫俵として中間に販路を有せり、土釜八分堅二分の割合なるが如し、薪も檜雜大束物を産出す、而して同驛より移送されし大正四年度の數量は木炭六萬四千四百俵、薪三十四萬千二百五十貫にして、大正五年度に於ては木炭六萬千百四十俵、薪二十萬千三百貫なり、更に大正六年度の概算は前年の三割强は慥かなり。

以上の情勢と薪炭林の豐富に伴ひ漸次同驛へ移住し若くは支店を開設するもの多ければ輸送能率と相俟て多額の產出を見、衆目を此地に集むるに至るべし、而して同地の製品中山崎由之助氏は改良角俵造にして正味五貫と五貫五百匁とあり其他は孰れも丸俵造にして五貫匁なりとす。

◎**船引驛**　當時としては未だ多量の製產を此驛より見るまでの運に至らざるものゝ如くなるも、常葉町其他の附近に店舗を有する荷主に於て、郡山及中間市邑に搬出し稀に中央市場へ輸出するものあるに過ぎざるなり、されど薪炭林として蓄積豐多にてあれば前途の好望なるに注目を惹くの値あり、即ち鎌倉山麓より都路へ渉りての林地は將來同地林產物の發展に資するの多かるべきを想ふ、近く中央市場へ移出するの期來らん、而して此地附近荷主としては、都路北見城に瀧田運送店の薪炭を取扱はるゝあり、常葉町に泉屋商店、關根倉太、坪井榮作、澤石村實澤に佐久間喜助の諸氏あり。

◎**三春驛**　田村郡の名邑三春町は人口に於て既に一萬千餘あり、舊秋田氏の城趾薪炭は生產地と云ふよりも寧ろ需要地の內に數ふべく、從つて荷主としては橋本孫七郎、小宮山穆の二氏あり偶々中央へ移出するに止まり、地方に於てのみ多く取引をなす、而して此方面へ集散する木炭は堅及土釜なるが、何れも亂貫にして十貫內外のもの多く、東京方面へ出すものゝみが四貫乃至五貫の目方を往來しつゝあるなり。

◎**荷主**　磐越東線沿線に於ける荷主の主なるは左の如し。

福島縣磐越東線小野新町驛前
山 木炭輸出 山崎由之助
本店 須賀川町支店 神俣驛前

福島縣磐越東線神俣驛前
木 木炭商 松永高之助
電略 マルモク

福島縣磐越東線夏井驛前
高 木炭商 藁谷勇平
電略（マルタカ）

福島縣磐越東線小野新町驛前
大 木炭商 大木支店
大竹福次郎

福島縣磐越東線小野新町驛前
正 木炭輸出 青山健太郎
電略（アオ）又（ケン）

福島縣磐越東線小野新町驛前
四 木炭商 四家磐吉
電略（イワ）

福島縣磐越東線小野新町驛前
カ 木炭商 長沼文次郎
電略（マルカ）

磐城小野新町停車場前
大 薪炭輸送 大橋運送店
小野新町支店

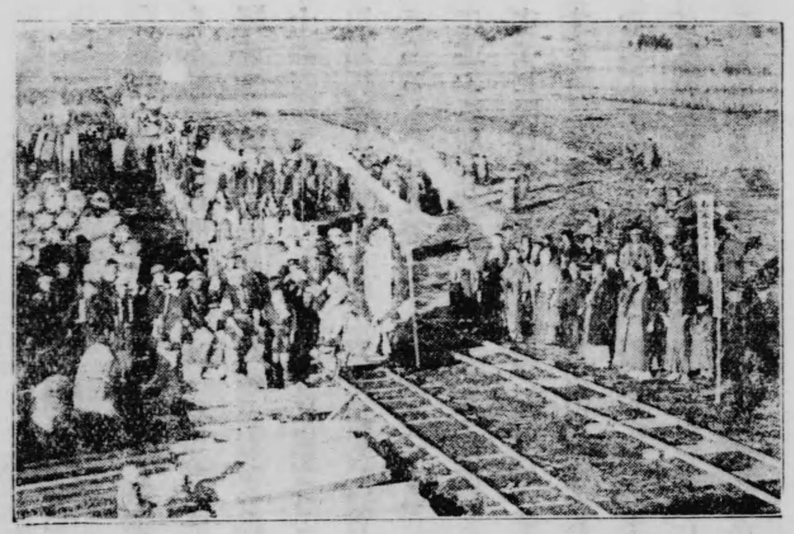
磐城國神俣停車場
三 運送店
店主 先崎德藏

▲附記　磐越東線沿線中多量の輸出をなすものは山崎由之助氏、松永高之助氏等にして松永氏の如き輕便軌道の布設全く成り向後六ヶ年間繼續製炭し得べき薪炭林の蓄積あり、神俣驛より年産額概算二十萬千六百俵を移出しつゝある其約半額は氏の製出に係るものゝ如し、泉屋商店にありては主として海岸線大野驛を經、年百五十車内外の製出あり、三春町にては橋本孫七郎、橋本孫次郎、小宮山穆の三氏が年二百車内外を扱ひつゝあるものゝ如し、以上の外赤目木炭亂貫十二三貫俵を取扱ふものに常葉町角中商標關根倉太氏等あり、而して海岸線沿線幷に磐越東線沿線各生産者に於て輪伐しつゝある川内山は面積二十餘萬町歩ありて恰も無盡藏に近ければ四近生産家の意を強ふするあり。

福島縣郡山町柳内一一四
㊀木炭商　坪井榮作
電略（ヤマイチ）

福島縣三春町
㊆木炭商　橋本孫七郎
電略（ハシマ）

福島縣田村郡常葉町
㊀木炭商　泉屋商店
電略（カクイマ）



福島縣……磐越東線

松永高之助商店の製炭製材事業

海岸線原の町に商舗を構え多年製炭の業にありて躍進の歩を進めつゝ來りし松永高之助氏は、磐越東線の開通せられしと共に神俣驛前に商陣を移し、同地瀧根山林實測一千町歩を領得し、驛を距る七哩の道程に輕便軌道を敷設し、大仕掛に製炭製材事業を開始したるが、今や產額多きに達し木炭のみにて、年裕に三十萬俵を生產し、中央市場及地方需用地へ輸出しつゝ頗る旺盛なるものあり、上圖は曩に擧行されたる軌道開通祝賀式光景の一端を撮影したるものにて、東京及地方取引先薪炭問屋を甫め郡山、神俣兩驛長並に取扱運送店主等を招待し盛大なる式典を擧行されたり。同店がかく長足の進歩を以てし事業の優勢を示しつゝ今後大に成すあるの基礎を鞏め財を積むに至りたるは店主の努力絶倫は素よりなるも同店の營業主任渡邊忠三氏二十年來の忠勤が寧ろ與つて力ありと云ふも過言にあらざるなり、渡邊氏たるもの小は店主に仕へ大は我木炭界の爲益々自重し、同店をして永遠に光輝あらしめられんを望むや切なり。

磐越西線沿線

◎**總說**　會津木炭若くは岩越物として世に聲價を發揚すると共に需要も漸次擴大しつゝある木炭の產地は同線沿線より移出せらるゝものにして、上戸驛より新潟縣津川驛に至る各驛よりの輸出に係る種類を總括して會津炭と名づくるものとす、而して本品は初めは單に土地の需要にのみ供給さるゝに過ぎざりしが明治二十年の交より稍々產額を增加し、會津田島街道より野州を經て東京市場に現はれ、更に明治二十六年の交に至りて岩越線の開通せらるゝや生產益々多きを加へて今日に及べり、又此方面薪炭林の蓄積豐多なるは本項後に述ぶる所の如くなるが、從て他產地にありし木炭生產者が其屬する地方林地を漸く伐り盡すに隨ひて自然此の方面に手を延ばし若くは移住するものを出すの傾向なり、唯遺憾とする所は冬季降雪多量の爲め山林豐富なる割合に生產量尠なく輸送の澁滯も亦それに伴ふを以て土地柄としては一得一失あるなり而して近時我木炭界に著るしく好影響を與へたるは歐戰以來諸工場諸製鋼製鐵所の勃興にして、現に藤田組等が此方面の供給を呼ぶものあるを認むると共に一面に於ては津川町の平田重平氏の如き其所有山林二千五百町歩の山林の雜木林に對し今後數十年間に亘りて木炭を製出し、需要の增加に伴ふ生產の調和を講ずる計畫に出でつゝあり。

◎**上戸驛**　郡山より分岐し磐越西線に乘り替へ熱海より峯巒重疊の間を走り中山宿を經て道程三十哩の地點海拔一千七百尺の高處なり、天晴れて風靜かなるの日は磐梯の山影湖面に映じて山光云ふばかりなし、之を業界の地位より論ぜは安積、安達の兩郡界に位し額取山諸山脈は愚か中山峠より丹澤峠へ通ずる諸山は交通運輸の稍々不便なるものありと雖も薪炭林豐多にして前途の光明を見出さゝるを得ず、今や同驛より製出する荷主の主なるものに佐藤岩三郎、白河町澤野分店村尾伊太郎、小堀組製炭所等ありて年產出額五萬七千〇四十俵に達し居れるが年々增加の傾向なり。

◎**關都驛**　此驛に店舗を構ふるは佐治木炭部を主とし佐藤岩三郎氏亦相應の出荷あり、川桁驛と隣し共に前途に望多し、製產年額は三萬二千八百餘俵なりとす。

◎**川桁驛**　同驛年移出高は木炭八萬四千六百八十俵、薪十六萬七千二百八十貫に止まり居れりと雖も樋口、吾妻以北の炭林豐富なるより今や大仕掛の輸送機關を敷設し輕便軌道によりて林產の開拓に努むる所あり、荷主としては小倉長作、渡邊棟麿の兩氏を數ふるを得

べし。

◎**猪苗代驛**　阿部木炭店の中間移出を爲すの外桑間八次郎氏の稀れに中央へ仕向くるあるのみにして產額亦多からずして一ヶ年木炭四萬千四百四十俵、薪十三萬〇八百八十貫內外を產出す、而して吾妻村小田に渡邊惣吉氏同村田茂澤に小椋長作等ありて此驛より若くは川桁驛より中央及中間移出を爲すあり。

◎**會津若松驛**　市中在住の荷主によりて取扱はるゝ木炭年產額は六十一萬三千三百五十俵に上り內市內及附近の消化量二十萬八千五百俵に達するを以て差引四十萬四千八百俵が中間及中央都市へ仕向けらるゝものにして、此木炭は別掲各荷主によりて取扱はるゝものとす、而して產地は北會津郡東山、湯川、大戸、高川、黑森の各村幷に大沼郡高田町へ集散する永井、氷玉の各村なり、此產地は樹質堅硬にして且矮林多ければ小焚上物を產出すべく、又楢原、中荒井等は中林多く從つて大焚物を出すべし、更に近時は改良製炭法が隨所に行はるゝ傾向ありて南會旭田方面より土釜木炭の製出を見つゝあり。

今林區署の調査する所に依れば民有林を除き南北會津、大沼の三郡に跨り約二千八百町歩は薪炭を供給するに適すべしと云へば炭林蓄積は稍々豐富と認めて可なるべし、而して俵裝に至りては通常四貫五百匁丸俵造を以て普通とす、されど人によりて正味の重量に差なきを得ず、爲に今や組合は組織を法人とし、それが統一を勵行すべく劃策しつゝあり。

木炭生產輸出
年二百車內外
岩代若松市瀧澤町二八　電話一六〇　電略（サシ）
佐治豐松
品種　㊟ 楢小丸（正四、五入）　㊟ 改良（正五、入）　㊟ 別撰（正五、入）　㊟ 上改（正五、入）
生產地　岩代安積郡月形村字濱路、同耶麻郡磐梯村大字本寺

會津若松市中川原町六〇〇
木炭問屋　長尾爲治
年輸出二八六車內外　電話四六五番

會津若松市南町四〇三
全木炭商　五十嵐初次郎
年輸出六〇車內外

會津若松市馬場町
㊟木炭商　長谷川藤次郎
年輸出二八〇車內外　電略（マルト）

岩代北會津郡大戸村上三寄
㊟木炭商　鈴木宗太郎
年輸出二五〇車內外

岩代國大沼郡高田町二番地
㊟木炭商　荒川一郎
年輸出一〇〇車內外

岩代國喜多方町仲町
㊟木炭商　長谷川德次
年額七十車內外　電略（マルトク）

會津若松停車場前
薪炭輸送㊟　服部運送店
電話一一八　振替三四八四六

大沼郡藤川村　佐藤伴七　若松市榮町三　岩原三次郎　同市瀧澤町　大關德八
若松市榮町四　湯田長造　同市同町四　岩原久吉　喜多方町　蓮沼寅八

佐藤岩三郎氏製炭好望

福島縣北會津郡港村佐藤岩三郎氏には、岩越線開通以前より木炭の生産に志し、同線開通と共に販路を中央市場に擴張し益々向上發展の域に進みつゝ今や磐越西線德澤、野澤、荻野、關都、上戸の各驛より年製産額裕に四百車を出しつゝあるが、品質優良正味充實せりとの聲高し、而して東京市場一手販賣店は佐久間川岸薪炭問屋佐治商店に於て司り居れり、因みに氏は常に品質の改善に志し寸時も閑却することなければ益々其の聲譽を向上すること疑なく、眞に木炭界の精華と云ふべきなり。

品質　精撰會津本場

木炭輸出商

登錄商標 田 佐藤岩三郎

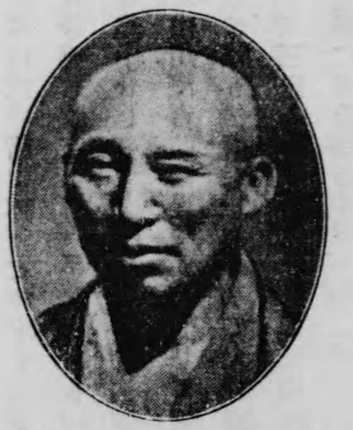
本店　福島縣北會津郡港村字原四二〇

出張所　會津若松市博勞町三四　電話三三九番

販賣所　東京神田區佐久間川岸廿一號地　薪炭問屋　佐治商店　電話下谷五五四五番

扱店　東京秋葉原武井運送店一手取扱

人物紹介（其四）



赤城源三郎君

越後津川町

新潟縣津川町の富豪平田重平氏より無限絶大の信認を享け一山印の商標と共に中央市場に聲譽を博し、今や磐越西線中第一流の木炭荷主として業界より畏敬せらるゝに至れり、君は年齢壯ならずと雖も進取の氣象に富み、建設の霸氣を把持し、今や事業を擴大し津川、豊實、德澤、乃至は鹿の瀬の各驛より年額裕に七百車を輸出し、新潟及長野方面の主要需要地と京濱市場とへ販賣しつゝあり品質優良にして正味充實せりとて歡迎せられつゝあり、君益々勇奮あれ。

人物紹介（其五）

長尾爲治君

若松市中川原町

長尾君は領二百三十石を有せし家門に生る、明治の初代嚴父源藏氏が膝間の一刀を棄てゝ實業界に身を委し、福島に於て味噌の釀造を業とせる當時は、君は帝都に於て學業に在り其儘安田銀行、鐵道院書記等に職を奉じたりしが、明治四十四年官を捨てゝ父祖の業を繼ぎ、南會地方に多數營業上の得意を有せるより同地產木炭の輸出に志し大正二年より木炭問屋を兼營するに至れるなり、今や年移出額三百車内外を取扱ひ傍ら會津味噌釀造をも怠らず店務の隆昌を告げつゝあり。

◎**喜多方驛**　近隣炭林は伐り盡し深山に入るの傾向なるより長谷川德次、蓮沼寅八の兩荷主の如き他の產地へ事業を移して唯居宅を構ふるのみなり、長谷川氏は主として日出谷、德澤の驛より年七八十車內外を移出し、蓮沼氏は糸繭商の副業として秋季より春季にかけ大谷村の產地より只見川の舟楫の便に據りて山都へ出し、年額四十車內外を取扱ふもの〻如し。

◎**山都驛**　同驛より輸出する物產の九分は薪炭と木材にして大正五年度に於ける移出量は木炭九萬七千五百二十俵、薪二十四萬五千七百六十貫を示せり、產地の主なるものは木幡の早稻谷山麓の諸山林を初めとし蓬萊に亘りて稍々豐多なれども、距離遠く運搬費其他の附屬費を要し收支上寧ろ手を出すもの尠くして、同地の荷主佐藤久悟氏等日出谷、鹿の瀨に力を集中せしめつ〻あり、荷主として數ふべきは折笠泰平、鈴木彦次郎、唐橋市郎、關口綠、山川淺吉の諸氏なり。而して相川村に至りては山岳重疊にして薪炭林に適すべき山林多しと雖も、山深しとありて大計畫に製產するもの多からず、同地は驛より一里二三十町より二三里あり、荷主としては相原傳吉、高橋藤吉の二氏あり、尙山鄕村赤岩に至りては上野喜代美氏等あり。

◎**野澤驛**　野澤驛に店舗を構ふる十二名の荷主によりて取扱はる〻一ヶ年產額は木炭十一萬八千四百四十俵、薪二十九萬二千三百二十貫內外なり更に最近野州佐野町に於て相當の資產と信用とを有する須永源氏同地に生產販賣業を開始し、古河、小山、佐野等へ移出し十貫匁菰俵を以て名あり氏は一昨年秋季頃より擴張し今や中央市場へも輸出を開始せんとするの氣勢にあるが如し、而して同地は薪炭林に富めるを以て、新任福島縣知事には林產物の奬勵を畫し、昨夏田島街道を經て南會津及大沼の郡下を視察し此の地を通過したることありき、野澤の生產者は山林の豐富なるに拘はらず事業の規模甚だ大ならざるものありしが、昨年以降木炭の市價暴騰し且つ需要增加の傾向ある所より、孰れも舊來よりも稍々手を擴めつ〻あるが如ければ、前途の望み決して乏しからざるを知る、今春會津西部木炭同業組合の生る〻あり田中嘉茂八氏之が組長として品質の改良に量匁の一定に熱心唱導されつ〻ありて、尙ほ本組合は郡長、警察署長、度量衡支所長等を顧問に推戴しありて、幾多弊害の矯正に努力する傾向の如くなれば斯界の發展に貢献する所あらんを期待す、薪炭林としては野澤町を距る二里乃至三里にして目下の處山としては極めて淺く山林の價格も比較的低廉なるを以て將來製產に從事するもの多かるべきを豫想さる、普通量匁としては

正味四貫五百匁にして殆んど全部が堅炭なりと雖も、之れより改良黒消燒の製法に據らんとするものもあり。

◎**荷主**　山都以北荷主の主なるもの左掲の如し

福島縣耶麻郡木幡村
(久) 木炭生産業　佐藤久伍
振替東京二八〇九四番
年三百五十車内外

福島縣耶麻郡木幡村
(共) 木炭輸出　五十嵐卓之丞
製炭所　日出谷驛前東京丸彦合同經營

福島縣耶麻郡奥川村新町
(タ) 木炭生産　高橋卯吉
電略(タカウ)

磐越西線野澤町木炭輸出商

(イ) 伊藤作次　電略(イトヲ)
(正) 大槻利八　電略ヲツキ
(大) 大沼彦補　電略(ヒコ)
(小) 小保方清太郎　電略(マルタイ)
(オ) 大沼仙吉　電略(カネイ)
(岡) 岡島文志　電略ヤマキチ

(キ) 田中嘉茂八　電略(マルキ)
(吉) 野口市郎　電略(マルキチ)
(キ) 山口喜四藏　電略ヤマキ
(さ) 齊藤玄壽　電略(カネサ)
(サ) 江川惣次　電略(マルサ)
(き) 鈴木荒三郎　電略(ヤマキ)

◎**德澤驛**　新潟縣の國境にして磐越西線中木炭の製出を見ること殆んど第一位にして、年移出額十五萬七千二百五十俵を算す、産地は主に奥川村にして飯根、飯澤を以て最とせり、道頗る險阻の地にして車馬の便利かざると均しく爲に木炭、木材等の主産物は奥川村より德澤驛まで輕便軌道を敷設し運輸機關に充て居れるを見る、此地は山岳重疊山脈蜿蜒とし遙かに前途の好望なるを眺む、而して此驛より輸出する荷主は地附きの高橋卯吉、高橋宇一、松本作馬の三氏あり、他地域よりの移入荷主としては津川の一山赤城源三郎氏、喜多方の丸德長谷川德次氏を始めとし、津川の山ヰ宮川佐與吉、山六小林製炭部、角り佐藤三吾の諸氏なるが如し、尙丸會矢部軍三、角忠杉原辰忠、丸ウ宇南山辰衞の銘々も相競ふて生産及買出しに從事しつゝあり。

◎**日出谷驛**　津川町の平田重平氏此地に林業部を設置し同驛より水澤に至る約三里の道程に私費十萬金を投じ里道を開きて人馬の交通を便ならしむるものあり、氏は所有山林二千八百町歩の雜木林の全部を木炭に製し市場へ輸出の計畫を樹てつゝありて既に一昨夏紀州より熊野木炭製炭職工を雇入れ備長式に製産するあり尙普通會津木炭として山長印の記號を附して東京本所、京橋、飯田川岸、神田川等へ仕向くるありて將來の望頗多し尙他に佐

藤久悟氏此地に出張所あり、佐藤幸吉氏の着手するあり、東京日本橋區新材木町の丸彦石原金藏氏と耶麻郡木幡村五十嵐卓之丞氏との合同經營の炭林等もありて、前途遙に有望なり薪炭林としては絶對無盡藏にして諏訪山、棒掛山等の諸山脈は數十年の歳月にては到底伐り盡す能はざるべしと云ふ、品質又佳良にして料理店を始め諸官衙諸工場より迎えられつゝあり、豐實驛も又此地に讓らず。

◎**津川驛**　東蒲原郡中の名邑にして北方阿賀川を隔つる麒麟山は往昔蘆名氏の臣遠江守の古城址にして山容頗る奇拔且つ眺望に富むものあり、爲に京濱より到る問屋たちは多く此地に寄泊して旅中の勞を慰む、而して薪炭としては山林豐富にして日出谷に優るとも決して劣るが如きことなし、されど當今に於ては日出谷、鹿の瀨乃至は豐實の方が驛よりの距離近きが故に此地居住生産者の大半は前掲の如く他驛を先に手を下しつゝあるに似たり、又小川村三郷の奥に當れる釜越山麓は薪炭林の豐富なるに加へ品質も却々に佳良なり、當地方生産者は普通叺入大俵十七八貫のまゝにて取引され、中央市場へ販賣する荷主は一旦造り直し東京市場向として輸出するものなり、されど新津町より新潟方面に需要さるゝものは大俵亂貫のまゝ取引さるゝもの多し。

◎**荷主**　左に掲ぐる四商店の外、山田宮川佐與吉、後藤啓藏、五十嵐末次郎、三村彌六の諸氏あり。

新潟縣東蒲原郡津川町
印木炭輸出商　赤城源三郎
年移出額六百車内外　電略（アカキ）

新潟縣東蒲原郡津川町
木炭輸出商　山崎勇
年移出額二百車内外　電略（マルサ）

新潟縣東蒲原郡津川町
印木炭輸出商　齊藤德吉
年移出額二百車内外　電略（サイトク）

新潟縣東蒲原郡津川町
木炭輸出　四ッ輪木炭組合
年移出額百五十車内外　電略（四）

山形縣

奥羽線沿線

◉板谷、關根、米澤、上の山、山形

◎**沿革**　奥羽產堅炭として市場に名聲を知らるゝに至りたるは、鐵道開通以降のことにして、其始めは今を距る約七百年の昔、山形市を離るゝ一里二十町餘上寶澤の山林に於て製炭せられたるを以て濫觴なりとす、それより世も移りかわりて五六十年を經し頃は各所に於て炭燒に從事するものを出したりと云ふも一俵の木炭を販賣するに五里七里の先きまでも脊負ひて行かねばならぬようの極めて幼稚にありしと、而して林產物として製炭を奬勵するに至れるは明治初年なりとす、殊に板谷の如きは僅々十四五年以前よりのことなりと云ふ。

◎**年輸出額**　山形市の人口四萬三千、米澤市の三萬三千と云ふ大都市あり、其他沿線各名邑に於て消費せらるゝの數量多く、爲に中央及中間へ輸出したるは左の額に過ぎず。

板谷驛	大正四年度	木炭	四、八〇〇俵	大正五年度	木炭　四、九一〇俵
關根驛	同	木炭	三〇、七二〇俵	同	木炭　二六、一六〇俵
		薪	一〇、四四〇貫		薪　一七、六〇〇貫
米澤驛	同	木炭	三七、一二〇俵	同	木炭　六〇、九六〇俵
		薪	二一、九二〇貫		薪　—
山形驛	同	木炭	一、一二〇俵	同	木炭　一、九二〇俵

◎**薪炭林蓄積狀況**　同方面を總括して三萬町歩なりとは林區當局の語る所なり、左れど中林よりも寧ろ矮林多く成育迄には尙三四十年を經過せざれば充分ならざるの狀にして、板谷の如きは年一年に炭林減滅の傾向にてあれば自然經費を增額して深山に進みつゝあり、他も又大同小異にして近林は伐り盡し追次遠距離に向ふの有樣なれば豐富なりとは言ひ難かるべし。

◎**品質及俵裝**　就中關根地方產出のものを以て優良とするも、產額少なきを憾みとするなり、其他は之れに準じて甲乙なかるべし、品種は雜堅多くして楢堅は全額の二割位なり、五貫造丸俵を中央市場向とし、土地及中間は十貫乃至二十貫の亂貫にして、貫匁賣買なりとす。

◎**荷主**　主なる輸出商は左の諸店なり、尙南村山郡上の山町に大久保藤四郎氏、東置賜郡赤湯町横町に小關商店あり。

大正式改良製炭
薪炭商 丸屋幸三郎
山形縣南置賜郡板谷驛前

薪炭輸出商
〈二〉岩船屋渡邊商店
山形縣南置賜郡關根驛前

薪炭問屋 石炭瓦斯コークス
〈○〉輸出兼營 叶内商店
主任 淺野喜介　電話一二六番

山形市七日町新道（驛ヨリ十一丁）
薪炭問屋 ㊤ 上野屋商店
電話五五一番

米澤市館山屋代町
薪炭商 ㊤ 佐藤秀吉
電略（サト）

米澤市館山橋本町
薪炭商 ㊤ 沼部鹿藏
電略（ヌマ）又（ヌ）

◉天童、大石田、尾花澤

◎沿革　東京市場へ木炭の輸出せられたるは何れも鐵道敷設と同時にして、天童驛の明治三十四年八月、大石田驛の同年の十月より開始されたるものなり、同方面亦土地の消費多量にして栃木、茨城、福島市等へ仕向くる殘餘を東京出しとする位に止まり居れば輸出數量の如き極めて尠なき狀態にあり、殊に同地方は鑛業地にして從て此方面に吸引せらるゝの量頗る多きものあるに、生產業者は主として農家の副業となり居れる傾向なるが故に晩秋より春季にかけて一時盛況を見るのみとす。

◎年產出額　主要兩驛に於て最近輸出されし數量を示せば以下述ぶる所の炭林蓄積狀況と對比し略ぼ今後の產額を推知するに難からざるべし。

天童驛	大正四年度	木炭	九、一二〇俵	大正五年度　木炭　七、五二〇俵
大石田驛	大正四年度	木炭	六三、五六〇俵	大正五年度　木炭　五〇、八八〇俵
		薪	一二四、四八〇貫	薪　八五、七六〇貫

◎薪炭林蓄積狀況　楯岡林區管內山林面積二萬八千町歩、舟形林區管內五萬四千町歩、寒河江林區管內約四萬町歩の森林あり、面積として遺憾なきが如くなるも材積豐多ならざるが如くして天童地方は年を經るに伴れ減滅するの一方なり、向後十五箇年も經過したらんには悉く深山に入るに非ざれば製出する能はざる傾向にあり、然れども舟形、尾花澤地方に至りては炭林稍々豐富にして品質も亦優良なるは些か意を强ふするものあり、更に左澤方面にありては林地に通ずる道路險惡にして搬出難澁なり、それが爲同地方は最上川の舟楫に據り僅少づゝの輸出を見るの現狀なり。

◎品質及俵裝　天童方面は前述の如く炭林に乏しきを以て伐木期早く從つて細焚物を出し品質優良なり、俵裝は東京仕向物は丸俵五貫造なるも中間移出のものは十貫內外の亂貫大俵なり、稀れには茅角俵五貫をも出すもあり、而して尾花澤地方にありては全部雜堅にして是又品質良好なり、量多は大半大俵亂貫なり、されど大石田方面は主に五貫造にして東京移出を主としつゝあり。

◎**荷主**　東京市場へ移出を爲す主なる荷主左の如し

山形縣東村山郡天童町（驛ヨリ八丁）
薪炭問屋 ㋑ **後藤伊右衛門**
電略（ヰ）

山形縣北村山郡山口村田原子（天童驛ヨリ一里半）
薪炭木材商 ㊤ **本間常吉**
電略（ホンマ）

日本運送株式會社取引店　伊藤倉庫運送店
薪炭木材 十 **伊藤平次郎**
山形縣北村山郡大石田町驛前

山形縣北村山郡尾花澤町（大石田驛ヨリ一里）
内外米穀 薪炭肥料 加 **村高營業部**
主任佐藤庄兵衛　電略（ムラ）又ハ（タ）

山形縣北村山郡尾花澤町（大石田驛ヨリ一里）
薪炭輸出 米穀肥料 ㋮ **鈴木茂四郎**
電略（ヰモ）

山形縣北村山郡尾花澤町（大石田驛ヨリ一里）
薪炭輸出商 ㋩ **木内鎌太郎**
電略（キウチ）

◉新庄、瀬見、向町

◎**沿革**　往昔に於ては僅かに土地の需要にのみ供するに止まりて東京市場に仕向けられ而かも山形產として聲名を博するに至るが如きは當時夢想にだも望まざりしならん、然るに明治三十六年六月鐵道の開通せらるゝや逸早く中央市場に移出を見ることゝなり、同地同業者の逐年林產物の開拓に趣味を增しつゝ今日の盛況を見るに至れり、然るに同地方は降雪の多き處なれば每年降雪期より解雪を終る季までは製出意の如くならず、又製炭事業者は至つて尠なく其多くは農の副業として營むものなれば、最近有望に向ひしとは云へ產額に至りては別項に示すが如く多量なりと云ふを得ざるべし、されど大正五年八月陸羽線開通し嘗て輸送の便を缺き來れる向町近在の開拓を見るに至り從つて同方面沿線は今後に望を囑しつゝあるの地たり。

◎**年產額**　最近二ヶ年間の輸出統計に依りて今後の產額も稍々測定し得べく茲當分は增減著るしからざるべく現狀を保ち得らるべし。

新庄驛	大正四年度	木炭 七四、〇〇〇俵 薪 三七、四四〇貫	大正五年度	木炭 九五、九六〇俵 薪 二四、六四〇貫
向町驛	大正五年度	木炭 一二二、六八〇俵	（同驛は鐵路開通より六年三月までの合算なり）	
瀬見驛	大正五年度	木炭 二一、五六〇俵	（同　上）	

◎**薪炭林蓄積狀況**　新庄小林區署管內薪炭林面積として約五萬三千餘町歩を算すべし、其樹種は、櫟、楢、雜なり、新庄附近は年々減退の傾向なるも陸羽東線沿道は頗る豐多にし

て殊に矢柏山并に大紫山々脈に至りては薪炭林に富み居れば富澤、堺田等よりは多量の產出を見るに至るべし。

◎品質俵裝　此方面の產は品質良好と云ふには尙一層の改良を要すべく認めらる、今や着々改善の歩を進めつゝあれば早晩優良品の中央市場へ現はるゝに接すべし、俵裝に至りては東京輸出の茅俵五貫造の外は十貫乃至十五貫の亂貫大俵なりとす、此種の類は稀れに京濱へ迎えらるゝとしても多くは栃木、埼玉、茨城、福島市等の中間市場に仕向けらるゝなり、白消の外近時改良土釜製法隨所に行はれ全產額の二割方を示し居るものゝ如く角俵六貫造を以てせり。

◉陸羽西線、古口、清川

陸羽線開通前は酒田線と稱し、新庄より分岐し酒田町に通ずる沿道薪炭の生產地として數ふるは津谷、古口、清川なりとす、而して津谷は鮭川便によりて曲川方面の產を集中せしめ、僅かに中央市場へも輸出をなしつゝあるも數ふるに足らざるなり、就中產額の認むべきは古口驛にして、大正五年度輸出量三萬三千六百俵を示せり、此地は板敷嶺、仙翁嶺等の大山脈あり山林豐多なれども運輸便甚だ惡しきものあれば道路開鑿と相俟つて產額增大すべし、清川に至りては羽黑山々脈を背面に控え、古口に稍々匹敵すべき產出を見ると雖も、人口二萬四千を有する名邑酒田町の需要に吸引され、中央輸出を見るの餘裕なきが如し、品質俵裝にありては他と大差なく、中央市場向を五貫造とし他は亂貫大俵なり、又近時改良黑消法の普及に傚ひて此地方も逐年土釜木炭の製出を見るなるべく想察せらるゝものあり。

◉眞室川、釜淵、及位

◎沿革　同方面の產が京濱市場に迎えられたるは明治三十七年十月頃よりなり、其以前にありては土地の需要に供するの程度に止まり居りしを、輸送の便開けてより主要產物の一に數へられ、中央市場相場を標準として生產し輸出し以て益々林產向上の域に達しつゝあり、品質俵裝の如きも亦逐年改善を加えられつゝあるは欣ぶべき現象と云ふべし。

◎產出額　主要輸出驛たる眞室川、釜淵兩驛の最近兩年度の輸出量を掲げ見ん。

眞室川驛	大正四年度	木炭二二六、七六〇俵 薪二四〇、九六〇貫	大正五年度 木炭二三三、六〇〇俵 薪四九七、七六〇貫

釜淵驛　大正四年度（木炭一〇九、二四〇俵　薪一〇〇、一六〇貫）　大正五年度（木炭六一、二四〇俵　薪一三八、四〇〇貫）

◎**前途の見込**　薪炭林蓄積の狀況は前項に述べたれば茲に畧すること〻し唯將來の見込に就て概況を述ぶれば、安樂城、及位方面は樹林著るしく豐富なれば今後に望を囑するに足るべし、されど釜淵附近にありては年を重ぬる毎に深山に入るの傾向なれば現狀を維持するを得ば滿足と見るの外なし、又金山在なる安澤村に入りては中林森羅の狀にて材積豐多なるも山深く運輸の便乏しく搬出の困難を憾むの外なきなり。

◎**品質俵裝**　品質は稍々佳良なれども中等品多くを占む、俵裝は東京輸出を五貫造とし土地及中間需用地向へば大俵亂貫の儘を仕向けつ〻あり、同地方も又近時黑消製法の行はれつ〻あるも多くは堅炭のみなり。

◎**同地方荷主**として數ふべき主なるもの左の諸店なり。

山形縣最上郡新庄驛前
薪炭製造輸出販賣 Ⓚ 湯澤敬介
振替東京一六〇六七　電略（〇ケ）又ハ（ケ）

山形縣最上郡新庄町五日町（驛ヨリ五丁）
薪炭問屋 久 楠澤三之助　電話一四七
久 楠三支店
陸羽東線東小國村會澤驛前

山形縣最上郡向町驛前
薪炭製産業 新 伊藤義治
電略（ヤマシン）

山形縣最上郡鮭川村（新庄驛ヨリ二里）
薪炭輸出商 イ 小屋伊勢吉
振替東京二六〇〇五番

山形縣最上郡眞室川驛前
薪炭輸出留釜堅炭 ツ 井上今朝治
電略（イウエ）

山形縣最上郡金山町（眞室川驛ヨリ一里）
薪炭木材商 イ 岸伊兵衛
振替東京三五七六八番　電略（キシ）

山形縣釜淵驛前（明治運送取引店）
薪炭木材商 釜 堀井長作
電略（カマ）又ハ（ホ）

山形縣最上郡釜淵驛前
薪炭製材 庄 庄司甚藏
電略（シ）又ハ（シヨ）

山形縣最上郡古口驛前　山内幾藏
山形縣新庄町小田島　山崎芳藏
山形縣金山町　佐藤彖三郎

秋田縣

奥羽線沿線

秋田縣……奥羽線……院内……横堀……湯澤

◎院内、横堀、湯澤

◎沿革　需要界又は取引界に於て院内炭と稱せらるゝ産は即ち此の地の出なり、中央市場より供給を仰ぐに至りしは何處も同じく鐵道開通後のことに屬し、而かも高田律雄氏越中より身を此の地へ移し製炭輸出業を開始したるを以て嚆矢となすが如し、又湯澤にありては明治三十九年より中央輸出開始され、其以前に於ては土地用として又鑛山用として相當の製炭を認めらるゝあるなり、今や堅炭として普く業界に聲價を博するに至り來れり。

◎産出額　産額としては多少の増減は免れ難けれども既往二ヶ年間を以て標準となし得べ、左に三驛の輸出額を示さん。

院内驛	大正四年度	木炭 二四四、〇〇〇俵 薪 六、八八〇貫	大正五年度	木炭 薪	一六四、〇〇〇俵 —	
横堀驛	大正四年度	木炭 七八、二四〇俵 薪 一〇、四〇〇貫	大正五年度	木炭 薪	九五、六四〇俵 六四〇貫	
湯澤驛	大正四年度	木炭 八二、六三〇俵	大正五年度	木炭	九一、五七〇俵	

◎薪炭林蓄積狀況　湯澤小林區署管内に薪炭林として計上すべきは四萬三千餘町歩にして樹種は楢を最とし、槲其他の雜木なり、民林としては其十分の一に過ぎざるなり、而して院内方面にありては鑛山用坑木に要し、且又木炭も相當に需要さるゝが故に近在は殆んど伐り盡せるの狀なり、されど此地へ集合すべき地點たる由利郡笹子附近は、炭林豐多にして殆んど無盡藏に近きが如けれども道路の開鑿を先にせざれば能はざるの狀なりと雖も必要に迫られ追々は此方面より由利郡全般へかけて手を延ばすの時期に到達せん、而して同郡薪炭林の豐裕なるは些か心を强ふするの感ありて前途に望多し。

◎品質俵裝　院内木炭は會津産堅炭に亞ぎ品質優良なり、此優良品の産地は笹子方面にして留釜の製法に依る、俵裝は茅丸俵五貫造なり、而して湯澤にありては成瀨、稻庭方面より少量の優良品を製出するも概して普通物多し、又同地方も中央市場輸出の外は大俵十貫造あり、稀れには中央へも出す。

▼荷主　同地荷主の主なるは左の諸店とす

秋田縣湯澤町大町五九（驛ヨリ一丁）
合名會社 木村商店
電話七四番
薪炭部
秋田縣雄勝郡湯澤町（七三三驛ヨリ三丁）
木村幸右衛門
振替東京一四六八七番

秋田縣院内町銀山町西三番
薪炭輸出商 ホ 林 貞治
（院内驛ヨリ一里）

秋田縣院内驛前
薪炭輸出商 越 高田律雄
電略（マルコシ）

秋田縣雄勝郡西馬音内町本町一八
薪炭商 旭 黑澤圓治
電略（アサヒ）（湯澤ヨリ二里半）

秋田縣雄勝郡須川村
薪炭商 三 佐藤商店
電略（サト）横堀驛ヨリ一里

秋田縣院内町（驛ヨリ一里）
薪炭商 モ 諸越理吉
電略（ヤマモ）

秋田縣雄勝郡西馬音内町
米穀木炭雜貨 カ 佐藤儀七郎
電略（サ）（湯澤ヨリ二里半）

秋田縣雄勝郡須川村相川
木炭商 ㊙ 高橋安藏
（横堀驛ヨリ一里半）

秋田縣雄勝郡稲庭町
薪炭木綿類雜貨委托販賣 セ 瀨川哲藏
電略（セカワ）十文字驛ヨリ三里十丁

◎十文字、横手

◎**沿革**　木炭の製せられしは遠く五十年の昔農家の副業として僅かに近傍市街地に供給する少量の產出を見るあり、軈て奥羽線の開通あり明治三十八年六月より東京に仕向けらるゝを得て林產收入の上に光明を見るに至り來れり他に沿革史として特記すべき事項なし。

◎**產出額**　十文字驛は東は增田町方面西は大森町方面より集中するものにして今兩驛輸出量を掲げて今後の產額を測定するの資に供せん。

十文字驛	大正四年度	木炭	一五六、二八〇俵	大正五年度	木炭　二〇三、一六〇俵
		薪	九三、四八〇俵 七、五二〇貫	大正五年度	木炭　一〇二、四四〇俵 薪　四一、四四〇俵
横手驛	大正四年度				

◎**薪炭林蓄積狀況**　平鹿郡内官有林中薪炭を產し得るは約二萬三千餘町歩にして樹齡は六七十年のもの多く稍々豐富に近きもの丶如し、他に若干の民有林あり、此方面は樹齡三四十年にして恰適なりと雖も面積多からざるを遺憾とす、又前途の見込にありては附近は伐採して開墾畑地に地目を變ずるものあり、然らざるも木炭業の進歩に伴れ製出を爲すもの多く爲に近傍にては不可能となれり、故に年一年を超ゆる毎に深山に入るの傾向となるなり、されど前段述ぶるが如く六七十年の樹齡に達するもの將た運搬費の多額を投じて深山をも厭はざるとせば薪炭林は當分豐多を以て滿足し得らるべし、而して横手驛輸出のものにありては多く黑澤より柏峠を經たる岩手縣國境を超えて百數十年を經し老樹をさえ炭材に充つるなり、品質は良好を望むべからざるも薪炭林としては同方面は無盡藏たるなり、其他は稍々減少の傾向にあれど十年十五年は從來の產出額を標準とし增減なかるべき程度

にあり。

◎品質俵裝　十文字驛より輸出の木炭は成瀬、大澤の産多く薪炭林も亦民有大部分を占め十四五年より三十年内外の樹齢を以て伐採する故優良品多し、之れに反して横手驛より輸出するものは大森幷に柏峠附近官林より製出する爲め大焚物多し、而して東京仕向は茅俵四貫五百造なり、稀れに九貫乃至十貫の大俵もあり、黒消も近時隨所より少量づゝを出すあり、此種は茅角俵五貫匁なりとす。

▼荷主　兩驛より中央及中間へ輸出を爲す主なる荷主左の如し

秋田縣平鹿郡増田町
木炭輸出商 ㋐ 阿部竹松
電略（アタケ）十文字驛ヨリ二十丁

製炭所 秋田縣平鹿郡大森町
飯田式留釜堅炭 ㊂ 飯田利助
（一名秋田備長）
楢崎式土釜角俵 東京市本所區元町五番地
羽後屋 飯田東京支店
電話本所三五六八番

秋田縣平鹿郡横手町水上（驛ヨリ二丁）
木炭輸出米穀商 小 小松菊藏
電略（コマツ）又ハ（コ）

秋田縣平鹿郡増田町十文字驛ヨリ二十三丁
薪炭問屋米穀問屋 ㋑ 長江貞治
振替東京三四三九九番

秋田縣平鹿郡横手町水上町
木炭米穀商 ㋜ 谷口富治
電略（タ）驛ヨリ二丁

秋田縣平鹿郡横手町鍛冶町
薪炭商 ㋝ 富岡清吉
電略（トミ）驛ヨリ二丁

秋田縣平鹿郡大森町
木炭米穀商 ○ 赤川運吉
電略 アウ）又ハ（ア）

◎大曲、角舘、境

◎沿革　明治三十七年十二月鐵道の開通せられて林産物中首位を占むる迄に木炭の輸出を見るに至りたれども、其始めに於ては土地の農民が僅かに副業として營み御物川の舟楫の便によりて秋田市土崎等へ販賣したるに過ぎざりしなり、而して同地は秋田縣中隨一の産出を見る仙北郡の咽喉部にして從つて木炭の産額も多量に上り居るなり、殊に此地は鑛山多く郡中數ヶ所の鑛業は薪炭の生産及相場をも支配するの景氣を沿え、製炭夫又は運搬夫雜役夫の過不足は鑛業の隆盛と否とによりて幾多の影響を被るものなれば、薪炭林の豐富にして且つ中央市場の相場昂騰したりとて、木炭の産額多量を期し得らるゝの限りにあらず、土地の繁榮も鑛業に與るの大なるを認むべし。

◎産出額　汽車積輸出數量を各驛に就て調ぶるに左の量を示せり、將來の見込に對照し同

地産額の概算を知るに足らん。

大曲驛	大正四年度	木炭	一八八、〇八〇俵	大正五年度	木炭　一九三、〇四〇俵
刈和野驛	大正四年度	木炭	六〇、二八〇俵	大正五年度	木炭　六九、五六〇俵
境驛	大正四年度	木炭 薪	一五七、二八〇俵 五三、一二〇貫	大正五年度	木炭 薪　一三〇、六〇〇俵 一〇三、八四〇貫

◎**薪炭林蓄積狀況**　大曲、角館、生保内、の薪炭林面積は小林區署にては約八萬三千町歩ありと稱し樹齡は七八十年より百四五十年を普通とし二分の一は殆んど楢を以て充たし居れりと云ふが、唯憾らくは頽林中林乏しき爲品質良好なりと云ふを得ざるべし、角館へ集中するは生保内、田澤、西明寺の産なるが同地方は炭林大豐富にして前途に望多く人皆無盡藏の稱を以てせり、又境驛へ集中するは荒川方面の産にて驛より三四里乃至六七里にして山元へ達し樹質良く搬出の便可なれば之又望を此地に囑するを得べし、大曲に至りては中央及中間各需要地へ輸送するの便より角館其他四近より此驛へ集合するものにして前掲の輸出量を示すも同地直接の産にてはあらざるなり、而して大曲より角館、田澤を經て岩手へ通ずる鐵道開通したらんには自然大曲驛よりの輸出量は減退さるゝことゝなるべし、

尙他に神宮寺、飯詰方面よりも多少の産出を見つゝあり。

◎**品質俵裝**　角館、大曲へ集中の産は餘り佳良ならざるも生保内地方より出るものに優良品を見るべし、境、刈和野は優良品多く稍々聲價を博せり、俵裝量匁は東京仕向物に限りて茅俵五貫造なるも土地及中間に供給するものは十貫十二三貫の大俵なりとす、又稀れに土釜木炭をも産出するも極めて少量なり、薪も少許の産出ありて薪尺は二尺及一尺五寸の二種とし一尺五寸ものを東京へ輸出す。

▼**荷主**　同地方荷主の主なるものに左掲數舗あり

秋田縣仙北郡中川村（大曲ヨリ五里）
木材薪炭商　澤口貞吉
電話一八番電略（サワ）

製炭業　長谷川久藏
製炭所　秋田縣河邊郡船岡村　同縣仙北郡土川村杉澤
營業所　奥羽線境驛前

薪炭輸出並肥料商
秋田縣仙北郡角館町
文　金谷文六
電話五六番電略（カナヤ）
大曲驛ヨリ道程五里アリ

秋田縣仙北郡境驛前
青繩掛製炭　佐藤寅次郎

秋田縣仙北郡荒川村上淀川
赤繩掛製炭　稲葉小五郎
米穀荒物　木炭商（境驛ヨリ八丁）

秋田縣仙北郡西明寺村
木炭輸出商 新山三郎
（大曲驛ヨリ七里）

秋田縣仙北郡荒川村
木炭輸出 細谷梅四郎

秋田縣仙北郡荒川村稲澤
木炭輸出 佐川金司

薪炭輸出商 加藤梅松
秋田縣由利郡大正村新波
電略（カトヲ（又ハ（カ）

◎能代、二ッ井、大館

◎**沿革**　能代は由來木材の産地にして木炭は極めて少量の産額を示すに過ぎず、之れに反して二ッ井は縣下中主要生産地を以て知られ古くより中央輸出を營むものを出し旺盛を極めつゝあり、又大館も二ッ井と稍々髣髴し品質俵裝の如きも大差なく産額又匹敵せるものあるを認む。

◎**年産額**　左に主なる輸出驛より發送せられたる最近二ケ年の數量を示し以て同地産額を知るの資に供せん、此外秋田驛より年平均九萬二千俵、五城目、鹿渡、森岳、機織の各驛より少なきが四萬三千俵より多きが七八萬俵を産出す。

二ッ井驛	大正四年度	木炭	二八五、三〇〇俵	大正五年度	木炭 二五四、一〇〇俵
		薪	一五八、二四〇貫		薪 三六、一六〇貫
能代驛	大正四年度	木炭	八九、四八〇俵	大正五年度	木炭 五九、三六〇俵
		薪	一〇六、二四〇貫		薪 七二、三一〇貫
大館驛	大正四年度	木炭	一三二、五〇〇俵	大正五年度	木炭 一〇九、七四〇俵
		薪	六一、二四〇貫		薪 四八、一三〇貫

◎**薪炭林蓄積狀況**　能代小林區署管内に於て一萬七千五百町歩、秋田小林區署管内に於て三萬五千六百餘町歩の官有薪炭林あり、而して地名に就て云はゞ秋田市へ集中する木炭は仁別の方面に當る丸森、荒澤の山脈にて炭林豐多なり、五城目の高杉山脈、鹿渡にありては黒森大倉、二ッ井にありては大阿仁小阿仁の水源地諸山林は殆んど無盡藏にして山林の豐多なる縣下隨一との稱あり、更に大館に至りて十二所、毛馬内の方面は將來に望を囑しつゝあるものゝ如し、從つて前途の見込としても二ッ井は四近悉く薪炭林にて圍まるゝと云ふも過言にあらざれば今後搬出道程に於て勢ひ距離を有するに至るも豐富なる點に於て望多く、能代秋田へかけては年々多少つゝ減退を見るの傾向なりとは云へ、今後十年十五年は目下の狀を保つべし。

◎**品質俵裝**　能代近在の檜山、八森、常盤方面は一層優良品を出し、又二ッ井へ集積する大阿仁小阿仁の水源方面よりも却々に侮り難き優秀品を産出す、其他は普通物多くして特

記すべき程にあらず、而して俵裝にありては茅及菰の五貫造を東京輸出とし稀れに大俵九貫十貫ものを出しつゝあり、黒消に至りては晩近の流行にかゝり弗々と其製出を見るの傾向なり、されど當時としては未だ數ふるに足らず。

▼荷主　同方面荷主としては數十名に達せり其主なる店舗を掲ぐれは左の如し

秋田縣山本郡能代港（驛ヨリ十丁）
木材、木炭製板業　金野榮治
電話六四番振替東京二三一五四番
秋田縣山本郡二ッ井驛前
輸出部　金野木炭部
專任　飯野伊勢吉

秋田縣山本郡二ッ井驛前
明治運送株式會社取引店
山印旭印
木炭輸出商　豐澤富五郎
電略（トヨ）又ハ（ト）

秋田縣山本郡檜山町檜山
木炭商　神馬寅治
（機織驛ヨリ一里半）

秋田縣山本郡能代町大町
薪炭商　工藤理喜三
電略　○キ）（驛ヨリ三丁）

秋田市鍛冶町上川反五番地（驛ヨリ二十三丁）
薪炭問屋　佐藤賢助
電話二五九番電略（サト）振替東京二四五八〇番

秋田縣秋田郡五城目町
木炭輸出商　畠山仁三郎
電略（ハタニ）

秋田縣山本郡檜山町
木炭輸出商　西村德五郎
（森岳驛ヨリ一里半）

秋田縣雄勝郡西馬音内町
木炭輸出
秋雄薪炭合資會社
電略（アキ）

秋田縣山本郡檜山町
薪炭商　齊藤新一
電略（サイト）

秋田縣山本郡鹿渡驛前
木炭輸出商　加賀良吉
電略（カカ）

秋田縣山本郡檜山町上母體
木炭木材　戸松新之助
電略（トシン）

秋田縣山本郡檜山町母體
木炭輸出商　野村重藏
電略（ノムラ）

秋田縣南秋田郡五城目町
木炭輸出商　荒川權太郎
（五城目驛ヨリ一里）

秋田縣山本郡鹿渡驛前
內國通運株式會社取引店
木炭輸出商　田中吉五郎
電略（ヤマ一）

其他五城目町に加賀谷力藏商店、早口驛に五十嵐貞治商店、北秋田郡西大館に田中富藏商店、北秋田郡大館町に鳴海賢之助商店等あり

千葉縣

千葉縣は地味の關係より松の生育に適するを以て繁茂せる松林を處々に散見す、就中木更津沿線中姉ヶ崎、小糸川、保田町の一帶は松薪の生産地にして優良品を産出し又松炭をも多量に移出しつゝあるは世既に定評の存する所たり、木炭に於ても椚楢土釜物を處々より出し湊川筋諸山林よりは白消優良品を産し房州炭と稱して紀州備長に酷似せる俵裝を以て京濱市場に現はれ、熊野木炭の代用に供せらるゝ品種は此地方より移出するものなり、概して謂はゞ同縣は薪炭の主なる生産地として數ふるを得べく縣内に於ける昨大正六年度の産額は土釜四十七萬二千三百俵、堅十五萬九千五百三十八俵に達せり、今之を全國各地の統計に照すに正に第九位に列するなり、薪は茨城を第一位とし栃木を第二位とし第三位が即ち本縣に相當し居りて年産額二百五十貫内外を産出し而かも八割は松薪なりとす、左に木更津線沿線より始め各産地別に調査せる概要を摘述すべし。

木更津線沿線

◎五井　市原郡の中央を貫ける養老川の上流に當れる高瀧、平三、里見の村落は四面山を繞らし森羅の光景を呈し一見薪炭の生産に適すべきを知る、林地は概ね民有林にして樹種は松、楢、樫、雜木にして就中松林の繁茂するありて、稍々材源豐多と見て差閊なかるべし、故に生産品は松薪松炭を以て主とし居るなり、而して之を五井町を距るの遠近より品種を分たんか即ち輸送の便宜より鐵道に近接せる山林は薪とし遠きに入りては木炭に製し養老川の舟楫の便によりて五井町商人の手を經由し京濱へ移出さるゝの順序なり、又八幡町に近接せる産地よりは駄馬にて同町へ搬出し汽車積又は船積となりて市場へ輸送さるゝものとす、其一ヶ年産額にありては五井町よりは薪百二十萬束木炭四萬千八百俵内外を産出しつゝあり、木炭の俵裝は茅俵造正味二貫幷に四貫の二種あり、又菰俵造り三貫にして通稱松ラクと名くる稍々佳良品を産す、薪は木取り一尺三寸束二尺にして産額の歩合は松薪六分堅木四分の割合を保ち居れり、而して同地方將來の見込としては松材にありては近時殖林思想の向上と共に遠き將來に望あるべきも雜木林は年々減退の一方にあるなり。

千葉縣市原郡五井町
薪炭商　矢島吉松
電略（ヤシマ）

千葉縣市原郡平三村上畑
木炭叺商　古瀧國太郎
電略（タ　ニ）

千葉縣市原郡鶴舞町田尾
木炭叺商　小高末吉

◎**姉ヶ崎**　養老川の南部一帶と君津郡久留里町に通ずる平岡村近在より生産するものを此驛に集注す、同地は薪の主要移出驛として廣く聲譽を博す、而して移出商品は大半船便によりて積出され京濱市場指して搬出せらるゝ其年産額數量にありては、薪約百八十萬束内外木炭約五千二三百俵を數ふるを得べし、薪尺に至つては五井町と髣髴し居れば特に記すの要なかるべし、林源蓄積は如何と繹ぬるに去明治四十五年の調査には十五萬町歩を示し居りしも其後年一年に減滅し、伐採する傍らより地目を畑地に換へ開墾耕耘し來れる傾向故今日にては殆んど半減され僅かに八萬町歩を餘すに過ぎざるが如し、從つて薪炭の産額も年と共に減退の一方にて辛ふじて前掲の數量を保ち居るなり。

▼**荷主**　は主として左掲諸店なるが尚隣驛五井驛に石川清松、矢島甚藏の二商店あり

薪炭肥料商　廣瀬幸次　千葉縣市原郡姉ヶ崎町（中野屋號）　姉ヶ崎驛ヨリ九丁

薪炭商　石渡政吉　千葉縣市原郡姉ヶ崎町　姉ヶ崎驛ヨリ十丁

薪炭商　石福平次郎　千葉縣市原郡姉ヶ崎町　姉ヶ崎驛ヨリ八丁

薪炭商　海保恒次　千葉驛市原郡椎津　姉ヶ崎驛ヨリ十二丁

◎**木更津**　君津郡中薪炭を産出するの地は久留里町、松岡村、小櫃村、富岡村、馬來田村中川村等にして炭林豐多なれば他地域と比較せば林産の業に從事する多きにあり、今木更津物と唱ふるは同町約十方里以外の林地より産出して木更津町に於て集散せらるゝ薪炭幷に松岡村近在より久留里附近に至る各地の産が同町に一旦集合して更に木更津町へ集中するものを總稱するものとす、其一ヶ年産出額は松薪約二百三十萬束、堅木四十萬束、木炭三千四百十二萬俵に達せり、又小櫃、馬來田、中川の生産品は長浦村、代宿、久保田、藏波の各地へ搬出せられ仲買荷主の手を經て京濱へ移出さるるなり、産額にありては代宿、久保田は各薪に於て三十萬束、藏波は約二十萬束とす、薪尺に於て久保田、藏波は丈一尺三寸五分束二尺なり、木更津は丈一尺四寸束二尺一寸なりとす、而して木炭に至つては土釜は茅俵正四貫並二貫造り、石釜は茅俵四貫造を普通とし樫、楢、雜の各種あり、又松炭にありては菰俵二貫五百匁を普通なりとす、品質は概して優良にして殊に石釜物の如きは紀州備長に較べて稍々匹敵する程の逸品を産するありて、唯數量の尠なきを遺憾とするのみ、而して同地方將來の見込は如何と云ふに前述の如く炭林比較的豐富のことい へ當分の間は從來の産額を支持し行くべく思惟さる。

▼荷主　此の方面に於ける薪炭商の主なるものは左の諸店なりとす

久留里町　梶川芳松、武田辰次郎、鳥井市之助

木更津町　地曳國太郎、八幡彌三郎、松崎金吾、小川國太郎、加藤寅吉

◎小糸川　周西、青堀兩驛の中間に位置を占め薪の生産地として主きをなす、産地は小糸川の上流、遠きは七里近きは一里の間なる村落にして中村、小糸村、秋元村、三島村等なりとす、而して運搬經費の關係より人見村近在よりの生産品には薪多く、遠距離にあつては木炭として移出するの傾向なり、山出し運搬は近きは駄馬に據り遠きは舟楫の便にて小糸川を下し人見の仲買荷主の手を經由し京濱市場より豊橋、名古屋方面へ輸出せらる、其産額一ヶ年薪七十萬束木炭約六萬俵内外の間にあり、更に櫻井、波岡、大貫の各村よりも優良の薪炭を出す、櫻井村は年産額薪に於て八十萬束木炭に於て二千二三百俵、波岡村は薪五十萬束、大貫村は薪二十萬束を産出する比例にあり。

如上各産地の薪尺にありては小糸川物は松堅木共丈一尺四寸束廻り二尺一寸及二尺五寸の二樣あり、由來五分一の稱あるは則ち此の小糸川より起りしものなりと傳ふ、而して木炭の俵裝量匁は土釜は普通四貫造とし松炭は三貫造なり、石釜は紀州備長に均しき俵裝にて正三貫人長俵造となす、又大貫村の産は薪尺一尺二寸五分束廻り二尺又稀れに一尺七寸ものもあり、櫻井、波岡は松は一尺二寸の丈を普通とし束廻りを一尺七寸とす、堅木は丈を一尺四寸とし束廻りを二尺となし居れり。

因みに同地方より生産する堅炭は木更津近在の産よりも遙かに品質優良にして都市の各種料理店より歡迎を受け好評の嘖々たるものあるも、如何にも産額僅少にして又生産を補促するの途なし、されど近時林産物の市價向上に伴れ殖林を奬勵するの趨向にあるが故に成木の曉にも至らば幾分かは産額の増加を現はすに至るべし。

▼荷主　薪炭輸出商の主なるは君津郡周西村人見吉濱政藏、波岡村畑澤大森七藏、櫻井村小泉林藏、中村糠田永田市治の諸氏なりとす。

◎湊町　同地も又薪炭の主要産地として名聲を博し居れり、産地は天神山、環、關、豊岡丼駒山、秋元等の各村落にして、湊町を距る近きは一里遠きは五里を隔つる林地にして鴨川町へ通ずる縣道筋を以て主とせり、産額は一ヶ年の量薪百萬束内外を算し松六分堅木四分の割合なり、木炭は土釜堅合して二十二萬俵を下らず、薪尺は松及堅木共丈一尺二寸五分束廻りは松一尺八寸堅木二尺なりとす、木炭俵裝は隣接産地と同樣にて茅丸俵造にして

土釜は四貫匁造り堅は正三貫の長俵造なり、而して同地方將來の產額如何と繹ぬるに從來の產地は漸次伐り盡す傾向なりと雖も縣林務當局が殖林奬勵の要より林區署と提携連絡を執りて鬼涙山、鹿野山等の螺起せる山脈の麓に松、椚等の植付を盛にし林源を豐富ならしむべくあれば前途の光明を今より期待して可なるべく信ぜらる。

▼荷主　湊町に高橋次郎吉、平野忠次郎、石崎次郎、八馬政造の諸店を主とす

◎保田町　安房郡保田町は背面に鋸山を負ひ居れど禿山にして樹木なく唯鴨川町へ通ずる縣道筋附近にして君津郡と界をなす山脈が林積稍々豐多なるのみなり、從つて林業に從事する人は僅に農業の副業として營むに過ぎざるなり。故に產額に至つても松薪五十萬束、堅木薪四十萬束、松炭九萬二三千俵、樫楢雜木の土釜堅各五十四五萬俵内外を算するに過ぎず、之れが產地は大山村、吉尾村、主基村、佐久間村の近在山林を以て主となす、薪尺束廻にありては他と畧ぼ大差なく丈一尺三寸束廻り二尺一寸を普通とす、木炭は土釜は四貫造丸俵にして堅は三貫二百匁入長俵造なり、松炭は菰俵造りにして正味二貫五百匁入なりとす、品質にありては堅炭は前掲の各產地のものと同樣にて熊野木炭の代用に充てらるゝ優良品を出し其他は普通にして特記の要を認めず、前途の見込としては此處十數年間ぐらいは現在の產額を保ち得らるべきか。

▼荷主　薪炭輸出商には川名源十郎、佐久間村奥山椎ヶ本商店、保田町石崎治助、戸田金之助、石井傳、川崎七兵衞の諸店あり、勝山町に鈴木小兵衞、鈴木豊吉の兩店舗を主とす。

房總線沿線

◎勝浦町　千葉より分岐して大網に到り東金線の分岐點より本納、茂原、一ノ宮、太東、長者町、三門、大原、御宿の各市街地を經て道程四十四哩三分の地點に位し漁業盛んなる勝浦町は又一面に於ては薪炭の主要生產地として此等中間市街より京濱市場へ向け一ケ年木炭二十三萬俵内外を移出し更に興津よりの產年額五萬俵も此の勝浦へ集中せらる、沿道大原町又年產額六萬餘を產すれば今同方面の產を合算するに於ては一ケ年裕に三十萬俵を超過することゝなるなり。而して產地の主なるは勝浦町を距る五六里の村落にして大多喜町を包圍する諸山林幷に西畑、總元、總野の各地より生產するものを以て優良とす、林積

亦豐多なれば現今の產額をば當分維持すること疑なし、量匁にありては土釜物は八貫菰俵多數を占め居り、堅炭類にありては正味二貫八百匁の小俵を稀れに出すあるも此等は土地及沿道の需用に向き京濱への移出は尠し。

▼荷主　勝浦町に桐川助次郎、鈴木常吉、大多喜町に小高悟一、本吉七太郎、西畑村中野に野口與一、老川村大字小澤又に中島憲太郎、老川村に太田木炭店の諸商人あり

◎天津町　港村と共に安房郡の東部に位し勝浦町より縣道開け四里の距離を保つ、之又薪炭の生產地として名あり、仕向地は京濱、横須賀、浦賀の市場にして移出額は天津町一ケ年の數量、木炭に於て土釜堅取交せ十五萬俵、松炭五萬俵、港村にて木炭約三萬俵薪四萬束なるが如し、量匁は土釜堅は茅俵四貫造り松炭三貫造菰俵なり、薪は丈一尺三寸束廻り二尺とす、產地の主なるは夷隅郡老川村に至る沿道の官有民有林地にして民有林は秩序ある輪伐法を則り居れば產額も年々均衡の率を保つが如けれども、官有林にありては近山は伐り盡し追々深く入らざれば能はざる情況なれば增額を望むも不可能なるべし。

▼荷主　天津町に山下萬吉、林倉之助、白井林業部の諸店あり港町大字內浦に杉浦清藏氏等あり。

◎鴨川町　背は山脈を繞らし前は大平洋に面する鴨川町は勝山町、保田町、北條町の各市街より約八里の距離ありて馬車の便あり、此地又薪炭を生產し而かも產額は四近に冠たるものありて一ケ年木炭四十萬俵、松薪十五萬俵、檜大束六十萬束を產出す、產地の主なるは保田町へ通ずる沿道主基村、田原村、西條村幷に君津郡中の一部よりの生產品を此地に集注し海手物の各を負ふて京濱及橫須賀の市場へ移出さる、量匁は多くは皆掛四貫を以て普通とせり、而して製出品中堅炭にありては備長の代用に充てられ好評あり。

▼荷主　鴨川町前原に西宮由藏、鴨川町に久根崎彌吉、前田兼松、小原巳之吉、鈴木鶴松の諸店あり。

千葉縣君津郡周西村人見
薪炭同漕店　吉濱政藏

千葉縣安房郡港村內浦
薪炭商　杉浦清藏

千葉縣安房郡保田町
薪炭商　石崎治助

千葉縣安房郡保田町川向
薪炭商　石崎次郎兵衛

千葉縣安房郡保田町本郷
木炭商　小島巳之助

千葉縣安房郡鴨川町
薪炭商　久根崎彌吉

千葉縣安房郡鴨川町
薪炭商　西宮由藏

千葉縣勝山町龍島
薪炭商　三河屋林藏

千葉縣安房郡天津町
薪炭商　林倉之助

茨城縣

一ヶ年產額木炭百十二萬七千俵、薪一千三百十七萬四千貫を出し全國主要生產地中木炭にありては第七順に位し薪にありては最高第一の地歩を占め居る茨城縣は近時林產物の奬勵改善に志すあり縣當局又熱心に指導するありて縣下同業を一丸とする同業組合の設置と相俟つて製品に對する移出檢査を勵行して品質の改良と俵裝量匁の統一を畫策しつゝあれば、日ならずして改良品の市場に現はるゝことゝなり需用者の望に副ふと共に販路の擴大せらるべき機運に逢着しあるなり、從つて同縣生產業者の今後の責務は殖林の觀念、濫伐防止の心得とを以て業に當り產額の增大は計り得られざるまでも尠くも從來の產額率を永遠に保つべく心掛　ること肝要とす、今總說を述ぶるに際し去大正六年十二月五日縣當局が縣下主なる生產販賣業者を一處に招集し製品改善統一に就て諮問したる其の各項目を茲に掲けて參考に供せん。

(一)炭材の長さを一定すること(二)製法及計量を一定すること(三)販路及商取引上の關係(四)白消炭の改良を計ること(五)俵裝の改良を圖ること

を縣勸業課長より諮りたるに滿場擧げて贊同することゝなりて當日の出席者を組合創立發起人とし、續いて發起認可を請ひ去本年五月創立委員會を開催して愈々設置の運びとなりたり。

而して同縣の特產物は佐倉炭と稱し椚丸の最優良品を出し廣く名聲を知らるゝ所にして松薪も又產額の多量と品質の優良なるとは全國に冠絕す、之れより各產地に就て述べんとするものなるが、同縣は鐵道沿線別に順を追ふよりも寧ろ郡別に編纂するを以て便なりと認むるが故に郡別に則りて調査したる概況を錄することゝせり。

稻敷郡

◎龍ヶ崎、江戸崎方面

龍ヶ崎町は佐貫驛より輕便鐵道の便ありて賃金九錢にて到る、江戸崎町と共に同方面は松薪の生産地にして松大才、並才、小才を産し、龍ヶ崎を中心とし江ヶ崎町の附近霞ヶ浦一帶より年額百八十餘萬貫を産し、荒川沖、牛久、佐貫、龍ヶ崎の産を合算して一ヶ年薪九十六萬四千貫を産し、霞ヶ浦一帶よりの産は殆んど全部が松なるも鐵路沿道の産は松に加ふるに椚、檜、雜の三本二〆、十二本等を産出す、而して木炭は多少の生産ありと雖も土地の需用に供するにも足らざるの狀にて寧ろ岩手、秋田の産地より毎年七百噸内外の補給を仰きつゝあるなり。

◎荷主　郡内主なる薪炭取扱荷主幷生産荷主は左の諸店なり

茨城縣稻敷郡舟島村舟津
薪炭商　平岡市郎兵衛
（土浦驛ヨリ二里半）

茨城縣稻敷郡木原村信太
薪炭商　市川誠一
（江戸崎町ヨリ二里弱）

茨城縣稻敷郡阿見村大室
薪炭木材回漕店　青山龜吉
（土浦驛ヨリ東南へ一里）

茨城縣稻敷郡奥野村奥原
薪炭商　服部寅松
（牛久驛ヨリ一里）

茨城縣稻敷郡龍ヶ崎町
薪炭商　伊勢仁染谷雄三
（驛ヨリ三丁）

茨城縣稻敷郡八原村大字浦原
薪炭木材商　本谷安治

茨城縣稻敷郡長戸村
大 薪炭竹木材商　大貫錦之助
電略キン（龍ヶ崎ヨリ一里半）

茨城縣龍ヶ崎町砂町（市村商店）
木炭問屋　製麵業　市 塚本清七
電話三三振替東京三三一八電略〇一

茨城縣龍ヶ崎町砂町
木炭商　澤屋號　△ロ澤春二
電略（サワ）（驛ヨリ十三丁）

茨城縣稻敷郡龍ヶ崎町砂町
薪炭石炭商　コークス　△三飯島三平
（驛ヨリ十二丁）

茨城縣稻敷郡龍ヶ崎町
五十集薪炭商　X栗田榮之助
（驛ヨリ八丁左側角）

茨城縣稻敷郡江戸崎荒宿川岸
回漕店　イ石川浩司

茨城縣稻敷郡高田村大字堆塚
△ヲ 薪炭木材商　山田萬太郎
（江戸崎汽舟場ヨリ十五丁）

薪炭木材商　山岡源太郎　稻敷郡奥野村

薪炭回漕店　岡澤仙治郎　稻敷郡君賀村

薪炭商　吉田啓之助　同村

薪炭商　小泉菊之助　稻敷郡木原村

薪炭商　中根駒五郎　稻敷郡島田村

製炭業　池田八郎兵衛　稻敷郡長峯村

木炭商　高野房吉　稻敷郡龍ヶ崎

薪炭商　吉田倉吉　稻敷郡月出里

薪炭商　高橋廣吉　稻敷郡龍ヶ崎

回漕店　永見義三郎　稻敷郡君賀村

新治郡

◎土浦、高濱方面

郡内生産地として見るべきものは愛宕山脈に連絡ある林地を以て最も將來に望を嘱し稍々無盡藏の狀に近し、高濱、羽鳥近在は林地への距離一里乃至五里の如くなれば左まで遠しと云ふにあらねど逐年深山に入るの傾向は何地も同樣なり、而して郡内薪炭林は一千五百五十二町歩の面積を有するも樹齡若くして松の三十年堅木の二十年前後を經たるもの多ければ生産物の品質は優良なれども林積石數に於ては反別の割合に多からざるなり、今左に同郡内主産地よりの移出數量を記すべければ、同方面より一年幾何産出あるかを知られたし。

		大正五年度		大正六年度	
羽鳥驛移出	木炭	九、七五三俵	木炭	一三、六五九俵	
	薪	一七三四、五九六貫	薪	一一七一、九九六貫	
高濱驛移出	薪	一〇八四五、五二〇貫	薪	一一四一、六〇〇貫	
土浦驛移出	木炭	一、七七三俵	木炭	四、〇七八俵	
石岡驛移出	薪	一〇二七、四四〇貫	薪	七七一、五八〇貫	

以上の産額を示せり而して同方面より産する品種は椚檜土釜にありては丸物多くして割尠く品質稍々優秀せり、薪は松大才、中才、小才、三本、五本、等にして丈は一尺四寸五分乃至一尺五寸を實地に行ひ居れり、堅木は三本二〆、十二本等を出す樹質稍々可なり。

▼荷主　主なる薪炭商を左に列記す

茨城縣新治郡高濱町東田中
小 薪材木商 小松崎福太郎
（驛ヨリ十二丁）

茨城縣新治郡高濱町
磐城木炭取次店 大 中田常之助
（驛ヨリ四丁）

茨城縣新治郡高濱町
薪炭商運送業 丸 山口九兵衛
（驛ヨリ十二丁）

茨城縣新治郡高濱町（眞家運送店）
六 薪炭木材商 眞家文次郎
（驛ヨリ十一丁）

茨城縣東茨城郡羽鳥驛前
薪炭商 卜 長谷川藤十郎
電略（ハセト）

茨城縣新治郡土浦町南川口町
薪炭問屋 矢口盛之助
（驛ヨリ二丁）

回漕店 小松崎春之助 新治郡關川村 電略（コハル）

薪炭商 大久保記之助 新治郡志士庫

行方郡鹿島郡

◎小川、鉾田、玉造、麻生、鹿島方面

行方、鹿島兩郡は著名生産地を以て夙に其名を知られ産額も亦兩郡を合算して一ヶ年二百萬七千二百八十貫の數量を示せり、之を地域別にすれば鹿島、麻生方面五十五萬八千八百七十貫、鉾田方面六十五萬三千八百貫、上島、白鳥、大同方面三十一萬七千五百六十貫小川近在十九萬六百八十四貫、王造町近邊二十八萬〇二百貫となるなり、殆んど此全部が薪にして木炭は僅かに一ヶ年産額十萬俵に過ぎず。

生産品の類別は松大才、小才、引三才、五本〆等に頒たれ、薪尺は一尺四寸乃至一尺五寸を通常とす、而して小川町へ集中する薪は多く園部川の上流より産出し其束廻りは高濱物に比し甚しく短く畧ぼ二分の二に近し。

茨城縣行方郡大生原釜石
薪炭生産業　大川豐太郎
（汽舟發着所ヨリ西へ四丁）

茨城縣東茨城郡小川町大字小川
薪炭問屋　幡屋藤四郎
運送店傘番　（高濱ヨリ一里二十丁）

茨城縣行方郡大生原村大賀
木炭製造業　小堀染次

茨城縣東茨城郡小川町六十八番地
薪炭委托販賣　菊地春吉
並に運送業

米穀肥料薪炭商　赤縄印　木炭　高橋留藏商店
茨城縣鹿島郡鉾田町
二二六六番ノ二　電略タカ

西茨城郡

◎笠間、宍戸、友部方面

◎沿革　同地方が製炭に志したるは明治の初年にして、近在の市街地より水戸方面へ供給したる殘額を僅かに人背又は駄馬に依りて高濱、大貫へ移出し船積となりて江戸の需用に仕向けたるものにて、直接中央市場へ輸出を開始したるは明治二十三年則ち鐵道開通と同時なり、而して同地方薪炭の林源は一里乃至五里を離つる村落の住民が農家の副業として製炭し、市街仲買商の手を經て中央へ販賣せらるゝを普通とす、されども近時林産業の向上に伴れて手山荷主の數を增せる傾向の如く見受くと雖も、專業者は至つて尠なければ初秋より春へかけて從業し爾餘の間は極めて閑散の狀にあり。

◎林源蓄積　山林面積は同方面を通じて大凡千五百町歩にして之が主なる樹種は椚、楢、其他の雜木林なり、而して林源の豐富なるは國見山、八瓶山の山麓官林にして中林鬱蒼として繁茂するを見る、故に往昔の如く距離の近きを望むも伐り盡せし今日に於ては到底得べからずして勢ひ深山に入るは止むべからざるも薪炭林としては當分盡きる憂なく、次項

に述ぶる産額ぐらひは今後とても増減なかるべし。

◎年産額　大正四、五年兩年度に於て三驛より發送せられたる數量は左の如し

	大正四年度		大正五年度	
笠間驛	木炭	二、二四三噸	木炭	三、一二七噸
	薪	二、四三九	薪	三、五六七
友部驛	木炭	一、二七七	木炭	一、四九〇
	薪	一、〇四三	薪	一、三五〇
宍戸驛	木炭	一、一二一	木炭	一、二〇一
	薪	—	薪	九四
岩間驛	木炭	一、五六四	木炭	一、四四七
	薪	一、二〇七	薪	九二〇

（但木炭は土釜九割を占む）

◎俵裝量匁　椚檜土釜茅丸俵造正四貫入、雜土釜正三貫五百匁入を一般定規とすと雖も人により幾分減量せるを出すあり、而して堅炭にありては正三貫匁入なれども亂貫多〳〵之等は貫目賣買に依て取引さる、而して椚丸の如きは優良なりとて聲價高し。

薪にありては松堅共産額に於て相半ばし薪尺は一尺五寸にして大才、小才三、五等あり堅木は三本十二本物なり。

明治三十三年創業合名會社柴沼商店製品
花崗石粉末人造石原料の御注文に應ず
薪炭肥料商 吉來栖嘉藤次
茨城縣笠間町驛前電話六二番電略（クルス）

茨城縣西茨城郡笠間町
薪炭石油商 瀧野幸助
電話六番 驛ヨリ十八丁

常陸國笠間町（多里屋號）
薪炭商 池内覺兵衛
電話四八番振替東京一六八四九番

茨城縣西茨城郡笠間町
薪炭商 深作平太郎
電略 フカ（驛ヨリ八丁）

薪炭商 **須田槇之助**
常陸國笠間町 電話五一番

薪炭商 **磯山歌之助**
常陸國笠間町 驛ヨリ十一丁

茨城縣笠間町（三木屋號）
薪炭木材商 赤尾杉理右衛門
電略（アリ）（驛ヨリ十七丁）

茨城縣笠間町（樫屋號）
薪炭商 山口吉四郎
電略（ヤキ）（驛ヨリ五丁）

常陸國岩間驛前
內國通運株式會社取引店 **眞家運送店**
店主 眞家良夫 電略（マイ）

常總線沿線

常磐線取手驛より分岐して水戸線下館驛に至る常總線は北相馬郡守谷町、結城郡水海道町等を經て眞壁郡に入り下妻、下館の市街地に連接する沿道は薪炭の生産地たると同時に消費地にして、水海道の如きは堅大束を産し中央市場へも旺んに移出さる、而して眞壁郡にありては沿道中林源に富み居るを以て先年縣山林課には製炭指導のもとに製炭改良講習會を各地に開催し爾來同地方の面目を一新し來れり。

◎**荷主**　生産業者幷に販賣業者の主なるは左の如し

常陸國眞壁郡大國村高久 七輪口土釜改良製炭業　增淵礁	木炭問屋　常總線水海道町 石炭コークス　中彦支店　店主田中喜助	茨城縣眞壁郡大國村大國玉 薪炭生産販賣　狩野彦三郎
茨城縣眞壁郡下妻横町 薪炭商　飯岡熊吉	茨城縣取手町 薪炭問屋　倉持多造	茨城縣眞壁郡上妻村 薪炭商　菊地藤松
茨城縣眞壁郡小栗村小栗 薪炭商　廣澤八藏	茨城縣眞壁郡下妻西町 薪炭商　田村芳一	茨城縣結城大町 薪炭商　岩崎菊次郎

水戸近在

那珂東茨城兩郡内野口、澤山、石塚、大宮等は薪炭林に富み内原、赤塚の兩驛へ搬出され汽車積となりて市場へ移出さる、同地方は土地の需用に供せらるゝ少量の堅炭の外は悉く土釜炭にして椚丸檜丸に至つては秀逸品として品質佳良なるを謳はる、而して大貫、管谷、勝田方面亦遠くとも五六里を隔たる處の山林より少量の土釜木炭と堅木薪幷松薪を産出し、地場の需用に供せらるゝ外京濱市場へも移出されつゝあり、今一ヶ年産出額の概算を知らんとして各驛既往二ヶ年間の發送數量を調査せしに左の數字を示せり。

	大正五年度		大正六年度	
水戸	木炭　一四噸 薪　一二三		木炭　三六七噸 薪　一八	（土釜） （堅九分松一分ノ割）
勝田佐和合算	薪　一、七五〇貫		薪　一、九六〇貫	（堅七分松三分）
赤塚	木炭　四五〇 薪　二、一四九		木炭　六四七 薪　一、四六〇	（土釜 （同上ノ割合）

茨城縣……水戸近在

内原	木炭 薪	一九二噸、四五九	木炭 薪 一二、四八三 堅七分松三分ノ割
大貫	薪	一一二、〇〇〇貫	一三四、四〇〇貫 同上ノ割
管谷	木炭 薪	二一〇噸、一、二六〇	木炭 薪 二四九噸、一、二六〇

◎**荷主** 中央市場へ移出をなす業者は左の諸店なり

常陸國那珂郡川田村市毛（若松屋號）
薪炭輸出商 照沼榮治
（水戸驛ヨリ三十丁勝田驛ヨリ十二丁）

水戸市下市本肴町（水戸驛下車十丁）
薪炭問屋 金砂屋商店
店主 益子薫

茨城縣東茨城郡大貫町川岸通
薪炭石炭 中島龜松商店
振替東京三八一六五 電略（ナカ）

茨城縣東茨城郡大貫川岸
木材薪炭 鴨川治三郎商店
電話磯濱十六番 振替東京一五〇三番

太田近在

産地の主なるは福島縣棚倉へ通ずる街道筋小里附近を最とし更に多賀郡高岡、亞いでは高倉を經て生瀬に至る沿道筋の林地にして、椚、檜、松等の樹種を以てし、山林面積を合算して裕に一千八百六十餘町歩は薪炭林に見積るを得べし、故に薪炭林の豐富なるは恰も縣下第一位に數ふるを得べきなるも、一面搬送其他生産經費の向上すると炭燒に從事するもの尠なきが爲、當今の年産額數量は同方面全體にて木炭百三十二萬八千貫に達するに過ぎず、然れども木炭需用の激增に促がされ、森羅鬱蒼せる林源も徐々に木炭に製せられ又産額を見るに至るや必せり。

品種は少量の堅炭と大部の土釜炭なり、堅は六貫内外の造りにて太田町へ搬出し土釜は四貫、五貫の二樣にして其儘太田町へ出し、同地の薪炭問屋に於て手直荷造りをなし東京向として移出するものなり。

◎**荷主** としては左掲兩店を以て主なりとす

茨城縣久慈郡太田町東三丁目
木炭白土問屋 宮城商店
店主 小松崎森之介 電略（ミヤ）

茨城縣久慈郡太田町榮町
木炭古物商 瀬谷末吉
（驛ヨリ十五丁）

多賀郡高萩町

高萩驛は常磐海岸線沿道にして上野を距る百二哩の地點にして無煙石炭の產出地たると共に又我木炭の生產地たり、同驛の開通したるは明治三十年二月二十五日なり、之より先き前途の好望なるを見越し現在荷主の一人なる澤井氏が實際を踏査し超て三十一年驛開通と同時に店舗を開きたるもの十餘名を數へたり、然るに其後二十有二年の歷史を送る間多くの荷主は失敗を招き又民有林の多くは伐り盡くされ今日に至る傾向にて僅かに澤井氏一人を殘すのみ、而かも創業當時より五、六年間は年額四百車を動かしたるが昨今は俵に換算して六萬二千六百四十一俵を輸出するに過ぎず。

品種は椚一割五分檜二割五分雜六割の率に相當す、之が仕向地は隅田川驛が殆ど大半を占め次ぐに新宿、北千住、品川等なり尙同驛より薪十四五噸を輸出す、而して同地方亦遂年山深く入江に進み搬出の不便を感ずること多し。

茨城縣多賀郡高萩町
久木炭輸出商 澤井商店
丸俵椚檜雜類
店主 澤井留吉 電略(サ)

宮城縣

宮城縣に於ける薪炭の一ヶ年產額は大正六年度木炭九十八萬七千俵薪四十八萬九千六百十四貫に達し、更に岩手縣海岸筋の產にして鹽釜港へ陸上げされて移出する數量が一ヶ年三十七萬俵內外を算し之を合すれば實に百三十五萬七千俵の多量に上り、全國第六位の生產地を以て任ず、本誌は各驛をば悉く揭載せんとせしかど複雜を避け單に重要產地のみに止めんとす、左に地域別に述ぶる所あるべし。

東北本線白石驛

白石町は刈田郡の東端白石川の沿岸に位し薪炭の主要移出驛を以て知らる、而して同町へ集中する薪炭の生產地は同町を距る四里乃至五、六里を隔つる白石川の上流に當れる七ヶ宿幷に其地方刈田近在の林地なるが、林源頗る豐多にして將來に囑目する處も又尠なからず、由來同地方の製品は多く堅物にして地場用に供せられ中央市場へ輸出を見ざりしが明治三十四五年の交より土釜製法盛んに行はれ今日にありては七分は土釜なり。

同驛一ヶ年移出數量は大正五年度に於て木炭四千百六十八噸、六年度に於て五千六百三十四噸、薪は大正五年度にありて三百二十二噸、六年度三百四十四噸の移出を見たるが同地方山林面積二萬四千八百七十五町歩の内二萬二千町歩は椚、檜、雜の林源鬱蒼し自然の薪炭林を形成し居るが如くなれば目下の產額に大差を與へず前途の望尠し、因に同町の主なる荷主は左の如し。

宮城縣刈田郡白石町
薪炭輸出商 自 鈴木德太郎
電略（トク）

宮城縣刈田郡白石町
薪炭商 正 川名省
（停車場前）

宮城縣刈田郡白石町
木炭櫟材商 ⓑ 藤井德市

此の外阿古島保五郎、斯波岩五郎、丸山合資會社等あり

大河原驛

大河原驛移出の木炭は同驛を距る二里荒川の沿岸に位する村田町へ集合する木炭にしてそれが生產地は同町より三里乃至五里の入江なる富岡、川崎の林地なり、而して製炭に從ふものは殆んど大半は農の副業にして、之を村田町の木炭商の手に移し以て中央及中間の需用地へ搬出せらるゝものとす、又伊貝郡丸森、角田の兩町へ集散するものゝ内土地の需用に供せる殘餘を中央市場へ仕向くるもありて、同驛一ヶ年の移出數量は左掲の額に達せり、種類品質は白石移出のそれと髣髴す。

	大正五年度	大正六年度
木炭	五七八噸	九三七噸
薪	六七	一四六

◎荷主　同方面各地に於ける薪炭商に岩沼町に三浦清太夫、猪俣清四郎、木津谷齊、村田町、角田町、丸森町は左の三店を以て主となす

宮城縣柴田郡村田町
米穀薪炭商 ⓧ 大沼十平
電話三八番電略（オ）

宮城縣伊貝郡角田町
薪炭商 笹森倉吉
電略（サ）

宮城縣伊貝郡丸森町
薪炭商 菊地幸作
電略（キコ）

鹽釜港

鹽釜町は宮城郡の東部海濱にあり、上野を距る二百二十六哩、東北本線岩切より分岐し角俵木炭の著名輸出驛なり、而して此地へ集中する木炭の生產地は岩手縣氣仙郡の產并に北上川の上流より舟楫にて下せる製品にして、品質量匁俵裝等八戸湊沼宮内の產と畧ぼ同樣なり、之に加ふるに丸俵五貫造のものも幾分此の驛に呑吐さる、又少量の薪をも移出す

今同驛移出量を知る爲め大正五、六兩年度に就て調べ見しに左掲の數量を示せり。

五年度	木炭	一〇、二八九噸
	薪	一、二五七
六年度	木炭	一三、九八四噸
	薪	一、三二五

◎荷主　同港に店舗を構へ薪炭の移出を營む主なるものに左の數店あり

陸前國鹽釜港宮町五〇九
薪炭商 「さ」 佐藤松之丞
電略（サト）又ハ（サ

陸前國鹽釜港
木炭輸出商 池田哲三

陸前國鹽釜港
薪炭商 武山貞勝

陸前國鹽釜港
木炭輸出部 青山運送店

陸前國鹽釜町
薪炭商 志野彌市郎

陸前國鹽釜港
薪炭輸出商 丹野富次郎

石巻町

石巻は東北本線小牛田驛より分岐し仙北鐵道の終點より十八哩北上川の河口にありて人口二萬餘を有し商業繁盛の地なり、從つて此地に於て消費さるゝ薪炭の量亦侮るべからざると共に薪炭の主要集散地として年額八百噸内外の木炭を京濱市場及中間へ移出しつゝあり、其生産地の主なるは牡鹿郡女川村附近並に桃生郡雄勝の産に加へ遠きは北上川の上流にして岩手縣一の關に至る林地の製品なりとす、更に宮古港の産も海運にて此町へ陸揚され市場へ移出せらる、故に海運に依る所の宮古の産と北上川を浮べて石巻へ吸引せらるゝ産とを合算すれば一ヶ年尠なくも二十萬俵の數に達すべし、從つて同町の荷主は悉く仲買業者にして生産業者にあらざれば營業上の責任亦大なるものなり、左に主なる荷主を紹介せん。

陸前國石巻町住吉河岸
木炭問屋 ㊫ 丸又商店 千葉一朗
◎角俵六貫各種木炭取扱　電畧（〇マタ）又ハ（イチ）

陸前國石卷町四一
木炭問屋◇千葉喜造
木炭部　電話一七二番（電略チキ）

陸前國石卷町港南町二四
木炭輸出商　平塚七之助
電略（ヒチ）

陸前國桃生郡十五濱雄勝
木炭商　齋藤初吉
電略（サイト）

陸前國石卷町川岸通り
木炭問屋「タ」高仁商店
電略（タカニ）

陸前國石卷町堅町
木炭商　清水正藏
電略（シ）

陸前國桃生郡雄勝濱
木炭商　梁瀬商店

中新田近在

中新田町は陸羽東線各驛中群を拔ける生產地にして一ヶ年移出額は大正五年度に於て一千七百二十噸、大正六年度に於て一千九百九十三噸の多きに達せるが、而かも附近林源豐多にして將來に囑目せられつゝあり、其主產地は驛を距る西方五里乃至七里なる宮崎、小野田、鹿原の各村落にして土釜角俵五貫、丸俵土釜四貫なる稍々優良品を產す、樹種は楢雜を主とし官有林六分民有林四分にて八森山脈の一部並三本木川水源地方は最も薪炭林に適し恰も無盡藏の態をなせると雖も遠距離の山路を搬出するものなれば山出し運搬費を多額に要する爲に未だ何人も手を付けざる林地多し、故に輸送の便開くる曉來らんか必ず產額の增加を示すに至るべし。

岩出山驛

同町より下山里を經て一迫へ到る縣道筋は森林蜿蜒として連續するも薪炭林とすべき雜木林源は左まで豐かならずして當今は鬼首近在よりの生產品多く其產額一ヶ年八百噸內外を往來するに過ぎず、從つて輸出をなす商人も角田林之助、及川出張所の二店にして他は土地のみにて取引しつゝあり。

鳴子驛近在

陸羽東線の分岐點小牛田より西へ二十七哩、花淵山の麓、荒雄川岸にあり、山水風光明媚にして又閑雅の地なり、歷史に曰く同地は建治年間源義經難を此地に避けし時、妾靜御前、龜割峠にて龜若を生み此地にて生聲を發したりとて地名を啼子と名づけ後鳴子と改稱したりと傳へらる、斯の如き史蹟を有する鳴子は又薪炭の主要產地にして林源豐富に加へ又優良品を產出す、現に橫濱市櫻木町の木炭問屋堀內太郎吉氏の如き此地の前途好望なる

を先見し去大正三年の候より同地の製産業遊佐善三郎氏と合同し檜崎式土釜木炭を製造し盛んに京濱へ移出をなし來れり、亦宮本恒次郎氏等近時頭角を擡げつゝあるを見る、而して隣驛なる川渡驛等も好望の地なりとす。

◎**荷主**　陸羽東線沿線に於ける主なる荷主は左の數店なり

宮城縣加美郡中新田町 薪炭輸出商　竹中常三郎	陸前國加美郡中新田町 薪炭輸出商　三浦東三郎	陸前國加美郡小野田村鹿原 薪炭商　今野喜三	
陸前國加美郡小野田村 薪炭商　佐々木長藏	陸前國加美郡西小野田村上ノ目 製炭業　今野榮作	宮城縣加美郡小野田村西小野田上ノ目 薪炭輸出商　千葉權之助	
陸前國加美郡小野田村 薪炭商　鈴木惣吉	陸前國加美郡西小野田村 薪炭商　今野胞藏	宮城縣玉造郡岩出山町 薪炭商　今庭定七郎	
宮城縣玉造郡岩出山町七三 薪炭輸出商　角田林之助	宮城縣玉造郡鳴子驛 薪炭商　宮本恒次郎	宮城縣玉造郡一栗村池月 薪炭商　澤口一郎	

新田驛近在

宮城縣登米郡内に於ける木炭集散地の主なるは新田、佐沼、米谷、登米の市邑にしてそれが生産地は北上川の河畔に接續する村落並に岩手縣國境に當れる米川、西郡、上沼等なりとす、而して是等各方面の生産高一ヶ年の數量四十萬俵の多きに達し、北上川の舟楫によりて石卷へ少量の搬出をなすの外は多く米谷、新田に集中するものにして、其品種は椚檜土釜角俵六貫、雜、栗角俵五貫なるが俵裝の美事なる點に於ては眞に東北地方に類例なき程なり、而して薪炭林の蓄積並に將來の見込としては、今郡内薪炭林の面積約四千五百町歩ありて鬱蒼せる林源は恰も無盡藏の狀にあれば、今後の市場相場にして平調を維持し生産費を償ふて餘りありとすれば追々生産力の増大さるゝことゝなり豐多なる炭林は之れより伐採され以て移出額の増加を見るに至るべきなり。

宮城縣登米郡米谷町森合川岸 薪炭商　白岩德助	宮城縣登米郡淺水村 薪炭商　渡邊硬
宮城縣登米郡米川村上澤 薪炭輸出商　佐藤慶太郎	

木炭 ㊕ 輸出

河東物產商社木炭部

宮城縣登米郡米谷町百三十番地

電略(カト)又ハ(ガ)振替東京三五三七八番

社長 住宅米谷町 沼田忠太郎

取締役 住宅米谷町 大場彌一郎

監査役 住宅佐沼町 佐藤鐵郎

監査役兼主任書記 住宅佐沼町 峯村信平

審査長 住宅米川町 岩淵林太郎

木炭生產販賣商

登米郡米谷町 狩野誠厚

登米郡米谷町 飯塚榮一

登米郡米谷町 大場丈夫

登米郡米谷町 大場哲夫

登米郡佐沼町 狩野源助

登米郡佐沼町 高橋信治

岩手縣

◎總說　岩手縣は木炭の生產量に於て既に他に冠絕せるのみならず、而かも京濱市場との關係に於ても同縣產額の多寡市場入荷の增減は直ちに市價の昂落を來すと云ふも過言ならざると同時に、同縣にても林產收入を以て國產中唯一の財源に加え居りて爲に縣山林當局に於ては製炭法の改善と薪炭林をして永遠に保有せしむることに腐心され、着々改良進步の實蹟を擧げつゝあるは欣ふべき現象と云ふべし、本誌は之れより項を細目に編別し各般に亘りて述べんとするものなり。

◎產額

（最近五ヶ年の產額年別）

大正元年度	一六三六四、八六二貫	大正四年度	三〇四一八、六六一貫
同　二年度	二四〇九〇、八三二	同　五年度	二七四七九、〇〇九
同　三年度	三二四九三、五二九		

更に大正五年度產額を各驛に細別すれば左の如くなるべし（俵に換算す）

花泉驛	三六四俵	一ノ關驛	三二七三四〇俵
平泉驛	一二〇三二八〇俵		

前澤驛	二二六二〇俵	水澤驛	一六三五四〇俵	金ケ崎驛	三四九九六俵
黑澤尻	四九七一二	花卷驛	四一五八四四	石鳥谷驛	三七七〇〇
日詰驛	七八〇五二	矢巾驛	五七二	仙北町驛	六一八八
盛岡驛	三五〇一六八	瀧澤驛	一四五六	好摩驛	三三二二八
川口驛	一〇八六八〇	沼宮內驛	四四四八六〇	奥中山驛	一五二七七六
小繋驛	一七六八	小鳥谷驛	二〇五九二〇	一戸驛	二七一八五六
福岡驛	二九四〇六〇	金田一驛	二三七一二〇		

岩手縣下各驛より輸出する木炭の總數量は前掲の如くなるが更に九戸郡の產にして靑森縣湊八戸より輸出する數量の五分の三は同縣の產にかゝり、之に加ふるに鹽釜港より一萬〇二百八十九噸の輸出を見るが其內九千二百六十噸は同縣の生產にかゝるものなり、故に大正五年度に於ける同縣の總產額を噸を以て計上する時は恰も十二萬五千二百四十八噸の多きに達し、之れを全國より東京市及郊外各驛に入着したる同年度合計數量二十二萬九千九百十九噸に比する時は東京市及郊外消費木炭の三分一强に該當することゝなるべし。

而して縣內消費數量に於て九百五十五噸を要せり、尙六年度に於ては鑛業用に木炭を使用するの傾向を增し來りたれば五年度に比し正に四割は增加せし如く從つて產額多きを望む能はざるに於ては輸出量に影響を來し中央在荷不足を唱ふることゝなるべきなり、爲に同縣當局及當業者はそれ〳〵前途に心を惱まし居りて薪炭林の濫伐防止、品質の改善、價格の調和等に腐心されつゝあり。

更に同縣輸出の薪は其數量幾何かと大正五年度の量を點檢し見たるに合計三千四百十三噸に達せり、之れを各驛に細別するに左揭の如し。

平泉驛	二一噸	金ケ崎驛	二八噸	黑澤尻驛	三五七噸
花卷驛	一〇八九	石鳥谷驛	一一四	日詰驛	七六三
矢巾驛	八七	仙北町驛	二八	盛岡驛	四〇九
好摩驛	八	川口驛	一五三	沼宮內驛	二八九
奥中山驛	六七				

を示せり、而して縣內の消費量は如上の外にして二千五百四十六噸に達す。

以上は岩手縣に於ける薪炭の產額を實地踏查より得て示す所なるが更に進んで薪炭林蓄積狀況より將來の見込並に各地の狀勢、品質俵裝、荷主の氏名等之れより各驛各地に編別

し逃ぶる所あるべし。

◎**一の關驛**　明治三十一年の頃三宅常三郎氏の中央輸出を開始せるに始まり引續き產額の增加と共に市場より迎えらるゝに至れり、今や近隣は漸く伐り盡し徐々に深山に入る傾向にありと雖も炭林の蓄積せる容易に盡くべくもあらず、而して此地は東西兩磐井郡に跨がり、西磐井の巖美、駒形、鷹巢、大原等の山林は材源の頗る豐富なるものあり、其樹質が土釜に適するを以て此西部は悉く黑消の製法に依り居れり、之れに反して東磐井は堅炭を出し其多くが白消法に則り居りて長坂、田河津、猿澤、澁民、大原町附近は木炭に適する樹林繁茂し前途の光明を見出したりと云ひ得らるゝの地たり。

斯の如くにして薪炭林に就ては決して乏しからざるも交通運輸の便に於ては未だ完備を盡せりと云ふべからず、從つて當節にては近きが二里乃至五六里にて山元へ達するも其遠きに至りては八九里乃至十餘里の距離あり、爲に停車場への搬出に困難を感ずること頻しきものあり、而して同地產品質俵裝は普通檜は五貫造雜四貫乃至四貫五百匁を標準とすと雖も、近時木炭の騰貴に伴れて自然貫輕の弊に陷り、北上川以東は稍々正味の充實せるものを出すが如きも以西は四貫內外のものが普通なりとす、種類は黑消十分白消三分ぐらひにして丸俵造なり。

◎**水澤驛**　同驛を記さんには同時に此地と唇齒補車の關係を保つべき岩谷堂町をも語らざるべからず、同地へは水澤より約二里軌道馬車あり、由來水澤は堅炭の移出驛にして、往昔は多量の產出を見たるが追年減退の傾向と化し同地生產者も從つて黑消土釜に遷り變りし姿なるが如く見受くるなり、されど東磐井及江刺の一部は今尙堅炭を產し膽澤郡內よりも少量の產出あり、而して同地薪炭の前途としては稍々有望にして、今や同驛より大原町へ通ずる道路を開鑿の工事中にて完成の曉は輸出量も昔日の優勢に復すべく、更に又西方膽澤郡內駒ヶ岳山脈の四方に蟠起して薪炭に適すべき樹林を以てし全く無盡藏なるありて面積實に幾千萬町步を以て數ふべく、林區署も之れが拂下を慾し林道開鑿の計畫なりと云えば、近く薪炭となりて此大山林の產出を續々見ることゝなるべく、水澤驛の前途は益々多幸なりと云ふべし。尙又東磐井へ縣道開かるべく今や工事中なり。

產地の主要なるは金ヶ崎西部幷に玉里、人首、角掛等にして以上の產地よりは稍々優良品を出しつゝあり、而して江刺郡粟生澤に鐵山ありて鍊鐵に供せらるゝ木炭又多量に上り且岩谷堂町に需用さるゝ消費も數へざるべからざれば水澤驛よりは年三千百五噸の輸出を

見ると同時に奥州筋より土釜木炭の供給をも仰ぎて百三十八噸を示せり、同地産俵裝量匁は堅に於て正四貫五百匁を標準とし丸俵造なりとす、土釜に至りては隣驛黒澤尻、金ケ崎等と同樣にして五貫造と稱し居るも四貫四五百匁なり。

◎**黒澤尻驛**　黒澤尻は和賀郡の咽喉部にして仙人、水澤、大荒澤、鷹巣等の鑛山用木炭は此驛より移入さるゝなり、從つて同驛よりは東方輕石、梁川方面より堅炭を産し笠間、横川目方面より土釜を出し、相應の輸出を示したれども、近時鑛業用に吸引せらるゝの量を増し爲に移出驛と謂ふよりも寧ろ著名なる移入驛と化したるの傾向にして、大正六年度の如き殆んど出入相半ばするの狀を呈したり、而して同地産堅炭は秋田産に匹敵し居り俵裝は茅丸俵、量匁は五貫造と稱すれど四貫五百匁を普通とす、土釜は丸俵造にして量匁は四近と同じ。

◎**花巻驛**　縣下中沼宮内に亞ぐの産額を示し、別項にも記すが如く大正五年度に於て木炭四十一萬五千八百四十四俵、薪一千八十九噸の輸出あり、而して此驛へ集合する木炭は東は上閉伊及氣仙の兩郡産が岩手輕便鐵道に依りて中繼さるゝもの及び西は湯本方面の産なりとす、詳言すれば同驛を距る二里の地點に湯口、太田、更に湯本等の各村落ありて楢、雜の森林豐多なり、丸俵五貫造土釜並楢崎式土釜は多く此地方より産す、又東方岩手輕便鐵道の沿道晴山、岩根橋、上郷よりは花巻角六と稱する而かも品質に於て宮古に劣らざる角俵造土釜木炭を産するものなり。

岩手輕便鐵道沿線遠野町は木炭の集散地にして一面には釜石鑛山を控え釜石町一萬の人口は全く同鑛山の爲に市街名邑をなし、鑛業用乃至は土地用に供せらるゝ數量の侮るべからざるものあり、他面には中央輸出商人の遠野へ出張店を設くるものゝ數をも増しつゝありて木炭取引場として榮えつゝあり、而して同地へ集中する木炭は附馬牛村鈴木萬之助、山本長五郎、上村勘十郎等數氏の製出するものにかゝり、山三小原政治出張所、丸正京京會陽組出張所、山ハ森川春次商店、山本林藏商店等の取扱にかゝり市場へ輸出せらるゝものなり、更に氣仙郡上有住村佐々木象一郎、上有住八日町佐々木嘉平、綾里村本田長七諸氏の製出品又此驛へも輸出す。

◎**石鳥谷驛**　年産額三萬七千七百俵の輸出ありて縣下主要産地の一に數ふるを得べし、同驛を距る三十町の地點志和町には斯業の泰斗田口倍次郎氏あり、楢崎式製法に則りて山○印木炭を此驛及日詰より移出す。

◎荷主　一の關より花卷間に店舗を有する主なる薪炭輸出商は左の諸店なり

木炭輸出 命 村井邦輔	岩手縣岩谷堂町、水澤ヨリ二里）年二百車内外	木炭輸出 命 山形辨治	岩手縣一ノ關町地主町 年百八十車内外（驛ヨリ六丁）
木炭雜貨 和 和賀榮助	岩手縣岩谷堂町 年二百車内外（水澤ヨリ二里）	木炭商 金 柳澤金四郎	岩手縣一ノ關町大町 年七十車内外
木炭商 金 菅原源三郎	岩手縣水澤町横町 年百車内外（驛ヨリ四丁）	木炭雜貨 福 福島常次	岩手縣一ノ關町地主町 年百車内外（驛ヨリ七丁）
木炭輸出商 中 村善次郎	岩手縣岩谷堂町 年百車内外（水澤ヨリ二里）	薪炭輸出 舎 佐々木馬吉	岩手縣平泉驛前 年二百車内外
木炭商 關 宮本利藏	岩手縣一ノ關町吸川 年五百車内外	木炭輸出 千 千葉安治	岩手縣平泉驛前 年六十車内外
木炭商 一 伊東孝吾	岩手縣一ノ關町吸川 年三百五十車内外	木炭輸出 小 菅原文藏	岩手縣一ノ關町吸川 年五十車内外
木炭雜貨 田 田中彌平	岩手縣水澤町川口町 年五十車内外（驛ヨリ七丁）	木炭輸出 す 和賀銀吉	岩手縣岩谷堂町 年七十車内外（驛ヨリ二里五丁）
木炭雜貨 ム 後藤連平	岩手縣黑澤尻驛前 年百車内外	薪炭輸出 石川運送店 薪炭部	岩手縣黑澤尻驛前 木炭薪合して年六十車内外
木炭商 木 菊地伊次郎	岩手縣黑澤尻町 年五十車内外（驛ヨリ七丁）	木炭輸出 分 佐賀清吾	岩手縣江刺郡米里村大字人首 年三百車内外（岩谷堂ヨリ四里）
木炭輸出商 ⊙ 中目直也	岩手縣花卷川口町（驛ヨリ二十丁）年輸出額二百八十車内外	木炭輸出 印 小原政治	岩手縣花卷町（驛ヨリ五丁）木炭年四百車内外薪年百車内外
木炭輸出 釜 佐々木馬吉	岩手縣花卷町 年輸出額二百八十車内外	木炭輸出 土 小野寺幸吉	岩手縣花卷町 東磐井門崎村
木炭商 ⊙ 西澤萬藏	一ノ關町地主町	木炭商 ⊙ 西尾幸衛門	一ノ關町上横町

◎盛岡驛　盛岡市は北上河畔の平野に在り遙に岩手山を望む、もと南部と稱し南部氏の城址あり、人口四萬三千五百、此地は一面に於ては木炭の生産地にして盛岡堅炭として世に知らるゝもの即ち市を距る西方三里乃至五里の瀧澤山脈より産出す、嘗て東北饑饉の時宮内省にては此地生民救恤の旨趣より同地産堅炭を買上げられてより其聲價を認識せらるゝに至り今日にては我宮内省御用木炭の大部分は盛岡産を用ひられ、東京市場御用商舗の手を經て納入せられつゝあり、而して此地の産額に至りては市の消費を除き同驛より中間各地及中央へ輸出する一ケ年の數量は六千七百三十四噸に達し、又瀧澤驛よりも盛岡物と名稱を冠せる品種を出しつゝあり。

産地の主なるは前掲瀧澤に加へ雫石及御明神、門馬の諸地方にして就中門馬は矮林多き爲優良品を産出す、又最近同地に楢崎式黑消製法傳布され更に越前式改良角俵の産を見る

に至れり、而して門馬地方は前述の如く樹齢若きため『丸』の優良品を産出し、山林亦豐多なるを以て將來に嘱目されつゝあり。

◎**荷主**　中央へ移出を營むものは左の諸店なり

盛岡市材木町三十一番地　印木炭　石川與七（驛ヨリ五丁）

改良角俵　盛岡市外上小路　楢崎式土釜　吉田清七（驛ヨリ二十丁）

薪炭木材　盛岡市外上小路　高橋德太郎（驛ヨリ十八丁）

岩手郡厨川村　宮田謙吉

盛岡市新田町　谷藤左太郎

盛岡市六日町　工藤善太郎

盛岡市驛前　東條彦太郎

◎**沼宮内驛**　岩手縣内の各驛中木炭の輸出量の多きは同驛を以て首位となす、年産額四十四萬四千八百六十俵の製出あり、爲に同驛は八戸湊に亞ぐ角俵土釜木炭の輸出地を以て知られ同縣九戸郡の産は海岸筋の海運に依るものゝ外は大半此驛より市場へ移さるゝものにして品質俵裝亦八戸角俵と異なる所なし、産地は同驛を距る八里葛卷江刺附近を以て主とし著名なる黒森、鍋倉の山脈は林源豐富にして全く無盡藏の狀を呈し居れり、而して同地斯業者には製品不統一に傾かんとする弊を矯め昨年六月沼宮内木炭商組合の創立をなし改善の歩を進めつゝあれば同地産の聲價揚るの日も近からん。

◎**荷主**　同驛に店舗又は出張所を構へ若くは同驛より移出を爲す者左掲の如し

岩手縣九戸郡葛卷村　遠藤彦三郎（沼宮内驛ヨリ八里）

岩手縣沼宮内驛前　三橋兵三郎

岩手縣沼宮内町　佐々木藏次郎

岩手縣沼宮内町　澤口勇次郎（驛ヨリ十丁）

岩手縣沼宮内町　齋藤新吉（驛ヨリ七丁）

岩手縣沼宮内驛前　安西喜三郎

岩手縣九戸郡葛卷村　千葉平彌（沼宮内驛ヨリ八里）

岩手縣九戸郡葛卷村　高橋祐助（沼宮内ヨリ八里）

岩手縣沼宮内驛前　河岸伊之助（越前式製炭業）

岩手縣沼宮内驛前　高橋百次郎（運送店兼營）

岩手縣沼宮内町　高橋運次郎（驛ヨリ九丁）

岩手縣九戸郡葛卷村　志賀出張所（沼宮内驛ヨリ八里）

◎**小鳥谷驛**　今は二十萬五千九百二十俵の年産額に止まり居れど、同驛より葛卷へ通ずる道路（準縣道）が縣費補助のもとに近々開通すべければ、從來沼宮内驛へ搬出したる葛卷、伊保内方面の産は多く此驛へ搬出せられ、運搬費等も低廉にて、出出しせらるゝに至るべし。

◎**荷主**　現今同驛に店舗を構へ木炭の輸出を營むものに平野市之助氏ありて亞いて仁昌寺定吉、曲戸長之助の兩氏又相當の額を取扱ふ、又奥中山停車場前通に商舗を有する柴田勇

氏も此の驛よりも相當の移出をなし居れり、而して同驛大正六年度の輸出産額は二十六萬三千七百餘俵に達せり。

印 木炭輸出商 岩手縣二戸郡奥中山驛通り 柴田勇商店 ◎製産所並出荷驛 岩手縣奥中山驛、小鳥谷驛
電略シハ品種 角俵木炭一ヶ年輸出百車内外 丸俵土釜堅炭各種年五十車内外

◎**一戸驛**　一ヶ年産額三十萬俵内外にあり南部木炭として聲譽を博す、今同地の由來を繹ぬるに明治三十六年以前は全く堅炭のみにて東北線開通より中央市場へ移出を開始したるが、ソモ黒消の元祖とも稱するは同驛前に商舗を張れる中村龜次郎氏が率先し、越前式製法に依るの收利多きを悟り、三十七年の春仙臺より職工を雇入れ土釜燒を始めしを以て嚆矢となすが如し、爾來相傚ふて黒消製法に則ることゝなり、現今同驛(六年度)より年産額二十七萬千八百五十六俵の移出ある其八分は土釜炭にして僅かに二分が舊時の白消木炭なりとす、而して同地の林源は東西共に豐多にして東は九戸郡との郡界に螺起する江刺家、山内、折瓜等の諸山岳の麓なる面岸、根反、楢山、白鳥、各村落より、西は郡の中央に位する毛無森山脈近きは西行寺山脈より淨法川に沿へる一帶の林地は薪炭林豐富にして前途の好望を謳ふて尚餘りありと謂ふべし。

岩手縣二戸郡一戸町 各種木炭 柏皮木材 中村龜次郎 振替東京七七四六番
岩手縣二戸郡一戸町 木炭輸出商 浪岡藏助
岩手縣一戸停車場前 木炭生産商輸出 中島清四郎

◎**荷主**　こゝに掲ぐるの外に誠進社久慈喜三、平井章太郎、堀口與三郎、南舘忠助、堀口常吉、古舘長次郎の諸氏あり

◎**福岡驛**　今や計畫中なる縣道は福岡より長興寺、伊保内、山形、大川目を經て久慈町に通ずるものなれば沿道各生産地との輸送の連絡は意の如く捗取られ搬出費の輕減は素より同驛今後の隆興は當に期して俟つべきものあるなり、又一面に於ては青森縣三戸郡斗川村の名望ある實業家田中實氏が曩に東北林産業の振興より畫策し、驛を距る十里の山奥なる淨法寺村共有林稻庭山の林地二千五百町歩を領得し製材と製炭業とを開始せるありて、毎月五十車平均向十六ヶ年の計畫にてあり今や着々進捗し豫期の數量に近づきつゝあれば、同驛當今の出荷一ヶ年三十四五萬俵は早晩レコードを超過するに至るべし、而して此の地木炭品質は頗る優秀にして角俵丸俵共に正味充實し居れり、加之二戸郡薪炭同業睦組合は

製法改善量産の統一を實行すべく縣當局の指導と相俟つて其歩に着手しつゝあり。

◎**金田一驛**　年移出額二十三萬七千二十俵の率を維持して甚だしき增減なき金田一町は東は九戸郡の產を集中するを以て角俵特製品を出し西は二戸郡の產集まるが故に丸俵造を以てす、生產地及品質は福岡町と殆んど同樣にして別に特記するの事項を認めざるも、福岡驛は丸俵多くして角俵一分丸俵九分の比例なるに金田一驛よりの移出を見るに丸俵七分角俵三分の率にあり。

◎**荷主**　福岡金田一兩驛薪炭商の主なるは左掲の外福岡町に米澤長五郎、齋藤唯雄、金田一町に關口龜次郎、玉川千代吉の諸店あり。

岩手縣福岡町 澤藤倉治

岩手縣福岡町 高畑榮次郎（日光屋號）電略（タ）

岩手縣二戸郡淨法寺村 田中稻庭山作業所 出張所 福岡驛前

岩手縣二戸郡淨法寺村 樋口嘉太郎

岩手縣金田一驛前 澤田福次郎 ●丸通取引店

岩手縣金田一驛前 小笠原與吉

岩手縣金田一驛前 前田喜太郎

岩手縣金田一驛前 澤田半次郎

青森縣

◎**青森縣**　一ヶ年薪炭の產額は約四十萬俵に達し、內鑛山及中間需用地へ供給せらるゝ分を除き中央市場一ヶ年の輸出量は昨大正六年度に於て九十四萬七千餘俵を示せり、之れを全國の比較に見るに實に其第五位に列すべきものとす、而してそれが產地は三戸郡を第一とし上北下北の二郡之れに亞ぎ、南北西津輕の各郡よりも相當の產出あり、されど之を東京市場より見るときは三戸驛より野邊地驛に至る沿線の產大部を占め其他は土地の需用に供せらるゝの外は中央移出としての量は殆んど數ふるに足らざるなり、尙別に八戸淸兩驛より一ヶ年百三十二萬五千六百俵（大正五年度）の輸出ありと雖も开は岩手縣九戸下閉伊の產八分を占め、同縣一ヶ年の產額中に數へらるゝものは僅かに二分に過ぎざるものにして島守、中澤近在の產が田代及八戸等の生產者の手に依りて製出せらるゝものとす、故に本編に於ては八戸、淸兩驛が同縣下に屬するを以て編別上青森縣の部に逃ぶると雖も、其木炭は岩手縣九戸下閉伊二郡の產なりと知るべし。以下地域別に錄する所あらん。

◎**三戸驛**　三戸郡は林産物に富めること縣下第一にして郡内よりの生産品の大半は此驛より積出されて需用者に移るものなるが就中我木炭の一年輸出額は殆んど四十萬俵を以て算するに至れり、品種は檜丸割雜丸割に亞ぐに少量の堅炭なり、品質は最も優良にして又正味の充實せる處より、逐年聲價を發揚し來りて南部木炭と云ふときは此の三戸の産が代表的地歩を占むると云ふも過言ならず。

それが産地は斗川、田子、上郷、茂市が主なるものにして秋田縣の國境來滿山々麓の如きにありては林源豐富にして眞に無盡藏の狀を呈せるあり、更に袴田、猿邊等又一層森林に富み薪炭に適する雜木林を以て充さる、故に將來の好望なるは茲に筆紙の報導を俟たずとも顯著なる事實の證明する處なり、而して同地産俵裝は茅俵丸俵造り檜五貫雜四貫五百匁を普通とす。

◎**尻内驛**　同驛は上野を距る三百九十七哩、八戸線の分岐點なり、薪炭の移出としては極めて少量にして唯同地中村良輔氏が運送業の副業として薪炭の仲買を爲すに過ぎず。

◎**古間木驛**　三本木、法奥澤、七戸等より生産する薪炭の取扱驛にして年々移出量の增加を示しつゝあるは、近時木炭の需用激增に伴ひ生産を促進したる結果、法奥澤方面の林源地開拓に依るものにして、他地域資本家にして此地を目指すもの年々多きを加ふるの現象と知るべきなり。

◎**野邊地驛**　野邊町を代表する荷主に濱中源七氏あり氏は下北郡界陸奥海灣に沿へる有戸近在の林地並に野邊地を距る二里烏帽子山脈の林源地より角俵六貫造土釜並菰俵堅炭を生産しつゝあり、氏は更に青森灣に沿へる淺蟲驛を距る一里高舘山の麓なる林地へも作業を開始し製炭を營み年移出額裕に四百車を示すの優勢にあり、更に同地に久保田製炭部あり島谷直七商店あり東京會陽組出張所等ありて各々相當の數量を取扱ひつゝあり。

而して同驛より下北郡田名部町へ鐵路の敷設せらるゝ曉にも到達せば薪炭林に富める下北郡内より甚大の産額を見るに至るべく思惟さる、今も現に老部、中野澤等の森權せる林源を撰みて白消炭を製し八戸港へ舟積して送り同驛より市場へ移出するあるを見受くるに至れり。

◎**荷主**　三戸驛より野邊地に到る沿線各産地荷主の主なるは左掲數店なるが尙ほ三戸町に志賀治助、田子村に久慈房治、川上木炭店、名久井八十八、高橋新八、三戸郡上郷村に堀川駒次郎、同村大字澤田に三島友司、三本木町に稻本商店木炭部、三本木町四丁目杉

本石太郎、古間木驛に佐藤政一郎、七戸町に福田政吉、七戸町字長久保村に久保市太郎上北郡天間林村に小又彦三郎、野邊地町に島谷直七、久保田製炭部の諸氏あり

青森縣上北郡野邊地町
木炭生産輸出 濱中木炭部

青森縣三戸郡三戸驛前
木炭輸出業 石井二郎

青森縣三戸驛前
新炭商 白木與藏

陸奥國三戸町八日町
木炭商 松尾吉兵衛

陸奥國三戸驛前
木炭輸出 坂本梅重

陸奥國三戸町
木炭製造卸問屋 松坂雄三
電略(〇一)又ハ(マ)

陸奥國三戸町同心町
木炭商 工藤三太郎

陸奥國三戸郡田子村
薪炭商 櫻井榮太郎

青森縣三戸郡田子村
薪炭商 名久井宇八

陸奥國上北郡法奥澤村法量
木炭輸出商 田畑勇

陸奥國三本木町
木炭輸出 稻本商店木炭部

青森縣八戸湊

青森縣八戸湊南驛は奥州角俵移出驛にして其品種に於て其數量に於て全國に冠絶せる處なりとす其一ヶ年輸出額は實に四萬噸の多きに達し之を去明治四十年度の千八百六十二噸に比すれば最近十年間に於て實に破天荒の進歩發展を示すに至る而して原産地は岩手縣九戸郡上下閉伊兩郡の海濱に面せる林地にして、即ち林産收入を以て唯一の財源と爲す處の岩手縣下の産出にかゝるものなり、幸に八戸、湊兩驛荷主にありては業者間の結束鞏固にして、加ふるに生産者との意思融和全きを得居るが爲市場に一定の秩序ありて常に統一を保ちつゝあるは市場の爲め將た生産者の爲大に欣ぶべき現象と云ふべきなり、今八戸港兩驛が急速なる發展を見るに至れる徑路を知らんが爲め先づ移出量の增加し來れる傾向より述べんと欲するものなり。

奥州角俵集散地八戸港の景

八戸、港兩驛移出木炭統計

年度	八戸驛	港驛	合計車數	價格
明治四十年	一八六二噸	—	二六六車	二八八二九圓
同四十一年	二〇四〇	—	二九一	四一二二八
同四十二年	三〇四二	二〇二噸	四六三	五八六〇五
同四十三年	四七四七	二一八四	九〇九	一三四一一五
同四十四年	六三九二	五〇一八	一六三〇	二三〇五九六
大正元年	七七四六	八六九三	二三四八	三三九二一五
同二年	九三四〇	一六五一七	三六九四	五三三六八八
同三年	一四一〇八	二〇八三三	四九九二	七九五五九八
同四年	一三〇四五	一七九八七	三一〇三二	七〇一九四三
同五年	一二三九八	二〇九九二	四七七〇	七六〇九五八

右の數字に依りて兩驛が如何に長足の進歩を示したるかを知り得べし、即ち明治四十年度にありては僅かに千八百六十二噸なりしに大正五年に至りて三萬三千三百九十噸に達し更に昨六年に於ては四萬噸强の數字を表はすに至る。

青森縣八戸輸出木炭商

（イロハ順）

林 特撰角俵柏皮製造 青森縣八戸停車場前 **岩崎恒哉** 八戸出張所

正 木炭經木各種製造 陸奥國八戸町 **石井萬吉** 電略（イシマン）

矢 木炭輸出商 陸奥國八戸鹽町 **伊藤貞治** 電略（イデイ）

小 木炭輸出商 陸奥國八戸八日町 **小笠原木炭部** 電話五十二番電略（ヲモ）

木炭輸出問屋 肥料石灰問屋 運送店兼營 陸奥國八戸停車場前 **高橋吉太郎** 電話三〇番

市 木炭輸出商 陸奥國八戸停車場前 **槻舘市郎**

中 改良角俵輸出商 青森縣八戸番町 **中居元一郎** 電話十二番

角俵木炭輸出商 青森縣八戸鍛冶町 **村井巳之助**

三 原州土釜角俵元祖木炭問屋 青森縣八戸停車場前 電話五十七番電略（ウヱ）（ウ） **植村彦太郎**

木炭問屋 青森縣八戸町番町四三 **阿部松助** 電話五十八番

三井商店 青森縣八戸町新荒町 **木炭輸出部** 電話二十五番

ニ 木炭問屋 青森縣階上村田代出張所八戸十一日町電略（ミ）又（ミケ） **三ケ田源次郎**

ス 角俵木炭輸出商 青森縣八戸十八日町 **清水繁藏** 電略（ヒル）又ハ（ヒ）

ヒ 木炭生産輸出商 青森縣八戸鹽町 **蛭子商店** 電略（〇ヒ

特製角俵 木炭問屋　青森縣八戸十六日町　按待麻雄　電話三百二十七番

運送店兼 木炭輸出　陸奥國三戸郡八戸驛前　高橋萬藏　電略（タカ）又ハ（タ）

青森縣湊木炭商組合

（イ ロ ハ 順）

企 石井嘉八郎
大 大村出張所
忠 大澤忠意
正 上森直吉
合 中清出張所
き 中吉出張所
ト 中田留吉
正 室岡元治
刄 黑澤支店
久 久慈一郎
山 山口喜次郎
大 古舘周吉
AR 秋田木材會社
分 佐々木隆藏
忠 宮澤辰之助
出 島川德次郎

青森縣八戸港海濱の景

◎秋田木材會社港出張所の事業

青森縣三戸郡湊停車場前に出張所を設け少壯敏腕なる武田忠直氏を支配人とし去大正六年の春より木炭輸出業を開始せる秋田木材株式會社にては爾來業務を擴張し木炭木材兩方面に於て進展し來れるが今や木炭のみにて同驛輸出角俵年額二十五萬俵に達し京濱市場に堅實なる取引先を有し居れるが營業の擴大せると共に販路も又擴張すべき計畫中なりと云へば市場販賣業者には同出張所へ照會し見るも便ならんか。

◎八戸植彦商店營業案內

店主　植村彦太郎　敬白

第一、拙店檜角俵ハ秤量ヲ六貫目正貫造トス

近來我產地ハ年ト共ニ木炭產額ヲ增加シ又販路モ之ニ應ジ擴大シツヽアルニ伴レ新營業者ノ續出スルアルハ事實ニシテ從テ競爭激烈ナル勢ヒ止ヲ得ザル次第ト云ヒナガラ其結果兩三年前ヨリ故意ニ秤量ヲ五貫七百目又ハ五貫八百匁等ニ減量スルノ弊ヲ產ミ來リ事實六貫ニ充タザルモノヲ六貫目ナルガ如ク粧ヒ此不足目ヲ算當上販路先ニ於ケル競爭ノ

具ニ用ユルニ至リ候之レ實ニ弊店トシテ慨歎ノ至リニ不耐候如何トナレバ弊店ハ斯ノ角俵創製ノ當時所爲ラク該包裝俵形ハ經濟上丸俵ニ比シ大ナル利益點アルニ想到シ結局需用家ノ德用ヲ認メラルヽト共ニ需用ノ增加スルヲ所期セルモノニテ實量ヲ瞞着スルガ如キハ拙店素志ノ容サヾル所ニ候故ニ創製當時ヨリ此ノ主義ヲ換ヘズシテ德義着實ニ商品價用ヲ主旨トシ永久ニ且ツ堅實ニ得意各店ト共ニ發展ヲ期セントスル者ニ候賢明ナル各位玉石混同ナク角二印ノ特色ヲ御自慢ニ御取扱被下度希望仕リ候

第二、拙店品質精撰上ニ於ケル特色ノ事

拙店ハ山方ヨリ海陸共ニ入荷シ來ルモノヲ手直シ整理ヲ爲スニ當リ煙リ付キ多キモノハ之ハ地元ニテ石灰製竈ノ用途ニ當テ供給シ輸出不合格トシテ除キ去リ替フルニ良品ヲ補充致スモノニ候次ニ拙店ハ割木ニ丸ノ交リタル普通製ハ之ニ特製札ヲ附シ普通製ヨリ優等印ヲ拔キ出スナドハ決シテナサヾル整理方針ニ候而シテ拙店ノ優等印ハ特ニ山元ニ於テ原料ノ適當ナルヲ撰ミ製炭職工ノ良功者ニ製炭セシメアルニ之ニ模倣シテ普通品ヨリ少シク木頃ヨシト見レバ不當ニモ優等札ヲ付ケ直賠ヲ取ラントスル者往々有之其紙札ゴム印ノ如キモ拙店使用ノモノニ模倣セルモノ有之候如上ノ次第ナレバ拙店ノ特製印ハ他ノ品ニ優ルヤ萬々ナリト信ジ居リ候

第三、拙店ハ御注文ヲ得テ積出スモノニ付極メテ簡單ナル現金取引ニ有之候事

即チ東京市ニ昔時ヨリ行ハルヽ所ノ問屋取引ノ如キハ注文ナキニ送荷ヲ受ケ代金仕拂ヲ爲スノ風アリ此ノ取引ハ其性質委托ニ屬スルヲ以テ成行仕切ナド、云フ之レ即チ委托ナリ拙店ハ無注文ニ送荷等ハ不致候

但シ御取引ノ方法ニ「御注文積出シ」(一車毎ニ)ト定期積出シ(前以テ御得意ト一ヶ月何車ト申合ニ對スルモノ)トノ二種ニ致居候間何レ共御指定ニ隨テ積付仕可候右次第ニテ滿爲替ニテ送荷可仕候尤モ初取引ニハ五車目迄一車ニ付三十圓ヅヽノ手附金ヲ申受ケ六車目ヨリ手附金ヲ廢シ滿爲替附ニテ御取引相願居リ候

奥州産角俵各種輸出
八戸木炭株式會社
青森縣八戸驛前電話二二六番

木炭輸出
米雜穀商
青森縣三戸郡市野澤(八戸驛ヨリ三里半)
サ 金澤慶藏商店
電略(カネサ)又ハ(サ)

◎島守村田代　青森縣八戸町より岩手縣九戸郡久慈町へ通ずる沿道に角俵土釜木炭の集散地あり名づけて田代と稱す、同地は八戸町より馬車便あり道程僅かに四里にして二時三十分にて達す、此地荷主に小野寺勘兵衞、村松松五郎、中居開助、工藤德三郎、中村萬次郎大橋淺五郎、三ヶ田源次郎等の諸店ありて一ヶ年二千車内外を產出し八戸角六として聲譽を博しつゝあり。

木炭輸出商
青森縣三戸郡田代
小野寺勘兵衞
電略(ヤマコ)

木炭問屋
青森縣三戸郡田代
中 中居開助
電略(ナカ)又ハ(カイ)

木炭問屋
陸奥國三戸郡島守村田代
松 松五郎
電略(ムラマツ)

薪炭材料商
肥料
海產物
青森縣八戸停車場前
電話一三一一番
木 室岡政八
連送店
室岡

人物紹介（其六）

植村彦太郎氏

氏の嚴父たる彦八と稱し四近に信望高く呉服商酒類釀造等を營み傍ら公共の爲に盡瘁せられたる人なり、植村彦太郎氏は其長子として生れ父祖の業を繼承し來りしが、去明治二十九年に至るや東北林産の開拓に志し九戸郡種市に水力應用製板所を設けて素志の幾分をも貫徹する中、更に明治三十九年に及び偶々木炭業の前途の好望なるを達觀して專ら斯業に身を委し以て今日に及べり、氏は始め奥州角俵の未だ市場に現はれざるに於て、該品が需用者の嗜好に適すべきを先見し、角俵正味六貫造として中央及中間市場に供給し其元祖を以て知らる、氏は資性剛直にして嚴格なるだけに同業より信頼厚く今や八戸業界の重鎭として聲名を博し又一面八戸町會議員其他の公職にあり、本春八戸輸出木炭商有志の發起のもとに創立せられたる八戸木炭株式會社へも擧げられて社長たり。

岩手縣東海岸

八戸湊兩驛輸出年額四萬噸内外の角俵木炭は其大半岩手縣九戸郡及上下閉伊兩郡の産なること前編に於て詳説せる處なり、今之れを産地別に就て述べんか、即ち宮古港を中心とし其以北は八戸港へ出し以南は主として鹽釜港を經由して各需要地へ移出せらるゝの狀態なり、左に各地域別とし詳述し尚主なる荷主の閲歴等をも紹介せん。

◎九戸郡

岩手縣九戸郡は木炭の産額中全國に冠たることは前項述ぶる所の如し、同郡は海岸筋を除いては殆んど重疊たる山嶽に依り包圍せらるが故に道路拓けず交通機關亦完からざるを遺憾とする處にして産業の發達を阻害せられつゝも其不利不便に對抗して今日の林産收入を見るに至りたるは居住民の努力と云ふの外なし、此交通不便に就ては郡民は常に留意する所ありと雖も巨額の費を要するを以て止なく現狀に甘んずるなり。

同郡は太平洋に面する一帶の地域は漁業を營むもの多く山間の村落に於て林産物の生産に依りて計を樹つるの現狀にて稀れに養蠶を營むあるも主として製炭製材等の事業に專ら從事せり斯く專業的に製炭をなすもの多數なるが故に職工等も他より雇入れざるを得ずして多く栃木福島地方より招徠し土地人は僅に二分に過ぎざる狀なれば、農繁期なるが故に製炭量を減ずるの憂れ少く他の農業地と趣を異にせり。

◎侍濱村

今より十年以前麥生村中塚氏が自己所有の山に於て製炭業に從事せるを以て濫

觴とす、當時は產額微々たりしも陸奥港と近距離なるが故に運輸の便宜しかりし爲今より四年前には年產出額十萬俵內外に達せしことあり、然れども濫伐の結果產額は年々減少し來り、現在にては漸く六萬俵內外を生產するに過ぎず、種類は角俵六貫造りにして檜四分雜六分の割合を示せり。

◎**久慈町**　九戸郡役所の所在地にして人口五千三百を有し單り我木炭のみならず一般商業の中心地たりしも大正七年一月祝融の厄に逢ひ全町烏有に歸し餘すに十數戸を出でず、爲に金融機關も破壞されし有樣にて商取引又舊時の如くならず。

卻いて同地木炭業の創始を繙ぬるに今より二十年前にして、始めて東京へ移出を見るに至りたるは明治四十二年頃なりとす、當時は遠く會津方面よりも職工を雇ひ來りて製炭を行ふもの多數あり年二十萬俵の產額を示せしことありしも、其後中央市場の不況に會し斯業者中倒產するもの續出し一時生產減少せしも大正六年の昂騰以來又々製炭に從事する者激增し現今にては年產額三十萬俵に達するに至れり、それが爲に運搬至便の地域は最早伐採し盡せるが故に前途は必ず半減を見るべきは目睹するに難からず、樹林は檜多く雜少なく品質佳良なり。

◎久慈町業界の中堅中野吉郎氏の閲歷

久慈町業界の代表的人物を求むれば中吉、中清の兩氏なるべし、中吉の當主たる中野吉郎氏は本業は木材にして製炭業に從事せるは大正二年の交なり、創業日極めて淺しと雖も豐富なる資力と非凡の商才を有せることゝて頗る大規模の計畫の下に事業の步武を進め、今や郡內のみにても百二十枚の窯數あり、年產額六萬俵を出すの優勢を示せり、種類は檜丸割角俵六貫が全體の七分を占め雜が三分の割合なり、氏は別に大正六年中下閉伊郡江川村に三個所の製炭所を設け窯數五十枚に達せるが前途專ら此方面に向つて全力を傾注する意あり、現在は一ヶ年三萬俵內外にあるが如し、同所は薪炭林に恰適し樹齡も餘り長じ居らざれば優良品を出すべく又產額も倍加を見る容易なるべしと云ふ、氏の製品は大正六年十一月二十日久慈町に開催されたる九戸郡物產品評會に出陳して一等賞牌受領の榮譽を贏ち得て金盃を授與せらる、同店所有運炭船に第一久榮丸三十噸第二久榮丸二十五噸第三久榮丸十九噸あり久慈陸奥兩港間を航行しつゝあり、眞に偉なりと云ふべし。

◎木炭界の權威と稱せらるゝ中野清吉氏

久慈町に於ける製炭業をして今日あらしめたるは中清商店主中野清吉氏の指導啓發に依る處多し氏は起るも倒るも木炭なりと公言し一意專心他を顧みず製炭法の改善を劃し今や市場に其名を博し人氏を稱して木炭界の權威なりと云ふに至れり、而して氏の事業に就て言はんか、氏か漸く緒に就きたるは明治四十三年の交にして久慈町

附近にのみ百二十枚の窯を有し更に沼宮内驛を距る八里の地域に於ける外川山の官有林五千町歩を拂下げ支配人に長内氏を派し目下諸般の準備中に屬せるが、愈々此の方面の事業進捗の曉は年裕に十萬俵は至難ならずと云ふ氏は曩きに久慈町附近の林源に富める隆盛時代にありては年移出額十二萬を超えしことありと云ふも手近かの山林は伐り盡せる爲漸次減少の兆あれば爰もと七八年を經過したる曉にも及ばゝ久慈の事業は悉く沼宮内へ移して全力を此地に注ぐに至るべしとの意氣込なり、而して氏の製品が他品に比し特色とする處は職工をして一切荷造りを行はしめざるにありて荷造人夫は別に之を置き以て品質の統一、量及の完全を期しつゝあるなり、同家は祖先傳來漁業を營み來たる爲め之をも廢せず、門前村の如きは八個所の漁場ありて漁船三十艘を所有す而して運炭船には第一清榮丸二十五噸第二清榮丸十八噸第三清榮丸十八噸の發働汽船を有し居りて中吉氏と伯仲の勢力を示しつゝあり。

◎**野田港**　同港附近に於て製炭に着手せるは明治四十二年極めて最近のことに屬せり、當時の產額は一ヶ年約二萬俵内外なりしが漸次に減少し來り現今にては二十四五萬俵の程度なるが如し、品種は檜角雜角にして檜七分雜三分の率にあり、之が仕向地は八戸港を經て東京市場に移出する量十中八九を占め居り他は縣内鑛業用に充てらる、前途見込にありては林源も徐々に伐り盡さるゝ傾きなれば四五年の後にも至らば半減の量となるべし、而して同港に於ける運送專問の發動機船は四艘を算し島川中野兩氏の所有たり。

◎荷主　侍濱、久慈町、野田港に於ける主なる荷主は左の如し

陸中國九戸郡久慈町
木材枕木
木炭米穀
官鹽元捌
中野吉郎
●八戸湊驛中吉出張所

陸中國九戸郡久慈町
木炭漁業
海產物商
中野清吉
●出張所　八戸湊驛前、沼宮内愛宕下

陸中國九戸郡野田港
木炭商
中野義廣
電略（カネヨ）又ハ（ヨ）

陸中國九戸郡野田港
吳服海產
木炭、繭
仲買商
前田安太郎
電略（マヤ）又ハ（マ）

岩手縣九戸郡侍濱村
木炭商
中塚堅一

陸中國九戸郡久慈町
木炭商
外舘金之丞
電略（トタテ）又ハ（ト）

岩手縣九戸郡侍濱村
木炭商
菅原佳吉

◎下閉伊郡

下閉伊郡は九戸郡に接近し宮古町以南は平垣の地域を有すれど以西は山又山人馬の交通

も至難にして本邦中稀れに見る山嶽地帶たり、海岸は稍々平垣の箇所あり船舶の出入に便なる港灣あるが故に僅かに海上の交通に依て其不便を補促し居れり。

下閉伊郡の產物としては海產物の外牧畜あるのみにて他に重要產物を有せざるを、近時炭價の昂騰に伴れ薪炭の製造に着目するもの漸く多きを加へ來りて其發達の顯著なるあり今や縣下各郡を通じて有數の生產地として首位に列するを得るに至れり、商取引も亦從來は主に鹽釜又は八戸港に於て賣放ち直接東京市場へ移出するもの稀れなりしが、近來に至りては東京又は横濱市場へ直接取引をなし居渡賣買を行ふもの尠きに至れるの傾向なり、之れ畢竟奥州角俵の原產地として世間一般が重視せる結果に外ならざるなり、今左に郡內主要地域別に狀況を輯錄すべし。

◎**普代港**　同港を中心とし附近各部落に於て木炭の製造に着手せるは四十二年の交にして栃木縣下都賀、上都賀の兩郡より職工を招致し製炭を營みしが當時は年額僅かに二三萬俵に過ぎざりしも今より五六年前木炭の市價回復するにつれ漸次產額の增加を誘致し現今は十八萬俵の移出を見るに至れり、而して從來は殆んど楢のみを撰みて製出せるも大正六年度に於ける木炭需要の激增以來雜木をも材料に供するもの漸く多きを加へ楢八分雜二分の割合となり居れり、林源は附近一帶無盡藏なるを以て現今の市價を持續するものとすれば產額は急足の勢ひにて增加すべき狀態なり、仕向地は大部分陸奥港を經由して東京市場へ移出せらる。

◎普代港製炭界の先鞭者熊谷精治氏

普代港に於て製炭業に着手せるは今より十年以前にして同地に於ける先鞭者たり、當時熊谷氏は農會長の職にありたるを以て薪炭林豐富なるに着眼し各部落諸氏に斯業の有利なるを鼓吹し楢崎式製炭教師佐藤富治氏を招聘し隨所に講習會を開催せるも甚熱せざりし結果其目的を達すること能はざりき、然るに氏は專念一意林產向上に志したる甲斐ありて今より四五年以前より稍々曙光を見ることゝなりて今日の隆運を產むに至りしと云ふ、現今にては窯數三十枚に達し一ヶ年の移出額四萬俵を產し所有發動機船永運丸は普代港八戸港間を往還しつゝ製品の航運に從ひつゝあり、同店港出張員は賣買の衝に當りて繁忙を極むるの盛況を呈す。

◎大資力を擁せる藤島吉十郎氏の事業

藤島家は代々漁業を營み來り農牧を副業とせり、氏の製炭界に沒頭せしは六七年以前にして創業日淺きに拘らず豐富なる資力に擁せられて着手せる爲其發展こそ實に長足の進歩を來し今より三四年前となりし頃しも既に年額八萬俵の數量を一手に移出したることありて、現今職工の缺乏と生產經費の向上より事業を制限せる傾向に見ゆるも

事業の規模は決して從前と愉らず、同氏も亦所有發動機吉榮丸あり白井濱、平井賀の兩港より八戸港へ移出し更に京濱市場の需用に仕向けつゝあり。

◎**荷主**　普代港に於ける荷主の主なるものは左掲諸店なり

㊀ 陸中下閉郡普代村 米穀 木炭 雜貨 **熊谷精治** ●出張所 港驛前熊谷出張所

㊀ 陸中下閉伊郡普代村 木炭商 **藤田嘉吉** ●出張所 岩泉村藤田出張所

㊁ 陸中下閉伊郡普代村 **熊谷善六出張所** 電略(クマ)又ハ(クク)

㊂ 陸中下閉伊郡普代村 木炭 水産 牧畜 **藤島吉十郎** ●出張所 港驛前

㊃ 陸中下閉伊郡普代村 木炭商 **大上忠次郎** 電略(ヒチ)又ハ(チ)

㊄ 陸中下閉伊郡普代村 木炭 木材 **佐々木清次郎** 電略(ササキ)又ハ(サ)

◎**岩泉村**　同地は縣道交叉點に位置を占め交通の便比較的有利なるも港灣に遠ざかること六里の山間に假在するが故に自然木炭の移出を見るに至れるも全く最近のことにして大正四年の交に屬せり、初め山崎梅吉氏が尼額に窯を築き製炭に從事せるより範を起し漸次に發達しつゝ今に及べるものなり、同地には岩手木材乾餾會社の工場あり、年産額十二萬俵(之は丸俵造り正味五貫)を出すの外十七萬の生産力を有するに至る、而して薪炭林の面積としては約六千町歩を算するを以て稍々無盡藏に近く將來益々産額を增加すべき機運にあり、品種は角俵檜雜土釜にして陸奥港へ仕向く。

◎活動家熊谷安治氏の製炭好望

岩泉地方にありては岩手木材乾餾會社を除けば他は皆な小規模にして肩を比すべきものなきも獨り熊谷安治氏の在るあつて渾身の精力を傾注し製炭に從事し居りて驀ては會社の壘をも摩せんとするの勢ひあり、由來同氏は菓子製造を業とし木炭とは全然沒交渉に眞に畑違ひの營業に携はり居りしが、中頃に至りて自己所有の薪炭林を有益に利用せんとの念慮より製炭に着手せるなりと云ふ、氏は他の同業者が東京直取引の煩を避けて地場賣りにのみなしつゝあるに倣はず最初より東京市場へ移出す、尙ほ氏は雜穀及質屋營業をもなし他方面に活躍しつゝあり。

◎**小本港**　同港は附近より生産する木炭の集散地にして大正二年の頃より移出を開始せり當時は年額僅かに一萬俵に達するに過ぎざりしが、漸次に昂進しつゝ現今にありては二十萬俵を數ふるに至れり、種類は檜角にして雜木は皆無の狀態なり、而して同地は八戸へ九分鹽釜へ一分の割合にて航運さる、尙同地は林源頗る豐多なるも港灣の不良なる爲船舶の碇泊及び荷役に不便なるが故に多量の集注あれば必ず停滯を免かれ難きものあらんと思惟さる。

◎**小成港**　薪炭林の豐饒ならざるが爲從事するものも又從て尠なく現今一ヶ年の移出量は僅かに四五千俵を算するに過ぎざるも今後官有林の拂下を見るにも至らば二萬俵内外に達せしむるは敢て至難にあらず、同港に於ける唯一の製炭業者たる金澤彦七氏の如き附近の薪炭林缺乏せるより現今にては隣接せる攝待港附近に事業を移し漸次引上げの方針を取りつゝある實況なれば前途の望多からずと見るを當れりとすべし。

◎**コドヱ港**　同港は宮古の木炭業者佐藤左藏氏率先して製炭に從事せる處にして一時年產額五萬俵以上に達せる高潮時代ありしも附近の薪炭林は伐採し盡し現今にては僅かに久幾山に於て山田氏が製炭せるに過ぎずして一萬五千俵内外に減少せり、樹種は檜、槲、雜なるが槲の如きは寧ろ檜以上の優良品なりと云ふ。

◎**田老港**　宮古港に稍々匹敵するに足る良港灣にして船舶の出入碇泊に便なり、同地製炭の創始は大正三年の交に屬し佐藤左藏氏之れが先鞭者たり、翌四年には小幡氏大規模の製炭に着手せる以來漸次發達し來りて現今にては一ヶ年を通じて十二萬俵の集散あり、種類は檜七分、雜三分に相當し角俵土釜六貫匁なりとす、而して同地は林源一萬町歩の多きに達し居るを以て市場の相場甚しき變調を來さゞる限りは漸を追ふて發達すべき見込充分也。

◎立志傳中の人小幡兩氏の閲歴

田老港を中心として製材に製板に將た製炭に運輸に、諸般の事業を經營して寸閑なく活躍し今日の基礎を鞏むるに至れる小幡氏兄弟の閲歴こそ寔に立志傳中の一頁を飾るに足り、徒らに遊惰に流れ居る青年に對しては一服の刺激劑ともなるべし、氏の兄弟は曩に相携へて故園の山河に厭かの永別を告げ異郷の旅に上る際には嚢中僅かに三圓五十錢を所持するに過ず、目指す處は都會？　新開地？　世人の豫想に反し兄弟相結びて岩手縣東海岸へ放浪の客となれり、時あつては樵夫の群れに身を投じ時あつては勞役に得たる收入に依て辛ふじて糊口を凌げる場合ありしかど、水戸氣質の負け厭ひを發揮して苦闘を續け以て今日の成功を贏ち得るに至れり、今や田老港に集散する木炭の六分は小幡兩氏の製出木炭にして加ふるに買入數量も尠からず、又發動機船三十五噸一艘を所有し鹽釜港へ陸揚して中央市場へ移出しつゝあり。

◎荒谷榮太郎氏の製炭事業

田老港の業界に於ける一方の重鎭を以て任ぜる荒谷氏は本業は古へより米穀にして傍ら林地買入の依賴等に應じて業者の爲に仲介の勞を執れるが動機となり大正五年の交始めて製炭事業に着手せるが、時偶々木炭の價格昂騰せるに會して巨利を得ると共に業務を擴張することゝなり今や自製及買炭を合して年額　萬俵内外の數量を取扱ふに至れり同氏の理想としては近き將來に於て倍額の數量に達せしめんとて諸般の準備中に屬せるが愈々其理想を實現

するの曉には東京市場と直取引を開始する筈なりと云ふ。

◎赤沼喜兵衛氏の製炭計畫

田老港新進の木炭荷主として主きを爲す赤沼喜兵衛氏は祖先傳來の業務は海産物商にして今も尙ほ手廣く取引を行ひつゝあるがフト思ひ付いて貝釦製造を營むべく器械を購入して盛んにそれが製造販賣を開始し來り聽ては同港の重要産物として數へらるゝに至るべしと云ふが、かく事業の趣味を有する同氏には更に大正五年九月製炭業に着目して附近の林源を買入れ木炭の製造を開始せるが折柄市價の向上に逢ひて殊則以上の收利を見るに至りしかば今後尙一層の擴張を施すべき意氣込みなるが、氏の製炭事業の規模は今は二十個に過ぎざる窯數なるも最早職工を入るゝ許りの程度に準備の整へるもの約二十枚あるを以て年額四萬俵の移出を見る難きに非ざるべしと。

◎荷主　岩泉、小本、田老の各産地に於ける荷主を紹介せば左の如し

陸中下閉伊郡田老港
木材木炭商　小幡仙次郎
電略（ヲハタ）又ハ（ヲ）

陸中下閉伊郡田老港
木炭海産物米穀生材仲買　荒谷榮太郎
電略（アラエ）

陸中下閉伊郡岩泉村
木炭輸出商　熊谷安治商店
電略（クマカス）（又ハ（クマ）

陸中下閉伊郡田老港
木炭製造海産穀類　赤沼喜兵衛
電略（アカ）又ハ（ア）

陸中下閉伊郡宮古町
木炭製産輸出商　山田晋平
電略　ヤマシ）又ハ（ヤ
●出張所　田老村久慈山

陸中下閉伊郡小本港
東京田中製革所專屬　遠藤寅之助
電略（エン）又ハ（エ）
●陸奥港出張所●小川村製炭部

陸中下閉伊郡岩泉村
木炭輸出　落合喜久治
電略　ヤマキ）

陸中下閉伊郡小本村小成
木炭商　金澤彦七
電略（カヒ）又ハ（ヒ）

陸中下閉伊郡小本港
木炭商　箱石安五郎
電略（ハコヤス）

陸中下閉伊郡田老港
木炭商　佐々木半治
電略（ササキ）

◎宮　古　町

◎沿革　宮古港附近に於ける製炭の由來は明治四十五年の交管下を通じて凶欽の厄に逢ひ田圃無收穫の慘狀を呈し住民の饑に泣くもの擧げて數ふべからず、縣當局にあつては薪炭林の豐富なる土地柄に考慮し製炭を一般に奬勵せるに起因せり、然れども生産過剩の結果最初に多少とも利したるものは最後には吐き出すと云ふ始末となりしかば産業の發展を阻害すること甚しく一旦勃興しかけたる製炭事業も線香煙火式の終焉を告ぐるに至り有終の美を收むる能はざりしは遺憾なりき。

◎當時の趨勢　生産過剩の爲炭價暴落し一旦閉熄せる製炭事業も其後二三年を經過し東京

木炭主要集散地宮古港の景

宮古港は三陸東海岸中屈指の良港灣にして百貨常に輻輳し帆檣林立の壯觀を呈し居れり、中にも木炭は近時長足の發達を爲し一ヶ年を通して實に七十萬俵内外の產額を示すに至れり、又中央市場との商取引もそれに伴れて頻繁に趣き前途の好望な謳はさるものなし。沿岸航路にありては三陸汽船會社に於て百五十噸級の小型汽船を配し宮古港を起點として釜石鹽釜の兩港へ毎日航海の便あり。大貨物は主に發動機船にて輸送さるゝも稀に東京直航臨時船の寄港ありて盛を示せり。

市場より入注多きに達し有力なる出資者さへ現はれたるより漸次復興し生產も又增加の傾向を呈せる折しも大正六年秋季より振古未曾有の暴騰を見たるより現今にては一ヶ年を通して七十萬俵にも達するに至り一躍して東海岸第一位の地歩を占むるに至れり。

◎將來の見込 宮古港を中心として五里四方の薪炭林源面積は約四萬町歩に達すべく裕に七八百萬俵の製炭は難からざるが故に前途十ヶ年の命脈は保ち得べし、而して運搬に至便なる地域は最早大半伐採せる爲資本豐多なる人にありては索道に依て搬出の方法を講ずるの狀なり、其他道路の開鑿を企つもの屈指に暇あらず、斯る狀態なるを以て遠隔の地域に屬する林源をも見積るとせば十數年は現今の產額を保ち得らるべきやに想察せらるゝなり。

◎品種 同地より產出する木炭の種類は主に楢割にして丸上物と雜割は其一割に過ぎざる率にあり、開は決して雜木の林源に乏しと云ふにあらざれども市場の相場が雜の割合より楢が高値なるより自然楢にのみ心を奪はるゝ傾向がかくあらしめしものなりと云ふ、されども薪炭林も伐り盡し林地深く入らざれば能はざる狀態に促がされて之れよりは雜の率を超過するに至るは自然の歸趨なりとす、而して雜木にはオンノリ、ヤマダテ、楓、櫻等樹種多けれど之等は製法に依りては楢の品質に較べて相違する處なしとて生產者側は唱へ居れり。

人物紹介（其七）

佐藤左藏氏（陸中宮古町）

林產業の上に開拓的進歩を圖らんとは佐藤左藏氏の素論にして氏が今日三陸業界の權威を以て重視せられつゝあるも亦決して謂れなきにあらざるべし、氏は最初大槌港に製炭を開始し爾來八方に手を擴げ今や東京市場へ移出する一ヶ年の產出額は十數萬俵を算するに至り、昨秋來の騰貴に際會し益々資力の大を來し旺んに活躍されつゝあり、氏は尋常人の手を下さゝる深山に索道を架して製炭を搬出するの便に供し一面鹽釜間の運炭には三十五噸の容積ある昌榮丸を充つ、以て氏の努力の程を知り得るなり。

◎宮古港著名荷主

◎岡田與五兵衞氏

宮古港に於ける長老株として謳はるゝ最も古き經歷を有する木炭輸出商なり、岡田氏の本業は雜穀商にして蘭糸の製造販賣をも兼ね、氏が木炭業を創始せるは凶作救濟の當時縣當局が製炭業を督勵したるに動機を發し爾來今日に及べるものにて東京市場へ移出を開始せるは氏を以て卒先者の第一人となすべし、從つて此の間にありての氏の損失も多額に上り一時は木炭業には再び手を染めまじと決意したることもありと云ふ、例へば當時地元に於て一俵三十錢以上に買入れたるを東京着二十八錢掴みにて引取られたること屢々ありと、されど　炭と終始すべく決心せる氏は其難關を切り拔け來りしに大正六年に至るや俄然空前高値に逢着し一獲千金の巨利を博するに至り往年の損失は一ヶ年にして償ふを得て尙餘りありと云ふ、氏創業當時は一ヶ年五萬俵内外なりしも現今にては一ヶ月三十車平均の移出をなし居れり、其商品は手山と買炭なるが手山に就ては窯數四十個あり品質量匁等一定せるものを供給して市場より迎へられ居るは人の知る所なり。

◎喜藤養治氏

宮古港に於ける大手筋の荷主として目せられ縱横の手腕を揮ひ居る喜藤養治氏は山崎支店のマネージャとして大正元年に此地へ根據を定めり、當時は專ら生産者の手より購入して市場へ供給し來りて其翌二年より弗々附近の林地を買得し充分準備の整ひたるに及んで一擧大規模の施設の下に製炭を開始せるが現今にては自已經營に屬する窯數百四十個に達し秋田、富山、磐城地方より募集せる職工の員數は家族を合して二百名を超ゆる盛況なるを以て今や擴張の期に到達し産額增大もまのあたりに近づき居れり、而して薪炭林面積は二千町歩に達し中には千古斧鉞を入れざる有望地域もあれば之より氏の手腕に依つて之を按配せんか必ず豫期以上の數量を見る又難きに非ざるべし聞く氏の前年度移出量は九萬俵餘に過ぎずと云ふも聽ては倍加の域に到達するを得べしと云ふ氏の品種は角俵造り檜割を最とし雜割は少部分なり。

◎橘喜和太氏

氏は眞に潛航艇式の活躍振を示し當に商機を逸せず、大口の入注に應じ大手筋の同業者をして驚嘆せしむるの手腕力量は橘氏を措いて他に求むる能はず、氏は田野畑村の出にて我木炭　にかけては實に人一倍の深き經驗を有する事業家なるも田野畑は生産として古き歷史を有するだけに林源も徐々に伐り盡し今や林地の缺乏を告げ居る爲同地にあつては活躍の餘地なしと見て取り、大正六年の業界末曾有の好機に乘じ宮古の業界に馬を進め以て今日の地歩を占むるに至れり、今や取扱數量一ヶ年五萬俵を算し未來を有する新進の同業者として四近及市場より囑目せられ居れり。

◎佐藤左藏氏

前に人物を紹介して事業の概畧を述べしが更に其詳細を極るの要なれば玆に錄すべし、氏は明治四十五年の頃大

樅港當時は一ヶ年七萬俵の多きを移出し超へて大正三年に到り田老港に製炭所を移したる當時は一ヶ月三千俵に過ぎざりしが大正五年に至りては一ヶ月八千俵に能力を增進せり、夫れより宮古近在各所の林地を買入れ現在の個所に出張所を設置せり其他山田港を首め各部落に於て事業を經營し之を合算したる數量は一ヶ年裕に十萬俵に達すべし、今や所有薪炭林面積一千町歩を超過し就中遠距離なる山口村の林源地へは索道を設け蒸汽力に依りて器機を繰綴し運搬を開始されたり、因みに氏の製品は去大正四年四月郡農會主催下閉伊郡木炭品評會、大正五年九月奥羽六縣聯合共進會、大正六年七月全國木炭品評會等に於て金銀牌を授與され今や業界に名聲を知らざるものなし。

◎**茂市村**　同地は宮古港を距る西方四里の地點に位し主要生產地の列に加はる、製炭の創始は明治三十七年の古きより起り當時は堅物十貫俵造り年額七千俵内外なりしが大正三年に到り現今の六貫角造に改め品質を吟味すると共に產額次第に增加し來り大正六年

宮古繞りのみやげ

世人は松島の風光に憧憬し宮古の絶景を顧みざるもの多きも海上平穩の季節に際し鹽釜より汽船に便乘し宮古灣に到達し甲板上より右顧左眄すれば四圍の景色雄大にして雅致あり之を他に求めんと欲して容易に求むるを得ず上圖は即ち淨土濱の實景にして相接續して蛸濱の名勝あり其昔義經が上陸せる古蹟として一岩一樹と雖も忽にせず地方人士に依つて有意義に保持せらる、それかあらぬか鄕社八幡神社の背後に當る丘陵を掘鑿すれば石器時代の遺物を發見すと。

度の如き年七萬俵を超ゆるの優勢を呈せり、此れが仕向地は主に東京にして荷車にて宮古へ下し更に海運に依りて鹽釜へ送り同驛經由市場へ移出す。

◎畏岩重次郎氏の閲歷

品質を改良し製品を統一する點は恐らく畏岩氏の右に出づるものあらざるべしとは四近同業者の評する所なり、此を以て見るも氏の製炭業に對する熱心の程度を知るを得ん、氏が製炭業に着手せるは最古の部に屬し同地の開拓と期を同ふすと云ふ、今や林源千餘町歩窯三十個を有し年產額二萬を示し居れり、而して製炭生材は汎て自給にてあれば職工雜役夫の多きを得ば或は倍加の數量を製出する至難ならざるべきなり、今氏が市場より堅實なる荷主として迎へらるゝは氏の性格の然らしむる處にして製品の如き一點の批難を加ふる餘地なしと稱讃されつゝあり、因みに氏は三十五年頃より木材業を營み中頃より木炭業を兼營す。

◎**津輕石村**　今より十年以前迄は僅かに役場用の製炭をなすが關の山なりしも大正二年の交に至りて山根氏が東京移出の目的を以て事業を開始し漸次隆盛となり今や津輕石川を下る木炭の數量は一ヶ月平均二千俵、赤前に集散する數量重茂の分を合して四千俵を算し種類は檜六分五厘雜三分五厘の割合にて何れも角俵六貫を標準とし精製さる、然るに同地薪炭林の面積は剩す處一千町歩を出でずと云へば前途三年の命脈を保つに過ぎずと云ふ、供

給地は中央及中間各市街地にして鹽釜を經由す。

◎山根仁左衛門氏の事業

津輕石地方に於ける製炭の嚆矢は山根氏にして今や窯數五十枚を算し一ケ年產額五萬俵を示す、而して氏の豐富なる資力は業務を擴張するに足るべきも、附近一帶の山林は運搬に便なる爲め最早伐り盡して施設の餘地尠なきを以て通常の方法にては製品の數量は年一年に減退し行くべきなり、然るに性來霸氣に富める同氏のごといへ此儘默すべからずして何時か他に豊多なる林源を求めて第二の計劃を樹つるは疑ひなかるべし、氏の製品は赤前より海上を鹽釜に出し以て中央へ仕向けらる。

◎**山田港** 同港附近に於ては大正五年の交より製炭業勃興し爾來折りよく好運期に逢遇せし爲め同地は辛き歷史を殘すも全く順調に進み來り今や一ケ年十二萬俵の移出あり、されども林源地は大正六年より七年春期に亘りて有數なる私有林は漸く伐り盡し之れより官有林に依る外なしと云ふが幸に官有林面積二千町歩は恰も百萬俵を製するの石數ありと云ば十萬俵十年間は命脈ありて追付いては私有林の輪伐期にも入るべければ爰許暫くは林源に患ひなかるべし。

◎**荷主** 左に宮古港、茂市村近在、津輕石村、山田港、氣仙郡綾里村に於ける主なる木炭

移出商を案內すべし。

陸中下閉伊郡宮古町
薪炭問屋 佐藤左藏
電略（サトヲ又ハ（サ）

陸中下閉伊郡宮古町
木炭生產雜貨店主 岡田商店
岡田與五兵衛 電略（ヲカヨ）又ハ（ヲ

陸中下閉伊郡宮古町
薪炭問屋 喜藤養治
電略（キト）又ハ（キ）

陸中下閉伊郡宮古町築地通り
木炭輸出商 橘喜和太出張所
○本店 下閉伊郡田野畑村電略（タ）

陸中下閉伊郡茂市村
木材薪炭商 畏岩重次郎
電略（ホロ）又ハ（ホ）

陸中下閉伊郡宮古町
木炭輸出商 北澤六右衛門
電略（キタ）又ハ（六）

陸中下閉伊郡津輕石村赤前
木炭商 山根仁左衛門
電略（ヤマネ）

陸中下閉伊郡宮古町
木炭商 盛合與右衛門
電略（モリ）

陸中下閉伊郡重茂村千鍵
木炭商 上野鶴松
電略（ウエノ）

陸中下閉伊郡宮古町
木炭商 龜安太郎
電略（カメ）又ハ（カ）

陸中下閉伊郡宮古町藤原町
薪炭買商 野邊地達郎
電略（ノヘ）

陸中下閉伊郡宮古町
木炭生產業 佐々木長吉
電略（ササキ）

㊀ 陸中下閉伊郡宮古町 木炭製造 宇都宮五七郎 電略（ウ）又ハ（五）	陸中下閉伊郡川井村古田 木炭輸出商 大上市太郎 電略（ヲイチ）	陸中下閉伊郡山田港 木炭商 阿部誠喜 電略（ア）
陸中下閉伊郡茂市村 木炭輸出商 太平益藏 電略（ヲマ）	陸中下閉伊郡茂市村 木炭輸出商 橋本岩松 電略（ハシイワ）	岩手縣氣仙郡綾里村 製炭輸出海産物學校用品 ㊥ 本田長七 電略 ホンタ）又ハ（ホ）
陸中下閉伊郡山田港 木炭商 阿部忠治 電略（アベ）	陸中下閉伊郡山田港 木炭商 佐々木兵五郎 電略（サキ）	陸中下閉伊郡山田港 木炭製造販賣 渡邊貞次郎 電略（ワタ）

陸前氣仙郡

◎**矢作村**　同村の位置は移出港たる長部を距る三里以内の部落にして木炭の主要生産地たる生出は更に四里を巨る山間部にして交通便ならざるだけに周圍三里四方は薪炭林を以て包擁せられ林源豊多なるは四近に其比を見ざるなり故に製炭事業も近時漸く發展の域に進み今や年額八萬俵内外に達せんとするの趨勢を示し居れり、俵裝は角造にして槍は六貫雜は五貫と六貫の二種ありて多く千葉縣銚子港近在へ向け移出せられ其他は鹽釜港の仲買業者の手に依て市場へ供給せらる。

◎**生産荷主**　木炭製造を營むものに佐藤榮之助、鈴木龜之助、佐々木喜八郎、佐藤竹次郎、佐藤德次郎、佐藤萬太夫、佐藤丑藏、佐藤芳三郎の諸氏あり。

◎**豊田米村**　移出港長部を距ること七里交通は縣道に通じ居るを以て車馬自由に往來す、同地木炭産額は地勢の關係上多額ならざるも稍々矢作と伯仲の間にあり、荷主としては管野定吉、遠藤卯三郎、大和田文藏、荒木美輝、遠藤直三郎、遠藤重兵衛、菊地長右衛門の諸氏あり。

◎**長部港**　同港は氣仙村、高田町前掲の矢作村等より生産する木炭の移出港にして同港より鹽釜に移され千葉縣銚子町を第一位とし其他中間各市街地に配分され更に鹽釜港仲買荷主を經て東京へも供給さる、同港は船舶の碇泊出入に至便なるも三陸汽船會社の定期船は脇の澤へは寄港するも同港を除外せるが爲に幾多輸出上の不便あり。

◎**荷主**　附近に於る荷主は高田町に佐藤常助、金野善藏、同町新町に柴田磯治、今泉に吉田半藏、近江福治、小島寛治の諸氏あり。

和歌山縣

◎**總說**　和歌山縣は本州の中央より稍々西部に偏して紀伊半島の西南兩面を領し本州島の最南端を占む。彊域は北方大阪府に界し東は奈良縣に隣し東南は三重縣に接す、地勢は海岸屈曲して奇崖多く潮岬以東は熊野灘と稱し特に航海業者の危險を感ずる處にして地勢は南地に長く東西に短し、紀伊山系は西方より來つて東方に馳せ其支脈は千分萬岐して平原に乏し、如斯なるが故に縣管下全面積は三百方里と稱すれど耕地は僅かに四萬七千町歩を算するに過ぎざるなり、他は概ね山林なるを以て往古より林產物の豐富なる點は多く其比を見ざる所なり、從つて我木炭にありても產額の點に於て將た品質の點に於て全國主要生產地の一に列するのみならず、品質の優秀なるは既に古くより定評の存する所にして、長俵と云へば熊野木炭を指す程にして其好良無比なる實に全國中其右に出づるものなし、產額にありても大正六年度白炭六百〇六萬千二百七十五貫、價格六十四萬九千百十二圓、黑炭四百三十萬〇四百貫、價格三十七萬五千四百〇三圓に達せり、今之れを郡別すれば左の如くなるべし。

大正六年產額	白消炭	價格	黑消炭	價格
	——貫	——圓	二〇〇、〇〇〇貫	一七、〇〇〇圓
海草郡	八七、八〇〇	九、四三八	二一九、六八〇	一七、四二八
那賀郡	二〇八、七二五	二五、二二三	一三七、五〇〇	一一、七八〇
伊都郡	一、一四二、九五〇	六五、四八六	七一八、二二〇	四三、八八六
有田郡	一、四四〇、〇〇〇	二三五、二〇〇	七八、七〇〇	七、七〇九
日高郡	二、二二七、七〇〇	二三七、七〇五	—	—
西牟婁郡	九五四、一〇〇	七六、〇六〇	二、九四六、三〇〇	二七七、六〇〇
東牟婁郡	—	—	—	—
和歌山市				
計	六、〇六一、二七五	六四九、一一二	四、三〇〇、四〇〇	三七五、四〇三

◎**製炭の沿革**　和歌山縣に於ける製炭業は正德年間紀伊藩に於て殖產振興の主旨より之が奬勵に努め、炭山御仕入方と稱するものを設け和歌山、大和、伊勢の各地に於て薪炭林を買上げ業を起せるに因る、其後藩の直接經營に移り隨時仕入を爲し來れるも、世はいつしか維新の革命となり、廢藩置縣の結果藩の木炭事業は漸次民業に移りたり。

熊野炭の燒方に二種あり、一を土佐燒と唱へ一を備長燒と呼べり、土佐燒は其名の如く往古土佐より傳習せし者にして又備長窯は元祿年間西牟婁郡田邊の人備後屋長右衞門の創始に係れるものにして、爾來此の方法は歲月を逐ふて熾んとなり漸次各地に普及せるものなりとす。

◎**製炭の副業**　醋酸石灰は製炭唯一の副業にして最も有望なる將來を有せり、之が製造に着手せるは明治廿一年頃にして、日高郡南部町の人濱口氏が其工場に於て木材を乾餾し液汁を採取するを見て其方法を炭窯に應用せるに起因せり、爾來木炭の生產地たる日高、西牟婁、東牟婁の三郡に於て之れが製造漸次に旺盛を極むることゝなり、現今にては縣下一ヶ年產額一千貫內外を示すに至る。

以上縷述する處により木炭の大體の沿革及び總說を述べ盡せり、之れより主要各郡に就て述ぶる所あるべし。

◎**統一の機關**　同業者協調統一のもとに因襲の久しきによれる弊害を矯正し業者共同の利福を增進せしむる爲、重要物產同業組合法に據る同業組合は各郡に設置せられ、品質の改善、量目の一定充實、俵裝の統一に專ら意を注き、今や嚴重なる製品檢査を勵行して實蹟を擧げつゝあり、其模範組合とも稱せられ各地に知れ亘れる組合は左の如し。

日高郡木炭木醋酸同業組合
事務所　日高郡御坊町

西牟婁郡木炭同業組合
事務所　西牟婁郡田邊町

古座川木炭同業組合
事務所　東牟婁郡高池町

日高郡

日高郡に於ける木炭製造の由來は恰も幾百年の以前に屬せる爲今之を審かにするを得

ざれども、南部川切目川筋の村落及び日高川流域に沿へる中央部地方より旺んに產出を始めたるに由來し今日尙ほ益々產額の大を見るの傾向にあり、其品質堅く火熱强烈にして長時間に耐へ容易に灰燼に歸せざるの特長あるを以て、需用も頓に增加し聲價を博するに至りたり、然るに明治初年の頃よりは舊時と異なり稍々粗造濫製の傾向ありて其初期に於ての一俵の量目は三貫五百匁を標準とし包裝、口柴等の風袋を控除しても正味三貫匁を有せしに、其後因襲の久しき自然俵數の增加にのみ腐心せる結果、正味二貫五百匁甚しきは二貫匁にも近き減量を示すことゝなり、爲に昔日に比し稍々聲價の幾分をも失墜せんとしたりき。

依て如上減量の弊を防止し、量目の一定、品質の改善、俵裝の完備等を期するには組合を組織し業者の統一を期するの外なきを認むるや、去明治十八年に至り西牟婁郡富田坂以西日高郡南部川、切目川筋に屬する三十六ヶ村の同業を一丸とし、木炭同業組合を設置し次で同二十年日高川筋なる舊船着村外二十八ヶ村の斯業者又合同して組合を組織し、爾來相提携して粗造減量の改善に盡す所ありて其弊を矯正するを得、逐年發達の域に進み販路も又次第に拓け、木炭の品質等又近時著るしく改良され來れり。

而して明治四十年に至るや日高郡を一丸とする日高郡木炭同業組合の設立を見るに至り更に明治四十四年には木醋酸同業組合との合併を遂げ、組合の基礎亦鞏固となり、同郡木炭業の前途に光明を見んとしつゝあり。

今日高川筋より產出する木炭の產額を既往三ヶ年間に於ける統計を以て示せば如左。

年次	木炭量	醋酸石灰量
大正四年度	四六七、三八六俵	……
同五年度	五〇九、六四五	八、〇一二貫
同六年度	五〇二、四一二	九、八四〇

備考　木炭は正味四貫物一分、三貫物四分、二貫五百匁物五分の割合なり。

◎業界の先覺者たる田端昌平氏

日高郡木炭醋酸同業組合長として聲望を荷へる田端昌平氏の創業は慶應元年の頃にして、先代は鹽瀨家より出で、田端家を承繼せる人にして、同氏は紀州の地勢より考察して木炭製造の業を創始せるが、當時木炭界は不振を極め產を傾くるもの續出したるが如き有樣なりしかば、氏も又當初に於ける困苦艱難は實に名狀すべからざる有樣な

りき、然るに堅忍にして不拔なるの剛氣は克く萬難を排し年額五萬俵の木炭を市場に供給するまでに達したり、而して當主昌平氏は先代の沒後其事業を繼ぎ、一意專心以て先代に倍せる努力を注ぎたれば、事業は益々順 の發展を來し今や京阪兩市場よりは業界の重鎭として信望を荷ふに至りたり。近時船腹の不足に基く滯貨の著るしきを示すは郡產業の發展を沮止し同時に當業者は商機を逸することゝなるべければ、之れが救濟は須らく船腹の補充に俟つの外途なしとなし、氏は大正六年中箕島なる石川造船所に於て發動汽船(五十噸一隻)を建造し專ら御坊、大阪間を航海せしめ居れり。

◎業界の權威を以て任ずる三前松一郎氏

一手にて年輸出額二十五萬俵の木炭を市場に供給するの人は業界稀れに見る處にして、世人が口を揃へ三前氏を稱して我木炭界の權威なりと謂ふも敢て故なきに非ざるべし、從つて氏の一擧手一投足は直ちに市場に影響を與ふるの勢力を有す。而して同店木炭製造の由來は、彼の萬葉集に歌人繁里の名を止める熊代家の經營に係る事業を、初代伊平氏が安政二年に繼承して連綿今日に至れるものなり。

現代松一郎氏は他家より入りて三代の後を相續せる人なるが、先代勘平氏の時代にありては販路の關係上驥足を延ばすこと能はざりしも、近時交通の便發達するに伴れ、逐年其產額を增加し來りたり、因みに同店の製品は內外博覽會其他共進會に於て、一等賞金牌並に金盃を受くること前後五回に及べり、爲めに四近同業中其榮譽を讃はざるものなく、市場亦氏の製品を迎ふるもの日に多きを加ふるに至る、今や同店にては專用運炭船として拾餘艘の帆船を所有するの外、田端昌平氏と相前後して神戸藤見造船所に於て三十四噸の發動汽船を建造し阪神航路に充當し居れり、眞 偉なりと謂ふべし。

◎左圖は三前氏の受領にかゝる金牌なり(實物の徑二寸三分五厘)

和歌山縣日高郡南部町
登錄商標 三前木炭店
店主 三前松一郎
長電話三十番電略（ミサキ）又ハ（ミ）

和歌山縣日高郡御坊町
木炭商 田端昌平
電話七十三番電略（タハタ）

和歌山縣日高郡南部町
紀南木炭商會
電話四番

西牟婁郡

往古より木炭製造の業を開始せる土地なるも年代は知る由もなしと雖も、其熊野木炭の聲名は各市場に喧傳せられ、それが移出の紀元にありても縣下最古に屬せるは事實なるが如し、今郡内に於ける現今の薪炭林面積を繹ぬるに三萬七千八百餘町歩、製造窯數一千を超へ産額は縣下第一位を占め居れり、品種は備長、丸備、樫備、備一、大丸、丸淺、上淺、中淺の八種に區分されあるも當業各自に於て如上各種の外に名稱を附せるものあれば、品種は多種多樣に岐れ居れりと謂ふべし。

同郡に於ける同業組合は多少遲蒔の嫌ひありしも去明治四十二年に創設され、爾來專ら製品の改善統一に力を注ぎ、生産地及移出市場に於て嚴重なる檢査を勵行しつゝあるを以て近時著るしく長足の進歩を見るに至れり、而して現時行はるゝ量目は正味二貫五百匁を小俵とし正味四貫匁を大俵とせり、仕向地は東京、大阪、神戸、兵庫、京都、奈良の各市場に亘り全部海運に依りて輸出さる而して同郡既往三ヶ年間に於ける木炭及醋酸石灰の生産額は左表の如し。

年次	木炭數量	醋酸石灰數量
大正四年度	六六八、三〇〇俵	八五、四三〇貫
同五年度	六九五、五〇〇	二六五、九〇〇
同六年度	七四三、〇〇〇	三四四、七〇〇

◎**田邊町**　往時は安藤氏の居邑に屬し現今は郡役所中學校等ありて殷賑を極めつゝあり、されど我木炭の此地へ集中するは至つて微々たるものにて同湊を經由して移出する數量は年額十萬俵を出でず、故に生産地としては數ふるに足らざるなり、然りと雖も同港は早晩修築さるゝ機運に向ひ居るを以て將來港灣としての價値を認めらるゝ曉には附近に於て産出する木炭を此の地に吸引する又難からざれば、或は他日發展を見る場合なきにしもあらず、而して同港より移出する木炭の仕向地は主に大阪市場なり。

◎**新庄村**　同地は田邊港を凌駕するに足るべき良港を有せるのみならず古來より木炭の生産地として其名を知られ、東京へ移出する一ヶ年の額は約二十萬俵なり、同地には有力な

る荷主多く前途有望なりとす。

◎**鮎川村**　田邊港の北部に位し山岳重疊たる地域だけに木炭の生産高に於ても決して新庄村に勝るとも劣ることなし、又副業たる醋酸石灰の製造に至つては郡下を通じて模範を以て稱せらる、彼の新潟醋酸會社の如きは鮎川村の施設に倣ふて事業を經營すべく技術員の招聘を請ふ所あり、又木炭製法に於て他に範を示したるの顯著なる實例としては去大正五年の交、新潟縣津川町の平田重平氏が其所有雜木林二千五百町歩を木炭に製して市場へ供給し以て需供調和の一助ともなさんとし同時に同地林産收入の向上を畫策するに當り紀州備長の製法に則り醋酸石灰の採取をもなさんとなしそれが指導を土地の郡衙に請ひたれば郡衙は指導を仰ぐ上に最善と認めたる西牟婁郡衙に委囑し同郡衙に於ては鮎川村長森脇竹藏氏に諮り森脇氏は斯業に鍛練せる太田六右衛門氏を煩はすことゝなりて結局森脇、太田の兩氏は技術員を引率して津川へ出張し指導任務を全うしたることゝありしは其一例なり。

因みに鮎川村より生産する木炭の仕向地は東京市場が九分を占め居れり。

(八)
木炭問屋　千品榮吉
和歌山縣西牟婁郡新庄村

木炭問屋　眞砂久次郎
和歌山縣西牟婁郡新庄村

(長)
木炭問屋　榎本傳次
和歌山縣西牟婁郡新庄村

(山)
木炭問屋　榎本宇三郎
和歌山縣西牟婁郡新庄村

(久)
木炭商　那須宇之吉
和歌山縣西牟婁郡田邊町江川町
電話三六五番

(六)
木炭、米穀、醋酸石灰、酒、山産物
和歌山縣西牟婁郡鮎川村
商店　太田六右衛門
振替大阪一九〇三四番　電略〇六

(正)
木炭、樫板、醋酸石灰、米穀、山産物
和歌山縣西牟婁郡鮎川村
商店　赤木英一郎
電略（〇正）

木炭、樫板、醋酸石灰並線香商
紀州西牟婁郡鮎川村
松本高次郎
電略（〇八）

◎**日置村**　各林地に於ける製炭事業は舊藩時代より旺盛にして現今年産額拾萬俵を超ゆるも小廻船の直接仕入を爲すもの多き爲め、正確なる統計を示す能はざるは遺憾とする處なり、仕向地は東京、大阪の兩市場に限定され居る狀態なるも何れの市場が多く何れが寡きかは豫想し難く若し東京市場の相場が高調にして船便宜しきを得陸送又貨車の配給ありとすれば悉く東京へ仕向けらるゝ筈なるも、輸送機關の缺陷は資金の回轉を妨ぐるの弊あれば程近き大阪市場へ仕向くるの量を增すことなきにあらざるが如し、今既往五ヶ年間帆船

に依る東京移出の數量は左の如し。

大正元年、六、三七俵。同二年五七、〇三七。同三年四九、八八四。同四年六〇、六六〇。同五年七〇、二三五。

和歌山縣西牟婁郡日置村
(イ) 木炭問屋 羽山次郎吉
長電話八番電略(ハヤマ)又ハ(ハ

和歌山縣西牟婁郡日置村
(さ) 山産物商 植村喜三郎
長電話十一番電略(ウ)又ハ(カネサ

和歌山縣西牟婁郡日置村
(六) 木炭問屋 増田兵右衛門
長電話九番

和歌山縣西牟婁郡日置村
(三) 木炭木材海運業 山下作次郎
長電話十番電略(ヤマ)

和歌山縣西牟婁郡日置村
(イ) 木炭問屋 伊藤瀧藏
長電話十五番電略(イト)

和歌山縣西牟婁郡日置村
(久) 回漕業木炭販賣業 井戸本彦三郎
長電話十四番電略(ヒコ)又ハ(イ)

◎周參見村　同村は安宅峠を隔つて日置村に隣接し木炭の產額は一ヶ年を通して七八萬俵内外に達せり、日置村に比すれば多少の遜色あるも近時上戸川に於て水力電氣の起工さるゝあり、五十キロワットを得る見込にて點燈の餘力は製材方面に使用する計畫なれば、同村の前途は倍々發展向上を見るに至るべく思惟さる、而して木炭にありては現時の產額に甚しく異動なく持續さるべし、それが仕向地は東京、大阪にして東京方面は帆船に依り大阪方面は發動機船を使用せるも船腹不足の爲め常に滯貨夥しく、產地在荷の一掃を見るは容易ならざるが如き狀にあるなり。

和歌山縣西牟婁郡周參見村
木炭木材醋酸石灰米穀販賣 周參松太郎

和歌山縣西牟婁郡周參見村
(一) 木炭問屋 西傳之助商店

和歌山縣西牟婁郡周參見村
木材木炭問屋 森佐太吉

東牟婁郡

和歌山縣東牟婁郡より產する木炭の沿革に就ては具體的に記錄し得るの材料に接せざれば其詳細を知るに由なしと雖も今古老の傳ふる處に依れば、往昔藩政の年代に於て田原村に御仕入方を出張せしめ經營の任に庸らしめたりと云ふも產額微々として振はず主として薪材として大阪地方へ移出せるものゝ如し、超へて明治初年に於て同郡下田原村の人保田新右衛門氏が製炭に從事したるを以て民業の濫觴なりとす、引續きて高池町の人佐藤得四郎氏舊藩主より特に原料職工の供給を得て熱心業に勵みたる結果販路は次第に擴がり熊野木炭の名聲頓に揚り今日の隆昌を來せるなりと。

同郡にては品質、俵裝、量匁の統一を期する目的を以て去明治四十三年、古座川木炭同